

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第721集

令和元年度発掘調査報告書

沼里遺跡 根井沢穴田Ⅳ遺跡 伝吉Ⅱ遺跡
岩洞湖E遺跡 上矢次I遺跡 米崎城跡

ほか調査概報（10遺跡）

2020

(公財)岩手県文化振興事業団

令和元年度発掘調査報告書

序

本県には、旧石器時代をはじめとする約1万数千箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は令和元年度に当センターが発掘調査をした遺跡の調査成果をまとめ、調査報告書及び調査概報として発刊するものです。全県下で16遺跡、約10万㎡が調査され、縄文時代から近世までの遺構、遺物が検出されております。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました委託者をはじめ、地元の各市町村教育委員会及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和2年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 高橋嘉行

目 次

令和元年度発掘調査の概要について 1

I 発掘調査報告

(1) 沼里遺跡（宮古市）.....	5	(4) 岩洞湖E遺跡（盛岡市）.....	61
(2) 根井沢穴田IV遺跡（宮古市）.....	25	(5) 上矢次I遺跡（矢巾町）.....	67
(3) 伝吉II遺跡（洋野町）.....	35	(6) 米崎城跡（陸前高田市）.....	87

II 発掘調査概報

(7) 北条館跡（紫波町）.....	105	(12) 下浜民遺跡（一関市）.....	110
(8) 板橋II遺跡（洋野町）.....	106	(13) 勝善遺跡（一関市）.....	111
(9) 北玉川遺跡（洋野町）.....	107	(14) 根城館跡（一関市）.....	112
(10) 二子城跡（北上市）.....	108	(15) 成田岩田堂館跡（北上市）.....	113
(11) 境・山下遺跡（奥州市）.....	109	(16) 二子城跡（北上市）.....	114

報告書抄録

沼里遺跡（宮古市）.....	115	岩洞湖E遺跡（盛岡市）.....	118
根井沢穴田IV遺跡（宮古市）.....	116	上矢次I遺跡（矢巾町）.....	119
伝吉II遺跡（洋野町）.....	117	米崎城跡（陸前高田市）.....	120

令和元年度発掘調査の概要

令和元年度の発掘調査は、当初12遺跡、112,178m²の計画でスタートしたが、その後4遺跡が追加となり、最終的には16遺跡、103,066m²を調査した。前年度実績18遺跡、51,405m²に比較すると調査面積が倍増している。これは北上市の工業団地への企業誘致に伴う施設整備事業によって、一時に調査面積が増大したものであり、本年度全調査面積の7割以上を占めている。本年度の発掘調査は県内6市3町で行った。全16遺跡の内訳は、通常の開発行為に伴う調査が7件、復興事業に関連する調査が9件となっている。通常調査は、堤防建設などの治水対策事業、企業誘致関連の施設整備事業、河川改修事業、復興関連調査は、防潮堤関連道路建設、三陸沿岸道路建設、県内陸部と沿岸部を接続する復興支援道路事業などである。復興道路である三陸沿岸道路建設では、今年度調査した板橋II遺跡他4遺跡の調査をもって三陸道路本線関係の発掘調査は全て終了した。本年度は各時代にわたり遺構検出数・遺物出土量とも多くなったが、5遺跡で中世城館を調査したことが特筆される。

绳文時代では、洋野町の板橋II遺跡で、草創期の爪形文土器の出土が確認された。同じく、洋野町の伝吉II遺跡では土坑・陥し穴状遺構の他、前期前半頃とみられる長軸約9mの隅丸長方形の住居が1棟見つかっている。宮古市の根井沢穴田IV遺跡でも、前期の住居の一部を確認している。中期では、北上市の成田岩田堂館跡で中期中頃の住居1棟が見つかった。広大な遺跡地に単独で住居が存在する背景を検討する必要がある。後期では、前半の住居1棟が板橋II遺跡で見つかっており、昨年度からの2箇年の調査で後期前半を中心に13棟の住居が確認され、当該地域の核となる集落と考えられる。二子城跡（県受託分）でも、後期前半の住居3棟が見つかっている。他にこの遺跡からは晩期の住居1棟、土器埋設遺構5基などが見つかっている。一閑市の勝善遺跡では明確な形状は把握できなかつたが、ともに石窯炉を持つ晩期の住居2棟が見つかっている。

弥生～古墳時代では、北上市の成田岩田堂館跡で弥生土器が直立に埋設された遺構が見つかっている。陸前高田市の米崎城跡で県内でも希有な古墳時代中期の住居と土器が見つかっている。

奈良～平安時代では、紫波町の北条館跡から2棟の住居、宮古市沼里遺跡で3棟の住居、成田岩田堂館跡で11棟の住居、炭窯6基、鉄滓などが見つかっている。他に、成田岩田堂館跡では11世紀の遺構・遺物も見つかっている。北条館跡では、12世紀代の土坑・溝跡の他、かわらけが出土している。

中世では、北上市からの依頼による二子城跡の調査で、中世城館二子城跡に関連する堀2条が検出された。二子城と密接な関連を持つ成田岩田堂館跡の調査では、北・西の二方を土塁と堀で囲まれた城館であることが明らかになった。南側には出入口施設である門と西門が見つかっている。堀と土塁で囲まれた城館内部北側には、中心となるような大型の掘立柱建物が位置していた。成田岩田堂館跡から出土する陶磁器は16世紀代（戦国時代）に限定され、16世紀に築かれ17世紀（江戸時代）に入る前に廃絶したことが明らかになった。紫波町にある北条館跡は昨年度からの継続調査である。昨年の調査区は、今回の調査区より一段低い南側で、上幅約8mの大きな堀や掘立柱建物などを確認している。今年度の調査では、竪穴建物16棟、掘立柱建物30棟（今後更に増加）、柱列12基、堀3条、土橋1箇所、柱穴3千数百個が見つかっている。遺物では、中国産天目茶碗、明染付、中国産白磁、中国産青磁、瀬戸美濃産陶器、信楽産陶器、水楽通寶や洪武通寶などの銭貨などが出土している。16世紀後半代を中心とした城館であるが、豊臣秀吉による破却令（1592年）で廃絶された可能性も想定されている。

（調査課長 斎藤邦雄）



報告遺跡位置図 数字は発掘調査概報報告番号と共通

I 発掘調査報告

凡 例

・本書で記載されているコンテナの大きさは内寸で下記のとおりである。

大コンテナ：42×32×30cm

中コンテナ：42×32×20cm

小コンテナ：42×32×10cm

・本書では、遺構名称を簡素化し、遺構名称末尾に付す「跡」を省略する。

(例) 堪穴住居跡→堪穴住居、掘立柱建物跡→掘立柱建物、溝跡→溝

(1) 沼里遺跡

所 在 地	岩手県宮古市津軽石第6地割地内ほか	遺跡コード・略号	LG53-1225・NR-19
委 託 者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	調査対象面積	305m ²
事 業 名	三陸沿岸道路	調査終了面積	305m ²
発掘調査期間	令和元年7月1日～7月31日	調査担当者	野中裕貴・八木勝枝

1 調査に至る経過

沼里遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（山田～宮古南）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成25年2月1日付け国東整陸一課第1102号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課総括課長あてに試掘調査を依頼し、平成25年2月5日～7日に試掘調査を行い、平成25年2月18日付け教生第1575号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成31年4月2日付けで公益財團法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)



第1図 遺跡位置図

2 遺跡の位置と立地

遺跡は、宮古市立津軽石小学校から約100m南西側の丘陵地に位置する。本遺跡の調査は、宮古市教育委員会及び当センターにより過去に4度行われており、縄文～弥生時代、奈良～平安時代の集落、平安時代以降の鉄生産関連遺構などが見つかっている。調査区は、平成28年度調査区（現在は三陸沿岸道路宮古南～山田区間）の東側に隣接し、東西方向に延びる小高い尾根の東端に位置している。尾根の南北は谷地形が広がる。調査区の標高は20～30m程度である。また、調査区北側は尾根を回り込むように津軽石川へ注ぐ本の木沢が東流する。

3 グリッド設定・基本層序（第3図）

平成28年度調査のグリッドに準じて、大グリッド20m、小グリッド4mメッシュで設定した。

基本層序は、I～VI層の大きく6層に大別し、ローマ数字で表記した。層序の確認は、谷部で堆積が良好に残る試掘トレンチT8の断面を基準とし、それぞれのトレンチと対比を行って設定した。

I層：10YR4/2～5/2 灰黄褐色土 粘性弱 しまりやや弱 表土。色調・土質で Ia～Ic層に細分。
 II層：10YR3/2 黒褐色土 粘性弱 しまり中 ϕ 1mmマサ土粒10%混入 鉄滓包含。谷部に堆積。
 III層：10YR3/2～3/3 黒褐～暗褐色土 粘性やや弱 しまりやや密 ϕ 1mmマサ土粒2～5%混入
 鉄滓包含。谷部に堆積。色調・土質で IIIa・IIIb層に細分。

IV層：10YR3/2～3/3 黒褐～暗褐色土 粘性やや弱 しまりやや密 ϕ 1mmマサ土粒2%混入

10YR6/6 明黄褐色の十和田中摺テフラ ブロック状に5%混入（南側谷部の遺構検出面）

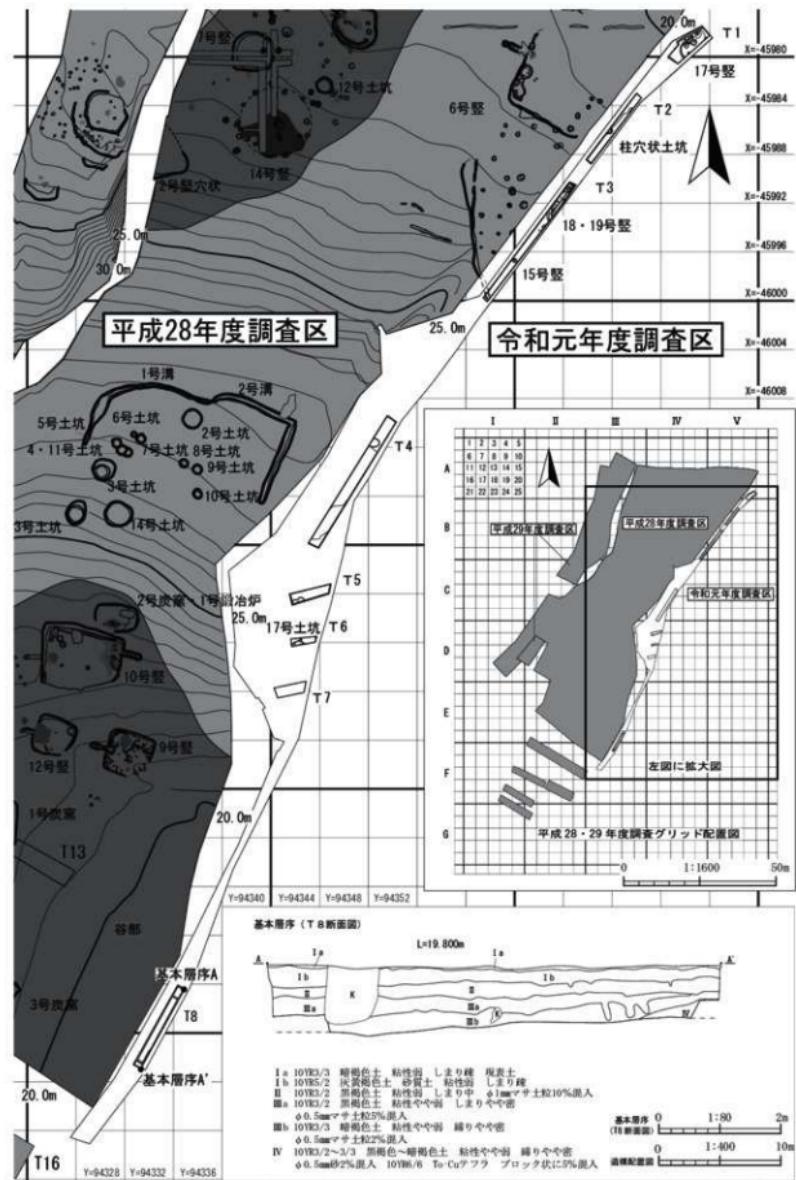
V層：10YR6/6 明黄褐色粘質土 粘性やや強 しまりやや密（尾根北側の遺構検出面）

VI層：10YR7/2 にぶい黄橙色風化花崗岩基盤層 粘性なし しまり密（尾根頂上部の遺構検出面）

尾根北側は、後世の削平により堆積が薄い。南側谷部に堆積するII・III層が鉄滓等の遺物包含層となっている。遺構検出面は、尾根北側がV層、尾根頂上部がVI層、南側谷部がIV層である。



第2図 沼里遺跡周辺地形図



第3図 遺構配置図・基本層序 (T 8断面)

4 調査の概要

今年度の調査対象面積は、305m²である。調査区は、供用中の三陸沿岸道路の東側路側帯に隣接し、重機等の乗り入れが困難な立地であった。また、掘削による道路への土砂流出等を避けるため、全面的な掘削は行わず、周囲の側溝、フェンス等の既設構造物に支障のない範囲でトレーニング調査を進めた。トレーニングは、平成28年度調査で、遺構を確認した地点を参考にT 1～8 の計8箇所を設定し、全て人力で掘削を行った。遺構が確認できたトレーニングは拡張を行い、可能な限り遺構の全体像の把握に努めている。最終的な掘削面積は、調査対象面積の約12%に相当する37m²である。なお、今回の調査では、平成28年度調査時に検出した15号竪穴建物の続きを確認したことから、遺構名は、平成28年度調査時の遺構番号から連番となるように遺構毎の検出順に命名した。

(1) 検出遺構と出土遺物

検出遺構は、古代の竪穴建物3棟、中世以降の可能性のある竪穴建物1棟、土坑1基、柱穴状土坑1個である。出土遺物は、土師器、須恵器、縄文土器、石器、鉄製品、鉄滓である。それぞれの出土量及び点数は、第3表にまとめてあるので参照されたい。なお、鉄滓は分類を行い、個別に表を作成した（第4表参照）。次に、詳細を遺構毎に記載する。

15号竪穴建物（第4図、写真図版1）

〈位置・検出状況〉尾根北側末端部のIV B 14・15・20・25・V B 11・16・21グリッドで黒褐色土のプランとして検出した。検出面はV層上面である。平成28年度調査時に15号竪穴建物として報告した遺構の続きを確認する。調査前から本遺構の検出を想定し、試掘トレーニングはプランを把握できるように設定した。その後、掘削を行い、壁の立ち上がりと床面を確認した。これを受け、遺構内堆積土の比較や図面上の位置関係の検討を行った結果、整合性が確認できたため、15号竪穴建物の続きをすることを改めて確認した。

〈重複関係〉本遺構北側に位置する18・19号竪穴建物と重複していた可能性があるが、不明である。

〈形状・規模〉遺構北側は、削平のため消失している。西壁が残存する。壁はV層を掘り込み、直立気味に立ち上がる。平面形は長方形と推測される。規模は検出部分で11.14×6.04mである。

〈堆積土〉黒褐色土が主体である。壁の周辺には三角堆積が確認できる。堆積状況から自然堆積であると考えられる。

〈付属施設〉今回の調査で、新たに2個の柱穴と焼土1箇所を確認した。全体で見ると、柱穴16個と焼土1箇所を確認している。

〈柱穴〉全体の配置は不明であるが、P 2～7・9・11～13・15・16は一定の間隔を空け、直線上に配置されることから、これらにより構成される建物が想定できる。

〈焼土1〉遺構東側に位置する。平面形は不整形で、規模は17×14cmである。熱変色は弱い。

〈時期〉床面直上より出土した炭化物について放射性炭素年代測定を実施した結果、1633calAD-1669calAD（2σ）の成果が得られた。なお、前回の調査で、本遺構の床面直上より得られた炭化物の年代測定を実施した際に1440calAD-1498calAD（2σ）の成果を得ており、この成果は、今回得られた年代値よりも古い。また、前回の調査では、床面直上より15世紀後半～16世紀代と考えられる中国産の青磁碗が出土していることから本遺構の時期は15世紀以降の中世の遺構と捉えたい。

17号竪穴建物（第5・7図、写真図版2・3・6）

〈位置・検出状況〉尾根北側平坦面のVA24・VB 4グリッドで黒褐色土のプランとして検出した。

検出面はV層上面である。試掘トレンチT 1の掘削時に壁の立ち上がりと床面を確認したことから、堅穴建物と判断し、精査を進めた。

〈形状・規模〉遺構上部及び北側は削平のため消失している。壁はV層を掘り込み、やや外傾して立ち上がる。残存壁から平面形は方形基調と推測される。規模は検出部分で2.87×1.06mであり、全体では一辺4～5m規模の堅穴建物になるものと推測される。

〈堆積土〉黒褐色土が主体である。堆積状況から自然堆積であると考えられる。

〈付属施設〉柱穴5個とカマド1基を確認した。

〈カマド〉北西壁に1基を確認した。左袖部、燃焼部、煙道部が残存する。本体は、黄褐色土により構築されている。また、袖部周辺には花崗岩の小礫が点在しており、これらもカマドの構築材の一部であると推測される。燃焼部焼土は、規模20×22cm、厚さ4cmで強く熱変色している。煙道部は天井部が残存しないため、構築方法は不明である。

〈遺物〉土師器、繩文土器、剥片が床面直上、埋土中より出土した。その内の1～6の6点を掲載した。1・2は土師器の壺の口縁部である。共に内面が黒色処理され、ミガキ調整が施される。3・4は土師器の甕である。3は口縁部で、内外面共にハケ調整が施される。4は床面直上より横倒しの状態で出土した。胴部上半～底部が残存し、底面には木葉痕が確認できる。また、内面の底部付近には炭化物が付着する。5・6は繩文土器の底部である。

〈時期〉カマドの燃焼部焼土直上より出土した炭化物について放射性炭素年代測定を実施した結果、771calAD-893calAD(2σ)の成果が得られた。この成果は、出土遺物の年代観とも概ね整合する。のことから、本遺構の時期は8世紀後半～9世紀前半であると考えられる。

18号堅穴建物（第6・7図、写真図版3・4・6）

〈位置・検出状況〉尾根北側末端部のV B 16・17・21グリッドで黒褐色土のプランとして検出した。検出面はV層上面である。試掘トレンチT 3の掘削時に壁の立ち上がりと床面を確認したことから、堅穴建物と判断し、精査を進めた。

〈重複関係〉19号堅穴建物と重複し、本遺構が19号堅穴建物より新しい。

〈形状・規模〉遺構上部及び北側は、後世の削平のため消失したものと考えられる。残存壁から平面形は方形もしくは円形と推測される。壁はV層を掘り込み、やや外傾して立ち上がる。規模は検出部分で2.83mである。

〈堆積土〉黒褐色土が主体である。19号堅穴建物の埋没後に、新たに掘り込まれて形成されている。床面は黄褐色土により貼床が施されている。

〈付属施設〉柱穴2個を確認した。この内のP 2は壁外に位置し、本遺構に伴うか不明である。

〈遺物〉土師器、繩文土器、剥片、鉄滓が埋土中より出土した。その内の7～10の4点を掲載した。7～10は土師器の甕である。7は口縁部で、緩やかに外反する。8・9は胴部で、8の頭部下にはわずかな段が認められる。10は底部である。

〈時期〉出土遺物の年代観及び周辺の遺構の年代観から本遺構の時期は8世紀後半～9世紀前半である可能性が考えられる。

19号堅穴建物（第6・7図、写真図版4・6）

〈位置・検出状況〉尾根北側末端部のV B 16・17・21グリッドで、18号堅穴建物の貼床（黄褐色土）を除去した際に黒褐色土のプランとして検出した。検出面は、V層上面である。試掘トレンチT 3の

(1) 沼里遺跡

断面を観察した際に18号竪穴建物の貼床下に新たな遺構の壁の立ち上がりと床面を確認した。その後、貼床を除去し、黒褐色プランが確認できたため、古期の竪穴建物と判断し、精査を進めた。

〈重複関係〉18号竪穴建物と重複し、本遺構が18号竪穴建物より古い。

〈形状・規模〉遺構上部は、18号竪穴建物に壊され、消失している。壁はV層を掘り込み、やや直立気味に立ち上がる。残存壁から平面形は方形もしくは円形と推測される。規模は検出部分で2.34mである。

〈堆積土〉黒褐色土が主体である。19号竪穴建物の埋没後に、新たに掘り込まれて形成されている。

〈遺物〉土師器、須恵器、縄文土器、剥片、石器が埋土中より出土した。その内の11～14の4点を掲載した。なお、磨石1点が出土したが、細片のため図化しなかった。11は土師器の甕の胴部で、内面に炭化物が付着する。12は須恵器の甕の胴部で、外面にタタキ調整が施される。13・14は縄文土器の胴部である。

〈時期〉出土遺物の年代観及び重複関係から本遺構の時期は8世紀後半～9世紀前半である可能性が考えられる。

17号土坑（第6図、写真図版4）

〈位置・検出状況〉尾根南側斜面部のIV D 6・11グリッドで、黒褐色土のプランとして検出した。検出面はVI層上面である。

〈形状・規模〉斜面部に位置するため遺構上部は消失している。平面形は円形と推測される。壁はVI層を掘り込み、やや外傾して立ち上がる。規模は、検出部分で径1.12mである。

〈堆積土〉黒褐色土が主体である。

〈遺物〉なし。

〈時期〉詳細な時期は不明である。

柱穴状土坑（第6図、写真図版5）

尾根北側の試掘トレンチT 2で1個を検出した。検出面はV層上面である。平面形は円形で、規模は径45cm、深さ30cmである。堆積土は黒褐色土が主体である。詳細な時期は不明である。

（2）遺構外出土遺物

遺構外出土遺物15～20の6点を掲載した。次に詳細を記載する。

T 1（第7図、写真図版6）

15の1点を掲載した。15は土師器の壺の底部～胴部である。丸底の壺で内面は黒色処理され、ミガキ調整が施される。

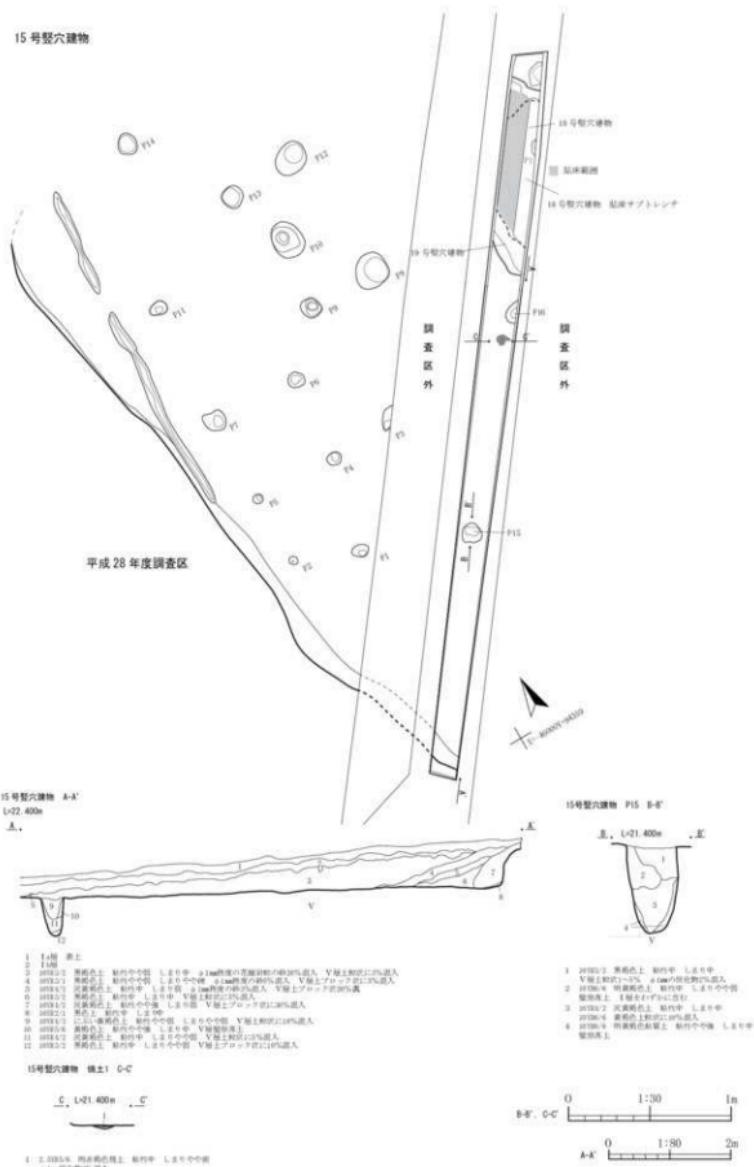
T 8（第7図、写真図版6）

16～20の5点を掲載した。16～18の3点は縄文時代中期中葉の土器である。いずれも大木8b式の深鉢の胴部で、隆沈線による渦巻文が施される。19・20の2点は角釘である。この他にも図化は行わなかったが、磨石2点、鉄滓が出土した。鉄滓の分類では炉底滓が大半を占める。

5まとめ

今回の調査では、尾根北側で、8世紀後半～9世紀前半と考えられる竪穴建物3棟と平成28年度調査で確認した中世以降と考えられる竪穴建物1棟の続きを検出した。平成28年度調査では、尾根北側

15号豎穴建物



第4図 15号豎穴建物

(1) 沼里遺跡

17号竪穴建物

平成28年度調査区

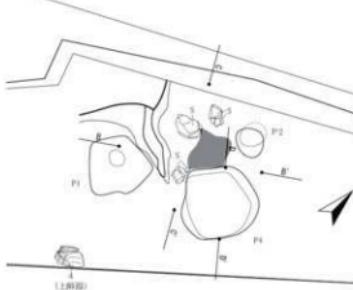
調査区外

X
EASTING
WESTING

Y
NORTHING
SOUTHING

調査区外

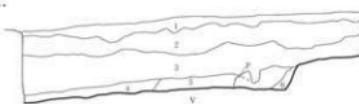
17号竪穴建物 カマド拡大



(上斜面)

17号竪穴建物 L=20.500m

主.



V

17号竪穴建物 カマド C-C'

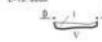
L=18.600m



1 カマド壁面の上部
2 カマド壁面の上部 壁面中 線り小穴
3 カマド壁面の下部と同

17号竪穴建物 P4 D-D'

L=19.600m



1 10H3/2黒褐色土、粘性半、縫り小穴
2 10H3/3の分化物1%、粘土質1%混入

17号竪穴建物 カマド B-B'

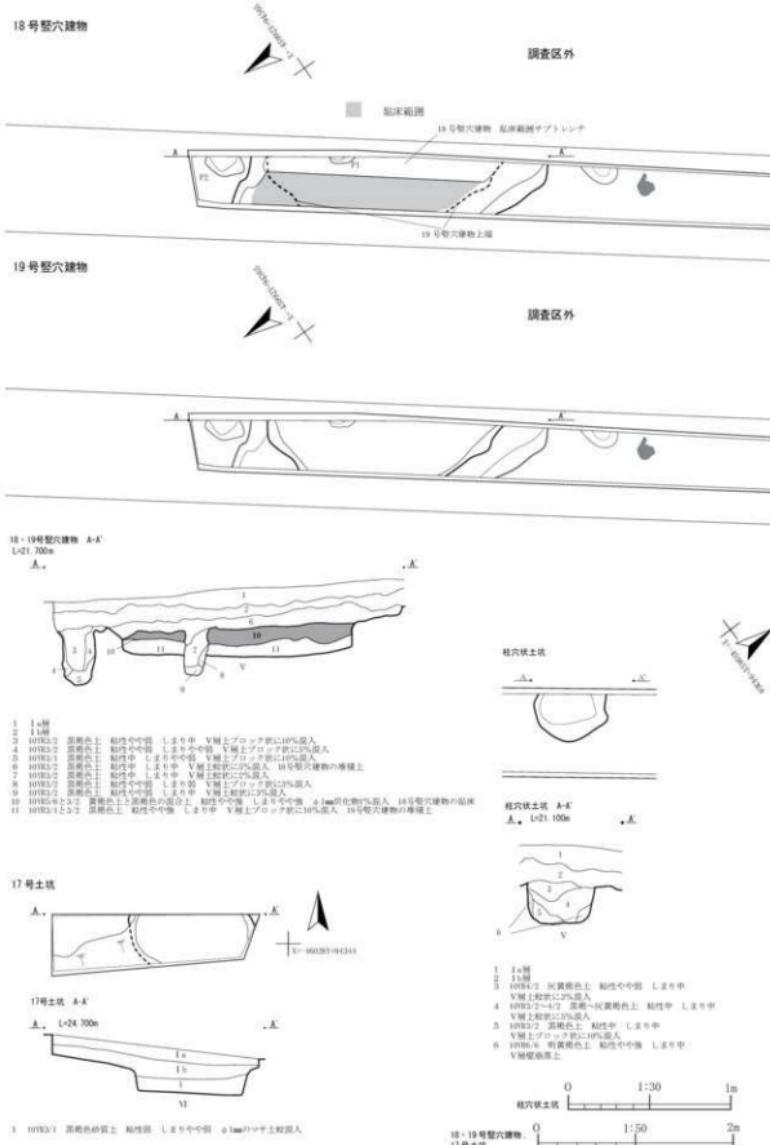
L=19.800m



- 1 10H2/2 黑褐色土、粘性半、縫り小穴 31H6/2褐色土上部10%混入、10H6/6 カマド構築上3%混入
- 2 10H2/2 灰褐色土上、粘性半、縫り小穴 31H6/6褐色土上部10%混入、10H6/6 カマド構築上5%混入
- 3 10H2/4/6 黄褐色土、粘性半、縫り小穴 31H6/4褐色土上部10%混入、10H6/6 カマド構築上10%混入
- 4 10H2/4 黄褐色土、粘性半、縫り小穴 31H6/4褐色土上部10%混入、V層上部10%混入
- 5 2.5H5/3 黄褐色土上、粘性半、縫り小穴



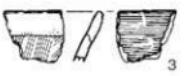
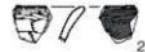
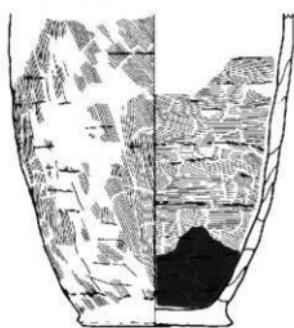
第5図 17号竪穴建物



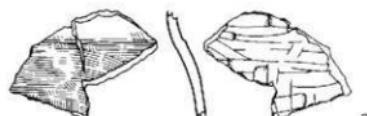
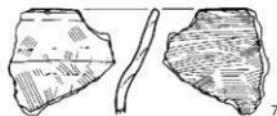
第6図 18・19号竪穴建物 17号土坑 柱穴状土坑

(1) 沼里遺跡

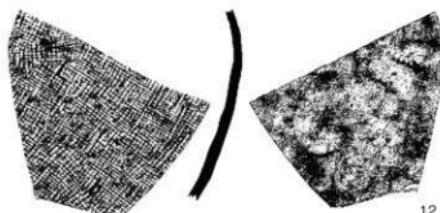
17号竪穴建物



18号竪穴建物



19号竪穴建物



T1



T8



16



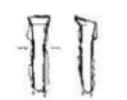
17



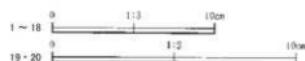
19



18



20



第7図 出土遺物

で奈良時代の集落が確認できており、今回検出した遺構とも年代が概ね一致する。のことから、前回の調査範囲東側まで集落が広がるものと考えられる。また、尾根南側の谷部では、少量ながらも鉄滓が出土しており、周辺に製鉄関連遺構の存在が想定される。

遺物に関しては、古代の土器類を主体に縄文土器等が出土した。中でも、これまでの調査で確認できなかった縄文時代中期中葉の土器が見つかったことから、本遺跡が長きにわたって生活地として利用されてきたことを改めて確認することができた。

なお、沼里遺跡令和元年度調査に關わる報告はこれをもって全てとする。

(引用・参考文献)

宮古市教育委員会2003『上根井沢I遺跡、沼里遺跡一市内遺跡発掘調査報告書3-1』宮古市埋蔵文化財調査報告書60

岩文理2015『津軽石大森遺跡発掘調査報告書』岩文理報第641集

岩文理2018『沼里遺跡発掘調査報告書』岩文理報第684集

岩文理2018『(6)沼里遺跡』平成29年度発掘調査報告書』岩文理報第692集

第1表 土器観察表

本番号	出土地点	層位	種別	器種	現在位置	色調	主な文様・調査・特徴			施部	黏土	備考
							外側	内面				
1	17号壁	埋土中	土器部	灰	口縁部	内 2.5V3R7.4にぶい黒 外 10V3L1.2	ハサメ	内 10V3L1.2(黒色光沢) 外 10V3L1.2(黒色光沢)	1.ガホ	石灰、青母 (黒色光沢)	石灰、青母 (黒色光沢) 外側に赤色鉛釉 わずかに分離	
2	17号壁	埋土中	土器部	灰	口縁部	内 10V3L1.2(黒) (縄文付近) 10V3R5.2にぶい黒高輪 外 10V3L1.2(黒)	1.ガホ (口縁付近黒化) ハサメ	内 10V3L1.2(黒色光沢) 外 10V3L1.2(黒色光沢)	1.ガホ (黒色光沢)	石灰、タリヤ	石灰、タリヤ	
3	17号壁	埋土中	土器部	黑	口縁部	内 2.5V3R6.4にぶい黒 外 2.5V3R6.4にぶい黒	ハサメ	内 2.5V3R6.4にぶい黒 外 2.5V3R6.4にぶい黒	ハサメ	石灰、青母 (黒色光沢)	石灰、青母 (黒色光沢)	
4	17号壁 (カット)	表面土上、埋土中	土器部	黑	脚・底面	内 2.5V3R7.4にぶい黒 外 2.5V3R7.4にぶい黒	ハサメ	内 2.5V3R7.4にぶい黒 外 2.5V3R7.4にぶい黒	ハサメ	石灰、青母 (黒色光沢)	石灰、青母 (黒色光沢) 内側に高化物付着	
5	17号壁	埋土中	縄文	深鉢	脚・底部	内 10V3L1.2にぶい黒高輪 外 10V3L1.2にぶい黒高輪	縄文BL	ナガ(黒)	ナガ(黒)	ナガ(黒)	ナガ(黒)	
6	17号壁	埋土中	縄文	鉢?	脚部	内 10V3L1.2にぶい黒高輪 内 10V3L1.2にぶい黒高輪		ナガ?	ナガ?	ナガ(黒) 銅代焼	石灰、黑色光沢 ナガ(黒)	
7	18号壁	埋土中	土器部	黑	口縁部→脚部	内 2.5V3R6.4にぶい黒 外 2.5V3R6.4にぶい黒	ハサメ	内 2.5V3R6.4にぶい黒 外 2.5V3R6.4にぶい黒	ハサメ	石灰、青母 (黒色光沢)	石灰、青母 (黒色光沢)	
8	18号壁	埋土中	土器部	黑	脚・底部	内 2.5V3R6.4にぶい黒 外 10V3L1.2にぶい黒高輪	ハサメ	内 2.5V3R6.4にぶい黒 外 10V3L1.2にぶい黒高輪	ハサメ	石灰、黑色光沢 鉄粉	石灰、黑色光沢 鉄粉	
9	18号壁	埋土中	土器部	黑	脚部	内 10V3L1.2(黒) 外 10V3L1.2(黒)	ハサメ	内 10V3L1.2(黒) 外 10V3L1.2(黒)	ハサメ	石灰、青母 (黒色光沢)	石灰、青母 (黒色光沢)	
10	18号壁	埋土中	土器部	黑	脚部	内 2.5V3R6.4にぶい黒 外 10V3L1.2にぶい黒高輪	ハサメ?	内 2.5V3R6.4にぶい黒 外 10V3L1.2にぶい黒高輪	ハサメ?	本秦瓦	石灰	
11	19号壁 (18号壁延長下)	土器部	黑	脚部	内 2.5V3R6.4にぶい黒 外 10V3L2.2(黒)	ハサメ	内 2.5V3R6.4にぶい黒 外 10V3L2.2(黒)	ハサメ	石灰、黑色光沢 内側にヌス	石灰、黑色光沢 内側にコゲ付着		
12	19号壁 (18号壁延長下)	板状器	要	脚部	内 10V3L1.2(黒) 外 10V3L1.2(黒)	タクテ	内 10V3L1.2(黒) 外 10V3L1.2(黒)	タクテ	石灰、黑色光沢 鉄粉	石灰、黑色光沢 内側に一部自然剥離付着		
13	19号壁 (18号壁延長下)	縄文	深鉢	脚部	内 2.5V3R7.6(黒)	縄文BL	ナガ(黒)	ナガ(黒)	ナガ(黒)	ナガ(黒)	ナガ(黒)	
14	19号壁 (18号壁延長下)	縄文	深鉢	脚部	内 2.5V3R7.6(黒) 外 10V3L1.2にぶい黒高輪	縄文BL	ナガ(黒)	ナガ(黒)	ナガ(黒)	ナガ(黒)	ナガ(黒)	
15	T1	黒褐色土	土器部	灰	脚・底部	内 10V3L1.2にぶい黒 外 10V3L1.2(黒)	タツリ	内 10V3L1.2(黒) (黒色光沢)	1.ガホ	石灰、黑色光沢 鉄粉	石灰、黑色光沢 鉄粉	
16	T8	墨屋	縄文	深鉢	脚部	内 2.5V3R6.4にぶい黒 外 10V3R4.2(黒)	縄文BL及→漆汎用に なる漆器	内 2.5V3R6.4にぶい黒 外 10V3R4.2(黒)	ナガ(黒)	石灰	縄文時代中期中葉 大木燒式	
17	T8	墨屋	縄文	深鉢	脚部	内 2.5V3R6.4にぶい黒 外 10V3R4.2(黒)	縄文BL及→漆汎用に なる漆器	内 2.5V3R6.4にぶい黒 外 10V3R4.2(黒)	1.ガホ(黒)	石灰、砂 タリヤ	縄文時代中期中葉 大木燒式	
18	T8	墨屋	縄文	深鉢	脚部	内 2.5V3R6.4にぶい黒 外 10V3R4.2(黒)	縄文BL及→漆汎用に なる漆器	内 2.5V3R6.4にぶい黒 外 10V3R4.2(黒)	ナガ(黒)	石灰、砂	縄文時代中期中葉 大木燒式	

第2表 鉄製品観察表

本番号	出土地点・層位	種別	残存部位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考	
								内	外
19	T8	墨屋	鉄釘				0.7	0.69	7.5
20	T8	表土	鉄釘				1.2	1.0	41

第3表 令和元年度出土遺物重量・数量計測表

重量(g)	点数	現量(g)			鉄製品	
		土器類	鉄滓類	調片類	石器	
1012.2	1					
1501	94					
161.3	1	1				
50.6						
	87.7					
	1					
59.9	1282.4			2	2	
1434.1	1379.5	5	3	2		

第4表 令和元年度出土鉄洋種別重量計測表

種別	重量(g)		
	内	内洋	外
T2	87.7		
T3		9.4	
T8	37.1		1245.3
合計	1248	9.4	1245.3
			1379.5

沼里遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

沼里遺跡は、岩手県宮古市津軽石第6地割地内（北緯 $39^{\circ} 34' 49''$ 、東経 $141^{\circ} 55' 53''$ ）に所在する。測定対象試料は、2棟の堅穴建物のカマド焼土直上と床面直上からそれぞれ出土した木炭2点である（表1）。推定年代は、試料1が出土遺物の年代観から7世紀から8世紀頃、試料2が過去の測定事例から15世紀頃と考えられている。

2 測定の意義

遺構の年代決定のため。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA : Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置（NEC社製）を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として測る年代である。年代値の算出には、Libbyの半滅期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がそ

の誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが¹小さい (¹⁴Cが少ない) ほど古い年代を示し、pMCが¹100以上 (¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暈年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度とともに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暈年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暈年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暈年較正年代を表す。暈年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暈年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.3較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暈年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暈年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表1・2に示す。

試料1の¹⁴C年代は $1190 \pm 20\text{yrBP}$ 、暈年較正年代 (1σ) は $778 \sim 881\text{cal AD}$ の間に3つの範囲で示される。8世紀から9世紀頃の年代値で、推定された年代と一致するか、やや新しい。

試料2の¹⁴C年代は $260 \pm 20\text{yrBP}$ 、暈年較正年代 (1σ) は $1641 \sim 1664\text{cal AD}$ の範囲で示され、推定年代よりも新しい結果となった。なお、この較正年代については、記載された値よりも新しい可能性がある点に注意を要する (表2下の警告参照)。また、この試料が含まれる日本列島周辺の近世における暈年較正に関しては、IntCalに表れない較正曲線のウイグルの存在など、細部においてIntCalと異なる可能性が指摘されている (中尾ほか2015、坂本ほか2015)。このため、今回IntCalで較正された試料の較正年代についても、日本産樹木年輪試料のデータに基づいて較正すれば、若干異なる年代値となる可能性がある。

今回測定された試料はいずれも木炭であることから、以下に記述する古木効果を考慮する必要がある。

樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる (古木効果)。今回測定された試料2点は樹皮が確認されていないことから、木炭となった木が死んだ年代は測定された年代値よりも新しい可能性がある。

試料の炭素含有率は、試料1が67%、試料2が57%のおおむね適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51 (1), 337–360

(1) 沼里遺跡

- 中尾七重 2015 近世日本産樹木年輪の炭素14年代—建基部材とのマッチング、日本文化財科学会第32回大会研究発表要旨集、日本文化財科学会、134–135
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0–50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869–1887
- 坂本稔 2015 近世日本産樹木年輪の炭素14年代—校正曲線からの特徴的な乖離、日本文化財科学会第32回大会研究発表要旨集、日本文化財科学会、38–39
- Suiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data. Radiocarbon 19 (3), 355–363

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正値)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (%) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-190470	1	17号堅穴建物 カマド焼土	木炭	AAA	-26.00 ± 0.20	1,190 ± 20	86.26 ± 0.24
IAAA-190471	2	15号堅穴建物 床面直上	木炭	AAA	-30.16 ± 0.18	260 ± 20	96.88 ± 0.26

[IAA 登録番号: #9694]

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、曆年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	1 σ 曆年代範囲		2 σ 曆年代範囲	
	Age(yrBP)	pMC (%)		778calAD–792calAD (12.3%)	802calAD–843calAD (34.6%)	856calAD–881calAD (21.3%)	771calAD–893calAD (95.4%)
IAAA-190470	1,200 ± 20	86.08 ± 0.24	1,187 ± 22	778calAD–792calAD (12.3%)	802calAD–843calAD (34.6%)	856calAD–881calAD (21.3%)	771calAD–893calAD (95.4%)
IAAA-190471	340 ± 20	95.85 ± 0.26	255 ± 21	1,641calAD–1,664calAD (68.2%)*	1,528calAD–1,545calAD (5.2%)*	1,633calAD–1,669calAD (76.5%)*	1,781calAD–1,799calAD (13.6%)*

[参考値]

*Warning! Date may extend out of range

(この報告は較正プログラム OxCal が発行するもので、試料の ^{14}C 年代に対応する較正年代が、当該曆年較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性があることを表す。)

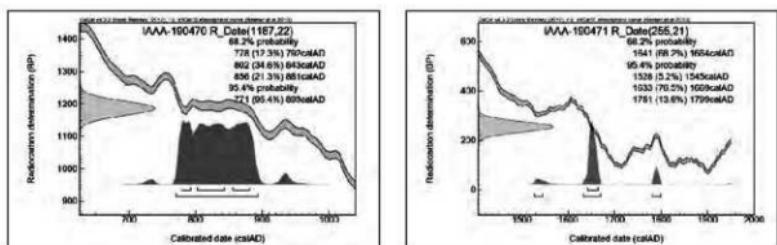


図1 曆年較正年代グラフ（参考）



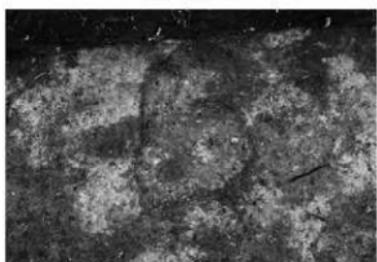
全景 (NE →)



断面 (NW →)



断面 (SW →)



焼土 1 全景 (W →)



焼土 1 断ち割り (S →)



P15 断面 (W →)



P16 断面 (W →)

写真図版 1 15 号竪穴建物

(1) 沼里遺跡



全景 (SE →)



断面 (NW →)



カマド 全景 (SE →)



カマド 断面 A-A' (SE →)

写真図版2 17号竪穴建物(1)



17号竪穴建物カマド 断面 B-B' (SW →)



17号竪穴建物カマド 断ち割り (SE →)



17号竪穴建物 残物出土状況 (NW →)



17号竪穴建物 P4 断面 (SW →)



18号竪穴建物 全景 (NE →)

写真図版3 17号竪穴建物(2)・18号竪穴建物

(1) 沼里遺跡



19号竪穴建物 全景 (NE→)



18・19号竪穴建物 断面 (W→)



17号土坑 全景 (SE→)



17号土坑 断面 (S→)

写真図版4 18・19号竪穴建物・17号土坑



柱穴状土坑 断面 (SE →)



T 1～3 全景 (SW →)



T 5～7 全景 (SW →)



T 2 全景 (SW →)



T 4 全景 (N →)



T 5 全景 (NW →)



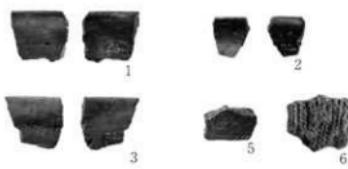
T 8 全景 (S →)



T 8 断面 (SW →)

写真図版5 柱穴状土坑・トレンチ全景・断面

17号竪穴建物



18号竪穴建物



19号竪穴建物



T 8



1~18 S : 1/3
19·20 S : 1/2

写真図版6 17~19号竪穴建物、T 1·T 8出土遺物

(2) ないわあなた
根井沢穴田IV遺跡

所 在 地	岩手県宮古市津軽石第19地割地内ほか	遺跡コード・略号	LG53-2201・NSAIV-19
委 託 者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	調査対象面積	158m ²
事 業 名	三陸沿岸道路	調査終了面積	158m ²
発掘調査期間	令和元年8月1日～8月28日	調査担当者	野中裕貴・高木晃

1 調査に至る経過

根井沢穴田IV遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（山田～宮古南）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成24年11月9日付け国東整陸一課第1005号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課総括課長あてに試掘調査を依頼し、平成24年11月13日～14日に試掘調査を行い、平成24年11月15日付け教生第1325号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成31年4月2日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)



第1図 遺跡位置図

2 遺跡の位置と立地

遺跡は、三陸鉄道リアス線津軽石駅から南西約1.1kmの横井沢によって形成された河岸段丘に位置する。当センターにより過去に3度の調査が行われており、弥生時代後期の集落や14世紀代の製鉄工房が見つかっている。調査区は平成28年度調査区（現在は三陸沿岸道路宮古南～山田区間）の東側に隣接し、東西方向に延びる小高い尾根の南斜面に位置している。調査区の標高は24～27mである。

3 グリッド設定・基本層序（第3図）

平成28年度調査のグリッドに準じて、大グリッド100m、小グリッド5mメッシュで設定した。

基本層序は、I～IV層の大きく4層に大別し、ローマ数字で表記した。層序の確認は、それぞれのトレンチと対比を行って設定した。

I層：10YR4/2 灰黄褐色土 粘性弱 しまり弱 表土。

II層：10YR3/2 黒褐色土 粘性やや弱 しまり中 ϕ 5mmマサ土粒10%混入

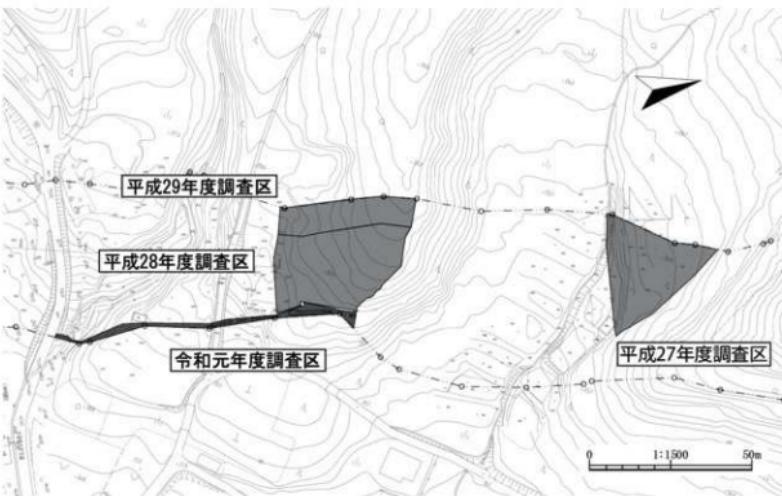
III層：10YR6/6 明黄褐色粘質土 粘性やや強 しまり中（遺構検出面）

IV層：10YR7/2 風化花崗岩基盤層 粘性なし しまり密（SK02の下層で確認。）

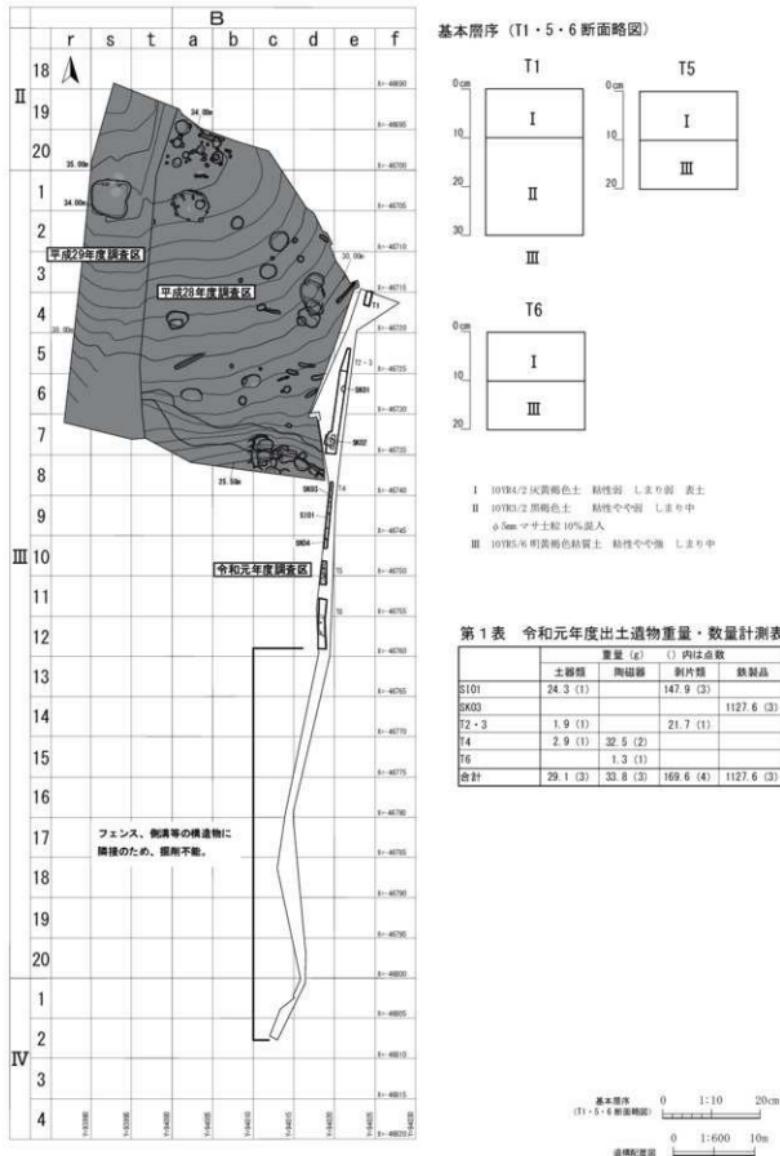
全体的に後世の削平により堆積が薄い。II層はT 1・2で確認した。遺構検出面は、III層上面である。

4 調査の概要

今年度の調査対象面積は、158m²である。調査区は、供用中の三陸沿岸道路の東側路側帯に隣接し、重機等の乗り入れが困難な立地であった。また、掘削による道路への土砂流出等を避けるため、全面的な掘削は行わず、調査区南側の側溝、フェンス等の既設構造物に支障のない範囲でトレンチ調査を行った。トレンチは、前回の調査で遺構を確認した地点を参考にT 1～6の計6箇所を設定し、全て人力で掘削を行った。遺構が確認できたトレンチは拡張を行い、可能な限り遺構の全体像の把握に努めている。最終的な掘削面積は、調査対象面積の約15%に相当する24m²である。



第2図 横井沢穴田IV遺跡周辺地形図



(1) 検出遺構と出土遺物

検出遺構は、縄文時代前期初頭の堅穴住居1棟、近現代の家畜墓2基、時期不明の土坑2基である。出土遺物は、縄文土器、陶磁器、剥片、鉄製品、家畜骨である。それぞれの出土量及び点数は、第1表にまとめているので参照されたい。また、家畜骨に関しては部位の同定を行い、計測可能なものに関して個別に表を作成した(第4・5表参照)。次に、遺構毎の詳細を記載する。

S101(第4・5図、写真図版1・3)

〈位置・検出状況〉調査区中央の緩斜面部ⅢB 9d・10dグリッドで、試掘トレンチT4の最下面の暗褐色土のプランとして検出した。検出面はⅢ層上面である。壁の立ち上がりと床面を確認したことから堅穴住居と判断し、精査を進めた。

〈重複関係〉SK04と重複する。本遺構埋没後にSK04が形成されるため、SK04より古い。

〈形状・規模〉遺構上部は削平のため消失している。壁はⅢ層を掘り込み、直立気味に立ち上がる。平面形は壁より方形もしくは円形と推測する。検出部分の北壁から南壁の規模は3.49mである。

〈堆積土〉暗褐色土が主体である。堆積状況から自然堆積であると考えられる。

〈遺物〉床面直上より縄文土器、剥片が出土した。1は縄文土器で、深鉢の胴部である。外面に結束羽状縄文が菱形状に展開する。また、胎土には纖維が多量に含まれる。

〈時期〉出土遺物の年代観から本遺構の時期は縄文時代前期初頭と考えられる。

SK01(第4図、写真図版1)

〈位置・検出状況〉調査区北側の斜面部ⅢB 6eグリッドで、灰黄褐色土と明黄褐色土の混合土のプランとして検出した。検出面はⅢ層上面である。遺構は調査区外へと延びる。壁面崩落の恐れがあり、底面までの完掘を行っていない。ボーリングで把握した底面レベル、推定断面形を図示した。

〈形状・規模〉カクランの影響を受け、遺構上部は消失している。平面形は長方形と推測される。壁はⅢ層を掘り込み、直立する。規模は短軸で0.59m、深さ1.55m前後と推測される。

〈堆積土〉灰黄褐色と明黄褐色土の混合土が主体である。堆積状況から人為堆積の可能性がある。

〈時期〉出土遺物がなく、時代の推定はできない。平面形から近世墓の可能性も考えられる。

SK02(第4図、写真図版1)

〈位置・検出状況〉調査区北側の斜面部ⅢB 7dグリッドで、黒褐色土のプランとして検出した。検出面はⅢ層上面である。

〈重複関係〉なし。

〈形状・規模〉カクランの影響を受け、遺構上部は消失している。平面形は楕円形と推測される。壁は、Ⅲ層を掘り込んで、やや外傾して立ち上がる。規模は、1.02×1.4m前後と推測される。

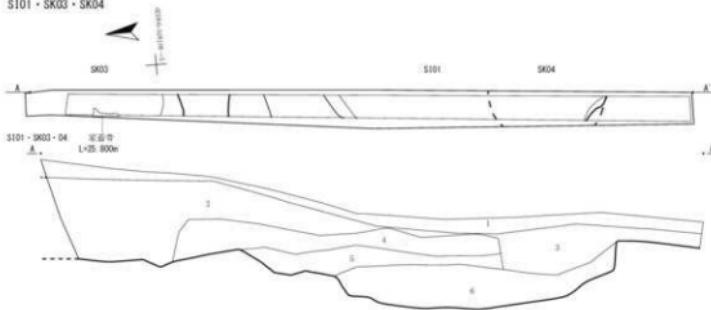
〈堆積土〉黒褐色土が主体である。

〈時期〉出土遺物がなく、時代の推定はできない。

SK03(第4・5図、写真図版1・3)

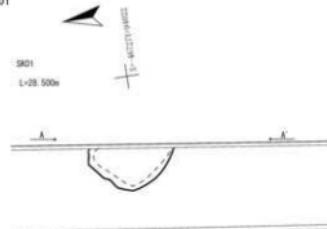
〈位置・検出状況〉調査区中央の緩斜面部ⅢB 8d・9dグリッドで検出した。試掘トレンチT4の掘削時に家畜骨を包含し、他と土質の異なる褐色堆積土を確認したことから土坑状の遺構の存在が想定できた。その後、トレンチ断面で改めて壁の立ち上がりを確認したことから本遺構の存在が判明した。

SI01・SK03・SK04

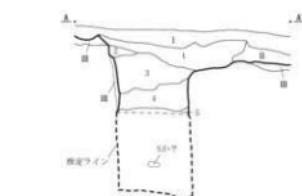
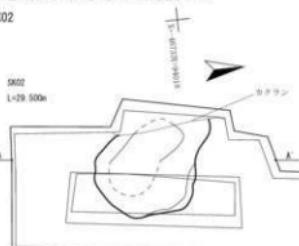


- 1 10782.3 黄褐色土 粘性弱 しまり弱 みどり強 黒木地多 青土
 2 7.578.4 桜色土 粘性弱 しまり弱 褐青 黄褐色土(0.1m)上
 3 2.515.2 黄褐色土 粘性弱 しまりやや弱 黄褐色土(0.1m)上
 4 1.402.2 黄褐色土 粘性弱 しまりやや弱 黄褐色土(0.1m)上
 5 2.572.2 黄褐色土 粘性弱 しまりやや弱 黄褐色土(0.1m)上
 6 5.973.3 黄褐色土 粘性弱 しまりやや弱 黄褐色土(0.1m)上

SK01



SK02



- 1 10786.6 黄褐色土 粘性弱 しまりやや弱 c.1mmササ上約20%混入
 2 10786.6 黄褐色土 粘性弱 しまりやや弱 黄褐色土(0.1m)上
 3 10784.2と2.0 黄褐色土 黄褐色土(0.1m)上
 4 10784.2と2.0 黄褐色土 黄褐色土(0.1m)上
 5 10784.2と2.0 黄褐色土 黄褐色土(0.1m)上
 6 10784.2と2.0 黄褐色土 黄褐色土(0.1m)上
 7 10784.2と2.0 黄褐色土 黄褐色土(0.1m)上
 8 10784.2と2.0 黄褐色土 黄褐色土(0.1m)上
 9 10784.2と2.0 黄褐色土 黄褐色土(0.1m)上
 10 10783.7 黄褐色土 粘性弱 しまりやや弱 1mmササ上約10%混入
 11 10783.7 黄褐色土 粘性弱 しまりやや弱 1mmササ上約10%混入

- 1 10785.3 黄褐色土 粘性強 しまり中 露り上 砂土
 2 10786.6 黄褐色土 粘性弱 しまりやや弱 1mmササ上
 3 10786.6 黄褐色土 粘性弱 しまりやや弱 1mmササ上
 4 10783.2 黄褐色土 粘性弱 しまりやや弱 黄褐色土
 5 10783.4 黄褐色土 粘性弱 しまりやや弱 黄褐色土
 6 10783.4 黄褐色土 粘性弱 しまりやや弱 黄褐色土
 7 10783.4 黄褐色土 粘性強 しまり弱 1mmササ粒状(0.1m)上
 8 10783.4 黄褐色土 粘性強 しまり弱 1mmササ粒状(0.1m)上
 9 10783.4 黄褐色土 粘性強 しまり弱 1mmササ粒状(0.1m)上

第4図 SI01・SK01～04



(2) 根井沢穴田IV遺跡

〈形状・規模〉平面形は不明である。壁はやや外傾して立ち上がる。規模は検出部分で1.50mであり、全体は2mを超えるものと推測される。

〈堆積土〉褐色土が主体である。

〈遺物〉鉄製品3点及び家畜骨が出土し、鉄製品全点を掲載した。2~4は蹄鉄で、2は後蹄鉄、3・4は前蹄鉄である。家畜と共に副葬したと考えられる。全て尋常蹄鉄で、下面に溝がみられる他、鉄唇が残存する。釘穴は2・4が6本、3が8本と推測される。家畜骨はウマ、ウシ、イスがある。埋土上へ中位に集中し、ある程度、解剖学的原位置を留めているとみられたが、トレンチ内での作業のため正確には把握できなかった。骨は一部に毛皮が残存しており、埋葬から数十年程度と考えられる。完存する四股骨の計測値を第5表に示した。この内、No.2のウマ大腿骨最大長は473.5mmで非常に大型であることが特徴である。

〈時期〉出土遺物の年代観から本遺構の時期は近現代である。

S K 0 4 (第4図)

〈位置・検出状況〉調査区中央の緩斜面部Ⅲ B 9d・10dグリッドで検出した。試掘トレンチT 4の掘削時にSK03とは土質の異なる黒褐色の堆積土が確認できたことから別遺構の存在が想定できたが、明確なプランを検出できなかった。その後、トレンチ断面で改めて壁の立ち上がりを確認したことから本遺構の存在が判明した。図面上では推定ラインとして復元し、図示を行った。

〈重複関係〉S I 01と重複する。

〈形状・規模〉平面形は不明である。壁は3層を掘り込み、直立気味に立ち上がる。規模は1.4m前後と推測される。

〈堆積土〉黄褐色土ブロックを含んだ黒褐色土が主体である。

〈時期〉詳細な時期は不明であるが、周辺の遺構から本遺構の時期は近現代であると推測される。

(2) 遺構外出土遺物 (第5図、写真図版3)

5は縄文土器の胴部である。詳細な時期は不明である。中期~晩期と推測されるが、特定はできない。6は弥生時代後期の土器の胴部である。外面上部に交互刺突文が施される。刺突の施文が規則的でないことから赤穴式の可能性が高い。

5まとめ

今回の調査では、縄文時代前期初頭の竪穴住居1棟、近現代の家畜墓2基、時期不明の土坑2基を検出した。今回確認した近現代の家畜墓は、平成28年度調査区東側で確認した家畜墓群に隣接し、前回の調査範囲東側まで家畜墓群が広がるものと考えられる。また、これまでの調査では遺物も確認できなかった縄文時代前期の竪穴住居1棟を新たに確認した。周辺に当該期集落の広がりが想定される。

遺物では、家畜墓より蹄鉄が出土した他、縄文時代前期初頭、弥生時代後期の土器片が出土した。

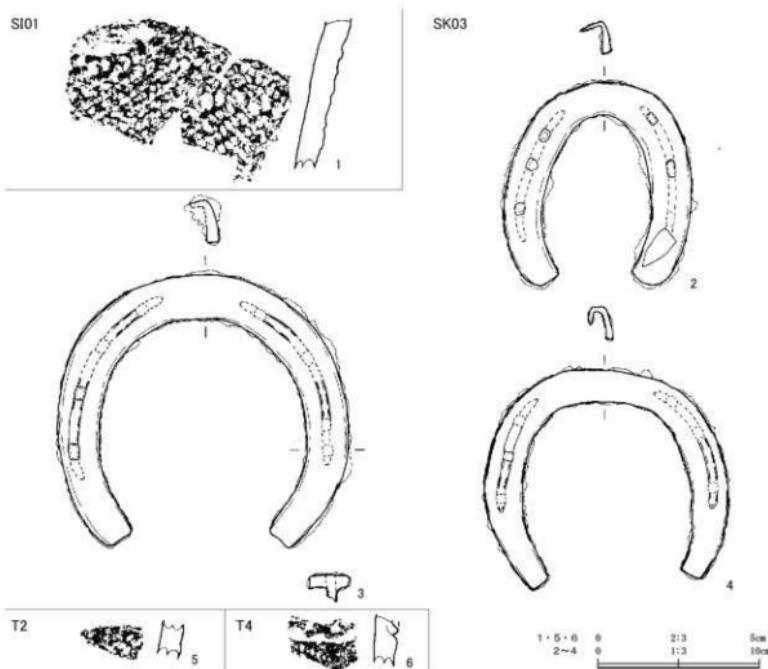
なお、根井沢穴田IV遺跡令和元年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。

（引用・参考文献）

松井 章 2008『動物考古学』京都大学学術出版会

岩文埋 2018『根井沢穴田IV遺跡発掘調査報告書』岩文埋報第683集

岩文埋 2018「(7) 根井沢穴田IV遺跡」「平成29年度発掘調査報告書」岩文埋報第692集



第5図 出土遺物

第2表 土器觀察表

番号	出土地点	層位	種別	形態	残存 部位	色調	主な文様・彫刻・特徴		内面	胎土	備考
							外観	内面			
1	S801	床面直上	織文	深溝	頭部	10YR5/3-4に赤褐色 内 7.5YR5/4-1に赤褐色	粘土陶器(織文1種) HL+LR(植位変形剥離)	ナチュラル 石英、灰色光沢釉、 カッサリ縁、彫刻(多)	外観にスリット番号 織文時代前昭和期		
5	T2	Ⅲ層上面	織文	深溝?	頭部	10YR6/4-5に赤褐色 内 10YR6/4-5に赤褐色		ナチュラル 石英、チャート			
6	T4	表土	弥生	深溝?	頭部	10YR6/3-5に赤褐色 内 10YR7/4-7に赤褐色	交互斜彫文(不規則)	ナチュラル 石英	弥生時代後段 赤穴式?		

第3表 鋅製品觀察表

番号	出土地点・層位	種別	釘穴数	長さ	幅	厚さ	重量	備考
2 SK03 (T4北端)	表土下	馬頭	6本	12.6	12.0	0.7	26.14	非常規鉄、前歯部。鉄羽残存
3 SK03 (T4北端裏)	表土下	馬頭	8本	17.0	18.0	0.9	57.33	非常規鉄、前歯部。鉄羽残存
4 SK03 (T4)	表土(黄褐色土上)	馬頭	6本	12.7	13.1	0.7	27.29	非常規鉄、前歯部。鉄羽残存

第4表 動物遺存体集計表

種別	上顎			下顎		
	切歯	前白歯	後白歯	切歯	前白歯	後白歯
ウマ	R1	R1	R2	L1		
ウシ						L2

第5表 獸骨計測値

No.	機器	部品	左右	規格	大員	販賣量(萬噸)	運送量(萬噸)	最長員	最長幅
1	ワマ	人筋骨	L	4660	1890	1215			
2	ワマ	人筋骨	R	4735	1645	1240			
3	ワマ	脛骨	L	4150					
4	ワマ	脛骨	R	4195	1275	1045			
5	ワシ	脛骨	L	3705	1035	685			
6	ワマ	脛骨	L				585		
7	ワマ	脛骨	R				690		
8	ワマ	扁筋骨		1020					
9	ワマ	扁筋骨		655					



SI01 全景 (S →)



SI01・SK03・04 断面 (N →)



SK01 全景・断面 (W →)



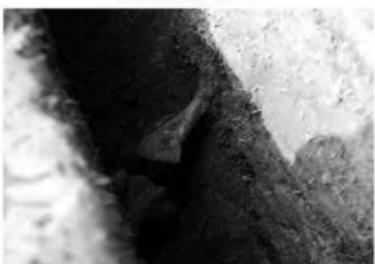
SK02 全景 (E →)



SK02 断面 (E →)



SK03 (T4 北端) 全景 (N →)



SK03 (T4 北端) 家畜骨出土状況 (SW →)

写真図版 1 SI01・SK01～04・家畜骨出土状況



T1 全景 (SW →)



T5 全景 (S →)



T6 全景 (S →)



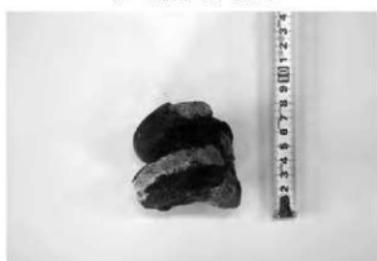
作業風景 (S →)



ウマ 大腿骨 (L) (No.1)



ウマ 股骨 (R) (No.4)

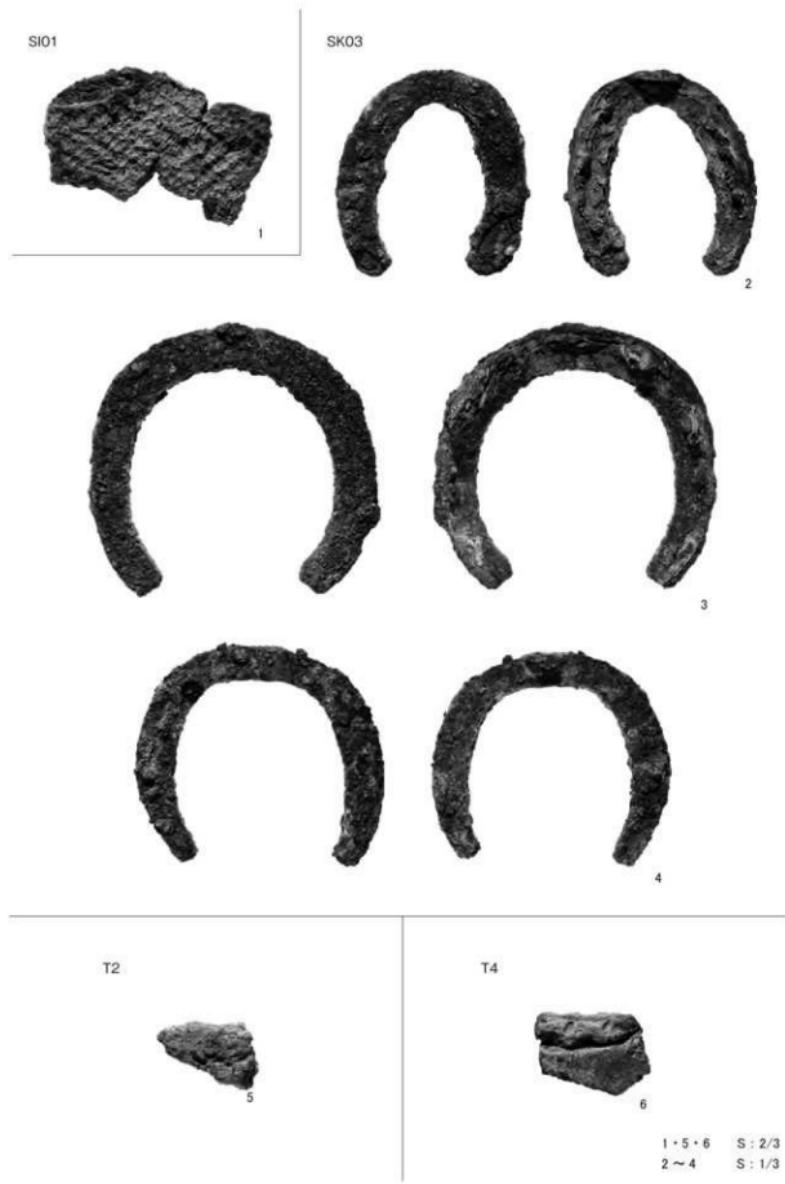


ウマ 距骨 (L) (No.7)



ウマ 基節骨 (左右不明) (No.8)

写真図版2 トレンチ・作業風景・計測骨写真



写真図版3 出土遺物

(3) 伝吉Ⅱ遺跡

所 在 地	九戸郡洋野町種市第44地割地内	遺跡コード・略号	IF37-2392・DK II - 19
委 託 者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	調査対象面積	2,400m ²
事 業 名	三陸沿岸道路	調査終了面積	2,490m ²
発掘調査期間	平成31年4月8日～令和元年5月30日	調査担当者	星 雅之 小野寺永人

1 調査に至る経過

伝吉Ⅱ遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（侍浜～階上）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

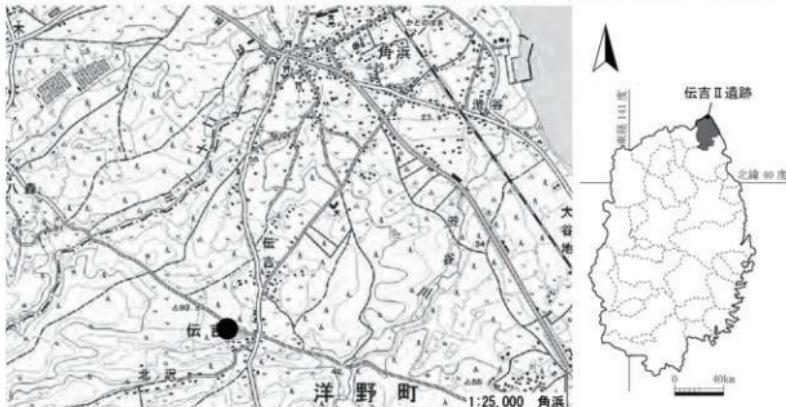
当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成30年1月23日付け国東整陸一課第67号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課総括課長あてに試掘調査を依頼し、平成31年2月12日に試掘調査を行い、平成31年2月26日付け教生第1574号により、工事に先立つて発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成31年4月2日付で公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)

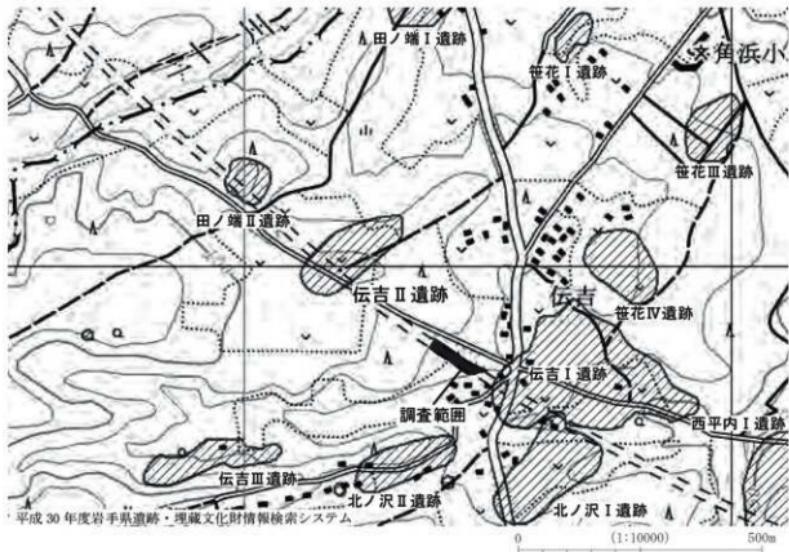
2 遺跡の位置と立地

遺跡は、洋野町役場から北西約4.5km、JR八戸線角浜駅から南西約1.5km、青森県境を流れる二十一川から東へ約850mに位置する。今回の調査地は、岩手県教育委員会の試掘調査結果をもとに周知の遺跡範囲から南東方向へ約350mに亘り遺跡範囲が拡大され、その東端部分に相当する（第2図参照）。伝吉Ⅰ遺跡とは東側で近接する。遺跡は、白前段丘雪畑面～伝吉面に比定される丘陵上に

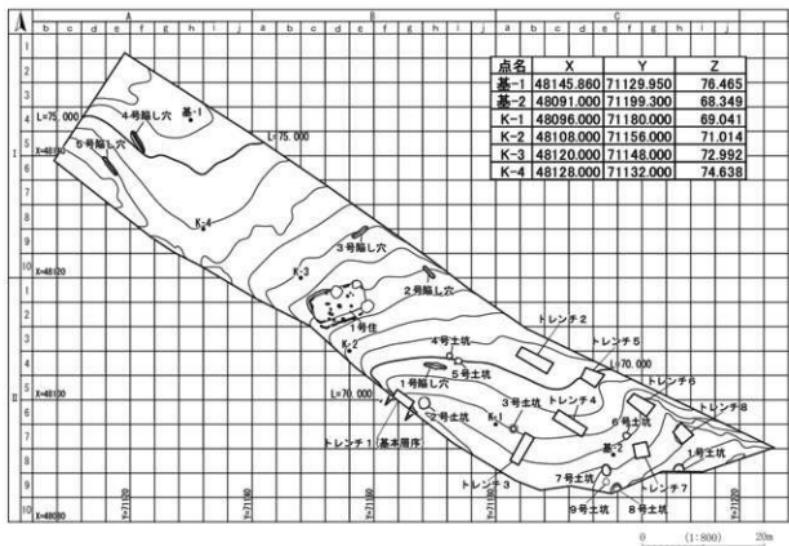


第1図 遺跡の位置

(3) 伝吉Ⅱ遺跡



第2図 調査位置

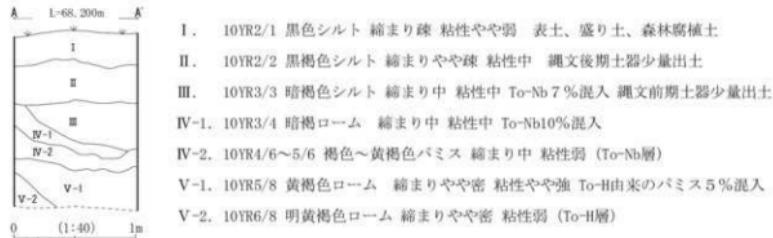


第3図 遺構配置図

あり、この丘陵の北西から南東へ下る緩斜面地の調査を実施した。調査地の標高は64～77m、調査前の現況は山林である。周辺の遺跡には、本調査地から北西約500mに縄文時代（以後「時代」を省略）早期後半中心の集落である田ノ端II遺跡が、南東約200mに縄文前期末葉～中期初頭円筒下層d式～同上層a式の捨て場が検出された北ノ沢I遺跡が所在する。また、調査地から東へ約800mに縄文後期前葉の大規模な配石遺構群が検出された西平内I遺跡がある。

3 基本層序

先に、調査地の基本層序を把握するため、調査開始当初にトレンチ1～8を設定し、八戸火山灰層までの掘削を行った（トレンチ位置は第3図参照）。その結果をもとに、基本層序はI～V層に分層した（第4図参照）。I層は、表土、盛り土、森林腐植土を包括する。調査区南部で厚く、中央～北西部ではやや薄い。II層黒褐色シルトは、調査区全体的に堆積し、縄文後期初頭～前葉土器が少量含まれる。III層暗褐色シルトは、主に中央～南西部に堆積し、北西部では認めがたい。縄文前期前葉土器が少量含まれ、加えて局的に十和田南部浮石（To-Nb）が少量混在する。補足として、縄文前期の指標テフラである十和田中振テフラ（To-Cu）は、本調査地に未検出であるが、近隣の北ノ沢I遺跡や田ノ端II遺跡では暗褐色土中から検出されている。IV層に混入する可能性が想定され、年代的にも矛盾しない。IV層は十和田南部浮石の純層若しくはそれが密に混入する土層である。IV-1層とIV-2層に細分した。III層と同様に南西部を中心に堆積が認められる。V層は八戸火山灰（To-H）層で、黄褐色バミスが5%程度混入する土層をV-1層、バミスの混入が認めがたい土層をV-2層に細分した。なお、V層の細分で採用した黄褐色バミスは、分析など実施していないが、肉眼観察からTo-Nbとは粒径や色調などの顔付きが相違する。したがって、To-Nbの再堆積ではなくTo-Hに由来するバミスと考えている。V層は調査区全般に堆積が認められる。



第4図 基本層序

4 調査の概要

調査は、重機を用いて表土除去を行い、その後人力でジョレンや両刃鎌を使って遺構検出を行った。グリッドは、平面直角座標第X系（世界測地系）に合わせ、40×40mの大区画を設定し、これを4×4mの小区画に細分した。遺物の取り上げは、出土地点の北西隅のグリッド名を用いている。

（1）遺構

検出遺構は堅穴住居1棟、土坑9基、陥し穴状遺構5基である。何れも、縄文時代に帰属する。

1号堅穴住居

【位置・検出状況】調査区ほぼ中央のII B 1cグリッド付近に位置する。V-1層面で、黒色シルトによる円形プランとして認知、検出したが、調査の進行とともに円形ではなく方形プランであること

が判明し、併せて埋土も暗褐色シルトを主体とすることが分かった。【建て替え】ダメ押し作業で周辺を掘り下げたところ、南壁の外側から豊溝を検出した。調査では詳細を把握できなかったが、本遺構は建て替えが行われていたと捉えられる。以下、建て替え前を古段階、建て替え後を新段階と呼ぶこととする（第6図参照）。【平面形・規模】平面形は、新段階が隅丸長方形を基調とする。古段階は南壁溝の状況から新段階と同様に隅丸長方形と推定される。規模は、新段階が長軸（長辺）9.4m、短軸（短辺）5.2～5.6m、最も深い北東壁が58cm、床面積は36.9m²を測る。古段階は、長軸7.5m前後、短軸5.5m前後と推定される。【埋土】上位にⅡ層起源の黒色シルト、中位～下位にⅣ～1層やV層のブロックや炭化物を含むⅢ層起源の暗褐色シルトが堆積する。上位は自然堆積、中位～下位は人為堆積である。【壁・床面】To-Hテフラ層を掘り込んで壁や床が構築されている。傾向として斜面上方側となる北壁は深いが、斜面下方側となる南側は大部分の壁が未検出である（壁の残りが非常に悪い）。【炉・柱穴】炉は未検出である。柱穴は18基検出した。全般的には平面規模が小さく、深度は深い傾向が看取される。柱配置について、PP 2・6・12・13は竪穴中央より南に寄った位置に1×1間を構成するように見て取れるが、位置的な観点からは古段階の主柱であった可能性が窺える。新段階の柱配置は規則性を見出し難い。ただ、PP 8・16・17など、壁際に位置する柱穴が主体を担う可能性もある。【出土遺物】No.1・2の土器とNo.35～42の石器が出土した。1層出土のNo.1は本遺構とは異時期と判断される。No.2は床面出土で帰属時期の推定資料と捉えられる。【時期】No.2の床面出土土器から前期前葉と推定される。また、埋土下位～床直出土の炭化材3点の年代測定を実施した結果、3点ともに5.740±30yrBP～5.720±30yrBPの、まとまりのある測定結果が得られた。この年代観からは前期前葉の古い段階と捉えられる。

土坑

調査区南部の標高67～69mの緩斜面地に占地する。開口部径より底部径が広く深度もある、いわゆるラスコピットと、開口部径と底部径がほぼ同規模で断面形が浅皿状を呈するもの（本稿では以後「断面浅皿状土坑」と仮称する）に大別される。ラスコピットは、平面規模や深さでの均質性は弱い。埋土の様相は、9号土坑はⅢ～V層を中心とする人為堆積で、それ以外の1・2・3・7・8号土坑はⅡ層起源の黒褐色シルトを中心とする自然堆積である。また、2・7号土坑は縄文後期初頭～前葉と推定される土器が出土している。4～6号土坑は断面浅皿状土坑で、埋土はⅢ層土による単層である。出土遺物や埋土の様相から、ラスコピットは縄文後期、断面浅皿状土坑は縄文前期と推定される。

第1表 土坑観察表

遺構名	平面形	規模 (m)	深さ (cm)	底面標高値 (m)	時期	備考
1号土坑	円形？	1.80	52	66.587	縄文後期	ラスコピット？
2号土坑	円形	1.85×1.75	68	68.134	縄文後期	ラスコピット
3号土坑	円形	0.90×0.85	68	68.340	縄文後期	ラスコピット
4号土坑	円形	1.02×0.98	12	70.000	縄文前期	断面浅皿状土坑
5号土坑	円形	1.10×1.00	16	69.840	縄文前期	断面浅皿状土坑
6号土坑	楕円形	1.16×1.10	30	68.180	縄文前期	断面浅皿状土坑
7号土坑	楕円形	1.75×0.95	65	66.920	縄文後期	ラスコピット
8号土坑	円形？	1.50	105	66.700	縄文後期	ラスコピット
9号土坑	不整円形	1.10×1.10	66	67.559	縄文後期	ラスコピット

陥し穴状遺構

全て平面形が溝状を呈する。調査区北西～中央部にかけて点在的に検出された。埋土は自然堆積で、

全体的な傾向としては埋土上位にⅡ層が、中～下位にⅣ層やⅤ層の壁崩落土などが堆積する。配置は、遺構の長軸が等高線に沿うような方向（平行方向）に分布する。また、4号陥し穴状遺構と5号陥し穴状遺構は、約6mの間隔で斜面上下の関係にあり、セット関係を窺わせる。その中にあって、若干不規則なのが2号陥し穴状遺構で、長軸長が短く、短軸の底部径が広い。加えて、深度は浅く、なお且つ遺構の長軸も等高線を切る方向（直交方向）にとる。陥し穴状遺構の帰属時期の推定は難しいが、埋土上位にⅡ層黒色シルトが入ることから、時期の下限は後期前半頃に求められようか。

第2表 陥し穴状遺構観察表

遺構名	平面形	規模（m）	深さ（cm）	底面標高値（m）	時期	備考
1号陥し穴状遺構	溝形	3.7 × 0.94	131	68.44	縄文	等高線と平行
2号陥し穴状遺構	溝形	2.6 × 0.5	46	71.65	縄文	等高線と直交
3号陥し穴状遺構	溝形	2.9 × 0.75	72	72.25	縄文	等高線と平行
4号陥し穴状遺構	溝形	3.9 × 1.2	140	72.64	縄文	等高線と平行
5号陥し穴状遺構	溝形	3.7 × 0.7	108	73.00	縄文	等高線と平行

（2）遺物

出土遺物は、縄文土器小コンテナ15箱（3,498.6g）、石器小コンテナ1.5箱（45点）である。

土器は縄文前期前葉と縄文後期初頭～前葉が出土している。前期前葉は全般的に縄文原体を横回転させた斜行縄文が多く、胎土中には纖維の混入が認められる。土器型式を特定する文様や特徴を持つものが非常に少ない。その中にあって、No.8・16は環付き末端ループ、No.17・18は組縄縄文（いわゆるピッチリ縄文）の属性を持つ特徴から大木1式に並行する時期と考えられる。補足として、底部資料は出土していないが、胴部下半の破片の傾きから推定するに尖底若しくは丸底になると想定できるものが含まれる。後期初頭～前葉は特徴的なものとして、No.1・26は磨り消し縄文手法を、No.27は貼り付け隆線→原体押圧（先端）→押圧縄文を施文するものを挙げて置きたい。No.26は中期末葉大木10式に似る文様であるが、後期初頭上村式に相当する。その他に、No.23・24・32など單輪絡条体第1類を施文するものが一定量みられる。また、当該期土器の内面や外面には、焼けはじけ痕と考えられる径2～5mmのクレーター状の凹みが顕著に認められる。

石器は、石鎌4点、石匙1点、Uフレ3点、磨製石斧3点、磨石7点、敲石2点、台石1点、礫器3点、フレーク20点、石刀1点出土した。石材について、頁岩、玉髓、はんれい岩、ディサイト、花崗斑岩、ホルンフェルスなどが認められる。はんれい岩は洋野町西部のノソウケ岩体が産出地である。

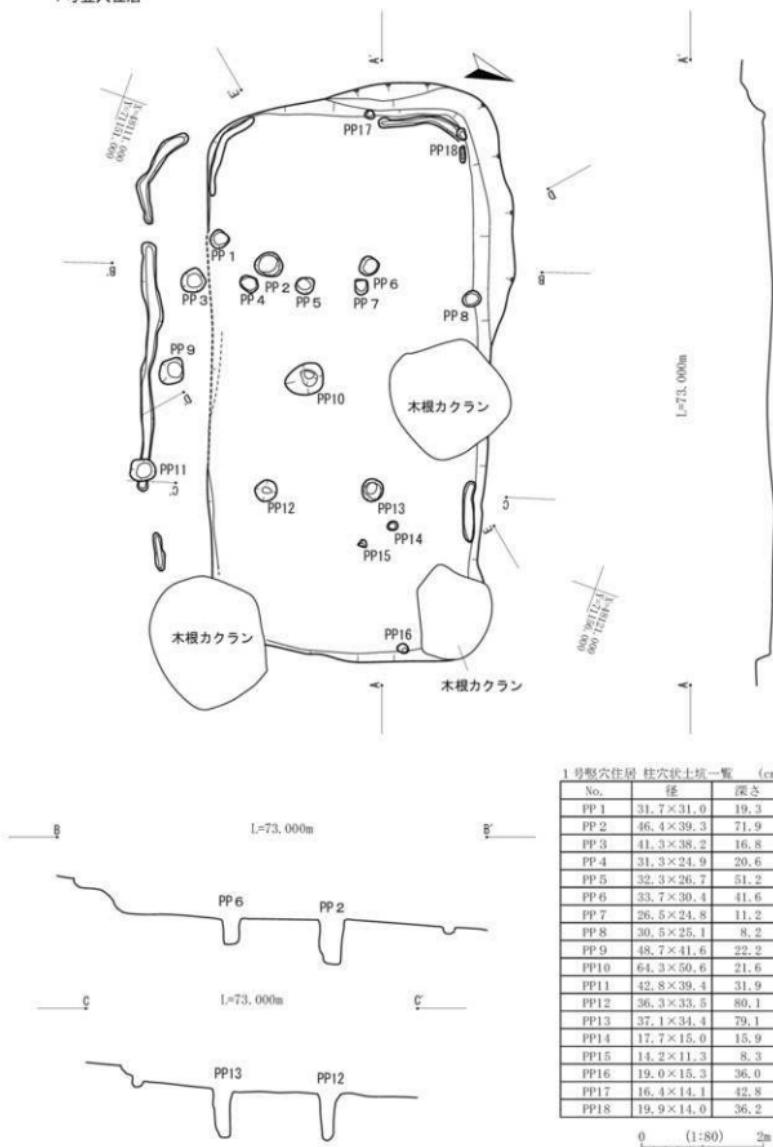
5まとめ

縄文前期の堅穴住居をはじめ、縄文期の土坑、陥し穴状遺構が検出された。

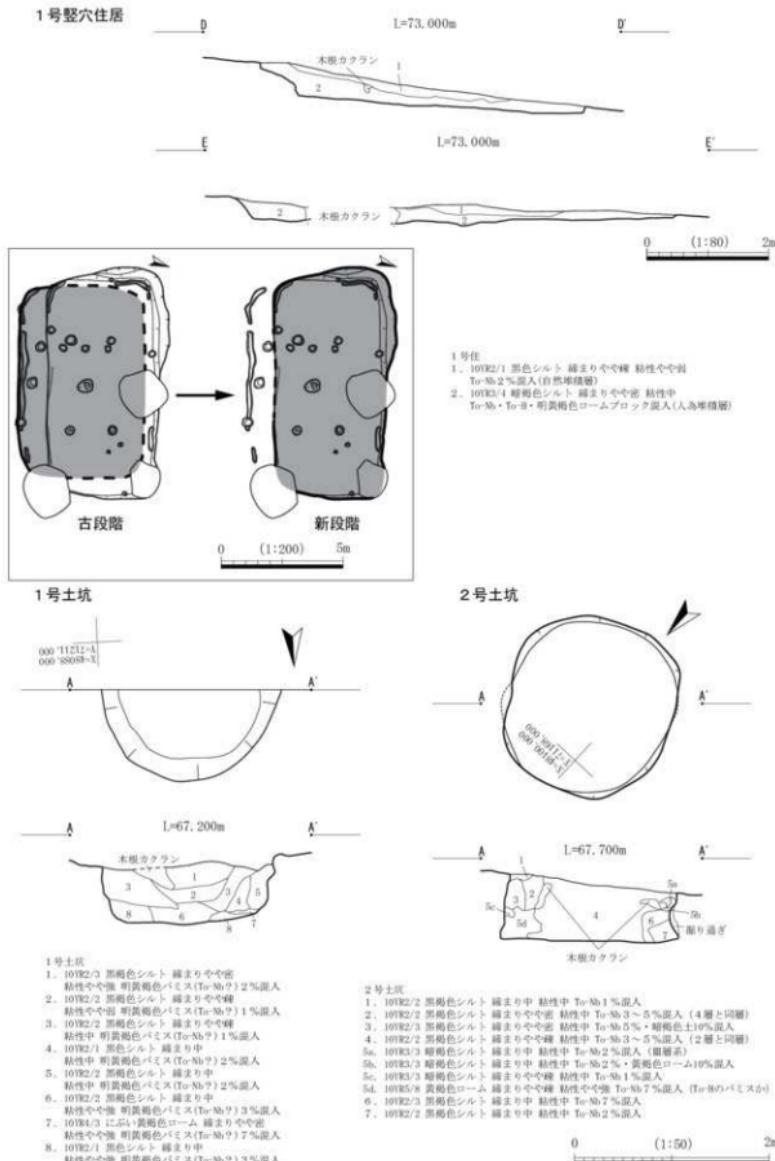
- ・堅穴住居は、平面形や規模から大型住居の祖形的なものと考えられる。年代測定では、 $5,740 \pm 30$ yrBP～ $5,720 \pm 30$ yrBPの測定値を得られており、前期前葉の前半期（古手）に相当する。
- ・土坑は、縄文後期のフラスコピットと、縄文前期の断面浅皿状土坑が検出された。
- ・溝状の陥し穴状遺構を検出した。平面形、規模、その配置状況から規格性が高い。
- ・出土遺物は、縄文前期や後期の土器・石器が出土している。土器は前期が大木1式と、後期が上村式と共に属性を持つものが認められる。石器の石材产地は、No.37の黒曜石製を除けば、原地山層やノソウケ岩体など比較的近場からの供給が中心だったことが窺える。
- ・総括すると、今回の調査区は縄文前期前半には生活領域に、断絶期を挟み後期前半頃に狩猟場から貯蔵域へと、土地利用が変化したと考えられる。

なお、伝吉Ⅱ遺跡令和元年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。

1号竪穴住居

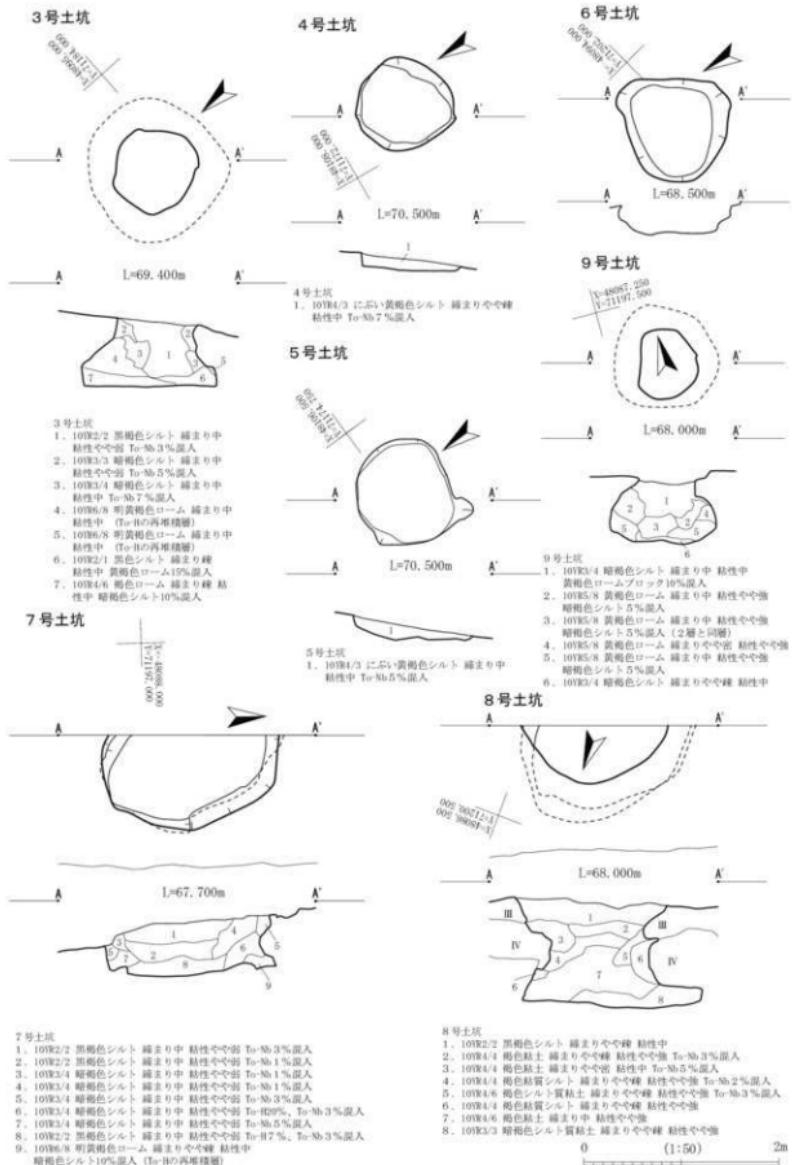


第5図 1号竪穴住居

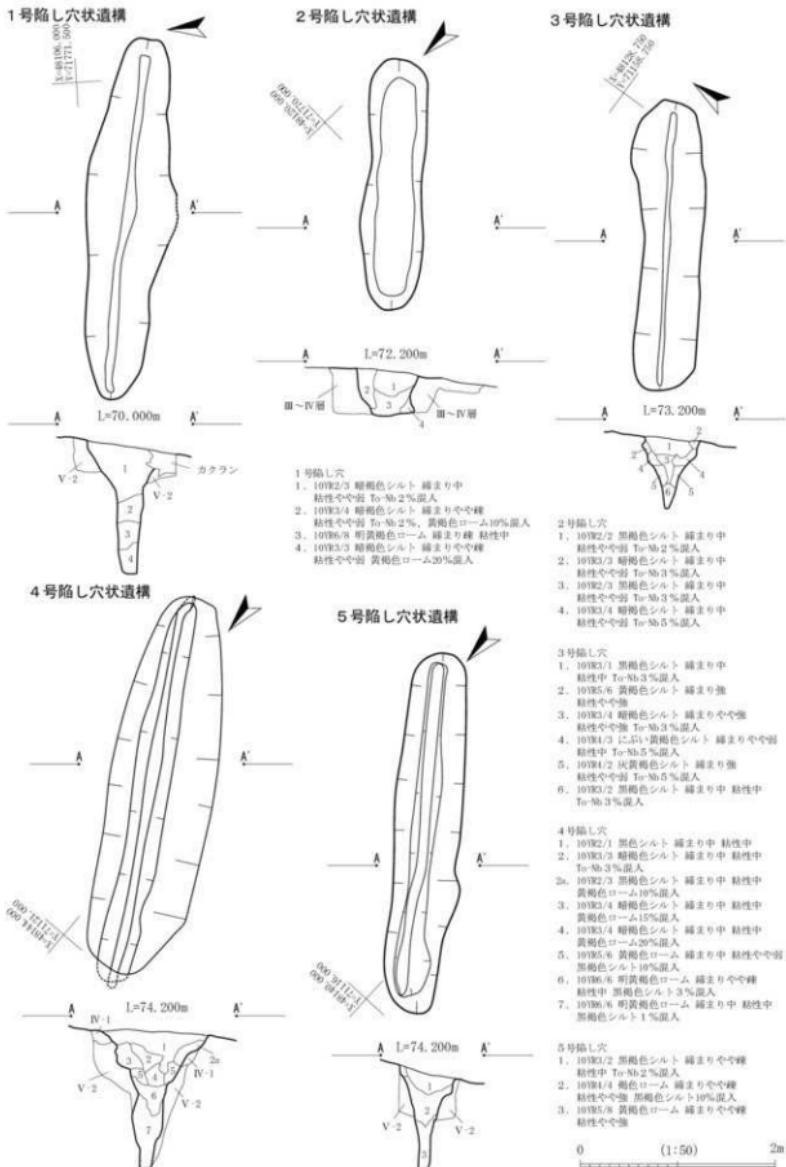


第6図 1号竪穴住居：1号土坑：2号土坑

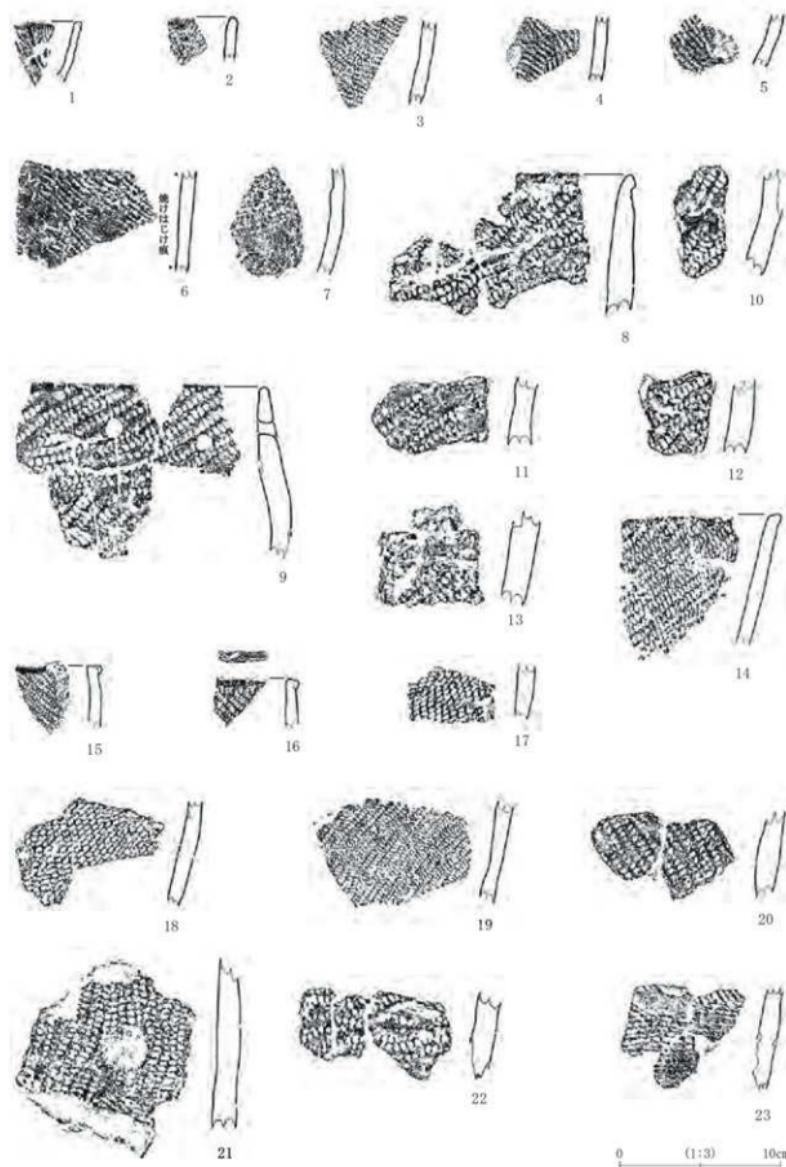
(3) 伝吉Ⅱ遺跡



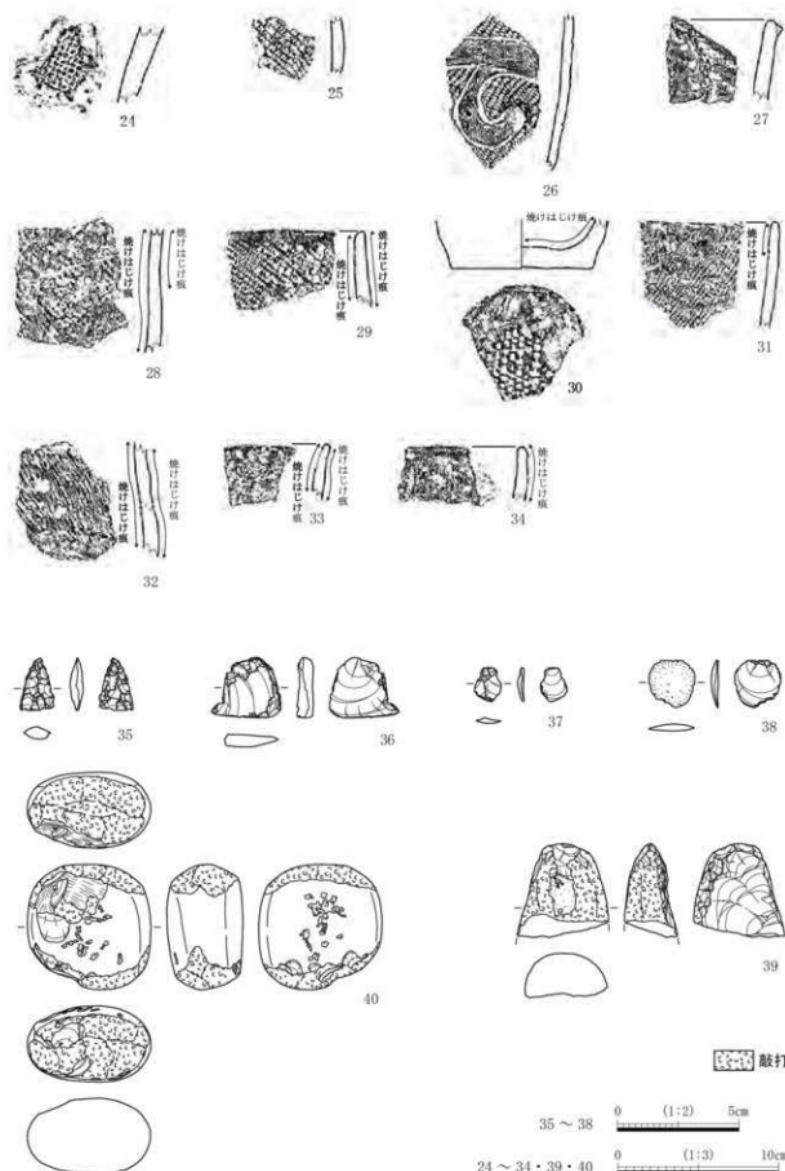
第7図 3号土坑～9号土坑



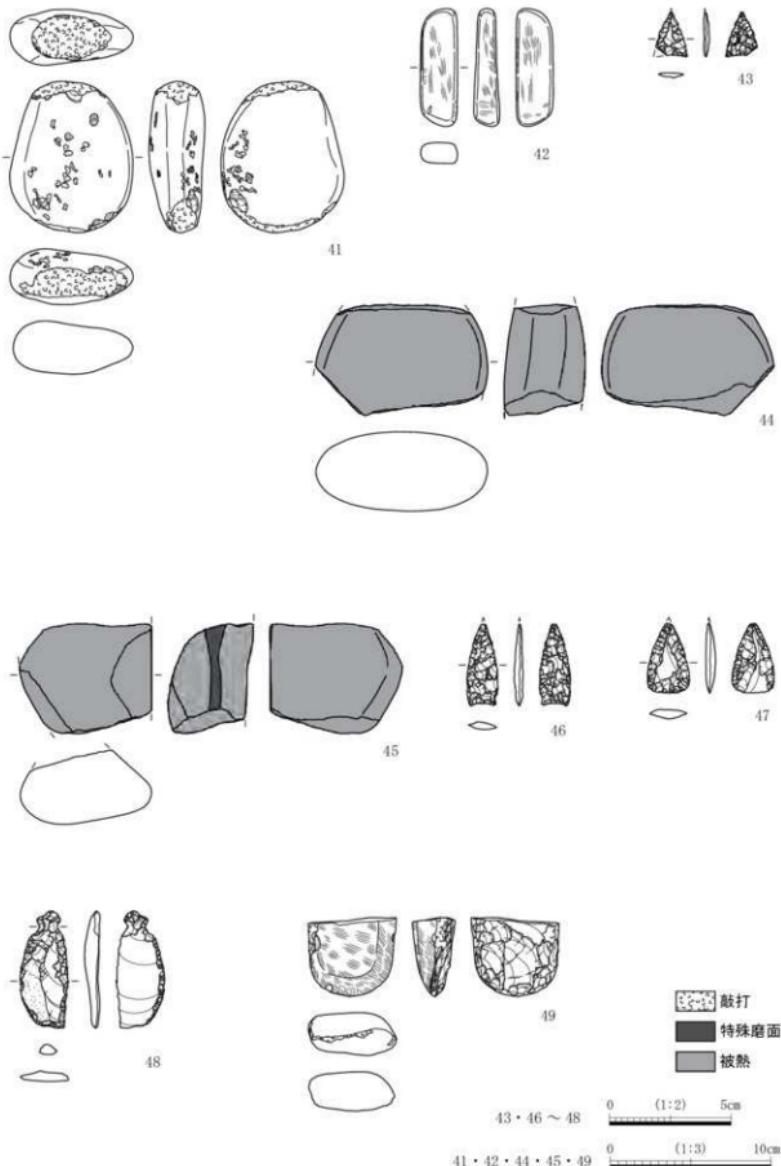
第8図 陥し穴状遺構



第9図 出土遺物



第10図 出土遺物



第 11 図 出土遺物

第3表 土器観察表

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	文様特徴	時期	備考
1	1号住 QN	1層	深鉢	口縁部、小波状	沈線、織維少量	早期後葉	
2	1号住 QS	床面	深鉢	口縁部	織維少量	前期前葉	
3	2号土坑	埋土中	深鉢	胴部		後期初頭～前葉	地文のみ
4	2号土坑	埋土中	深鉢	胴部	R(若しくはRL)横位	後期初頭～前葉	
5	2号土坑	埋土中	深鉢	胴部	RL横位、織維少量	前期前葉?	
6	7号土坑	埋土中	深鉢	胴部	内面焼けはじけ痕	後期初頭～前葉	
7	1号廻し穴	埋土中	深鉢	胴部		前期前葉	
8	II C9g	Ⅲ層	深鉢	口縁部、平縁	末端襯付ループ、LR横位、織維小量	前期前葉	
9	II C9g・II C9f	Ⅲ層	深鉢	口縁部、平縁	LR横位、補修孔?個、織維中量	前期前葉	
10	II C9f	Ⅲ層	深鉢	胴部	LR横位、織維中量	前期前葉	
11	II C9f	Ⅲ層	深鉢	胴部	LR横位、織維少量	前期前葉	
12	II C9f	Ⅲ層	深鉢	胴部	LR横位、織維少量	前期前葉	
13	調査区東端	表土	深鉢	胴部	LR横位、織維少量	前期前葉	
14	I A7e	Ⅲ層	深鉢	口縁部、平縁(ミガキ)	RLR横位、織維多量	前期前葉	
15	II B6h	Ⅲ層	深鉢	口縁部、平縁面取り	RL横位、織維	前期前葉	大木1式
16	II C7h	Ⅲ層	深鉢	口縁部、平縁	末端襯付ループ、RL横位、織維	前期前葉	大木1式
17	II B6h	Ⅲ層	深鉢	胴部	RL?(ビッチリ織文?)、織維中量	前期前葉	
18	調査区中央	表土	深鉢	胴部	RL横位?(ビッチリ織文?)、織維少量	前期前葉	
19	I A7d	表土	深鉢	胴部	LRL横位、織維多量	前期前葉	
20	II C7h	Ⅲ層	深鉢	胴部	RL横位、織維	前期前葉	
21	II C7h	Ⅲ層	深鉢	胴部	RL横・斜位、補修孔、織維少量	前期前葉	剥落面に織文
22	II C9f	Ⅲ層	深鉢	胴部	LR斜位、織維中量	前期前葉	
23	II C9g	Ⅲ層	深鉢	胴部	單輪絞条体第1類 R	前期前葉?	
24	調査区東端	表土	深鉢	胴部	單輪絞条体第1類、織維微量	前期前葉?	
25	調査区中央	表土	深鉢	胴部	RL横位、織維少量	前期前葉	
26	調査区東端	表土	深鉢	胴部	RL横位→沈線区画→磨消織文、ヒレ状突起	後期初頭～前葉	上式村相当
27	調査区中央	表土	深鉢	口縁部、波状口縁	貼り付け隕部→原底押圧(先端)→押圧織文 LR	後期初頭～前葉	
28	調査区東端	表土	深鉢	胴部	LR縫位、内外面焼けはじけ痕多	後期初頭～前葉	
29	調査区東端	表土	深鉢	口縁部、平縁	LR縫位、内面焼けはじけ痕有	後期初頭～前葉	
30	調査区東端	表土	深鉢	胴～底部	胴～LR縫位、内面焼けはじけ痕、底：網代底	後期初頭～前葉	
31	調査区東端	表土	深鉢	口縁部、平縁	RL縫位、内面焼けはじけ痕	後期初頭～前葉	
32	調査区東端	表土	深鉢	胴部	單輪絞条体第1類 L、内面焼けはじけ痕	後期初頭～前葉	
33	調査区東端	表土	深鉢	口縁部、平縁	L縫位(無節)、内面焼けはじけ痕	後期初頭～前葉	
34	調査区東端	表土	深鉢	口縁部、平縁	無文?	後期初頭～前葉	

第4表 石器観察表

掲載番号	器種	出土地点	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	産地	時代
35	石鏡	1号住 QN	北東壁隙土	21	14	0.5	1.3	頁岩	北上山地	中生代
36	Uフレ	1号住 QS	1層	25	28	0.7	4.6	頁岩?	奥羽山脈?	新生代新第三紀?
37	フレーク	1号住 QS	埋土上位	14	11	0.2	0.3	黒曜石	不明	不明
38	Uフレ	1号住 QN	床直	19	19	0.3	1.1	頁岩	北上山地	中生代
39	磨製石斧	1号住 QN	床直	56	54	3.0	1124	繩粒花崗閃緑岩	北上山地	中生代白堊紀
40	敲石	1号住 QS	埋土下位	7.7	7.7	4.7	50.1	はんいわ岩石	北上山地(ノソウケ岩体)	中生代白堊紀
41	敲石	1号住 QS	床直	92	75	3.4	414.2	はんいわ岩石	北上山地(ノソウケ岩体)	中生代白堊紀
42	石刀	1号住 QS	埋土上位	72	23	1.6	36.8	凝灰岩	久慈郡群・野田柳群	中生代白堊紀～新生代古第三紀
43	石鏡	2号土坑	埋土中	17	12	0.2	0.4	頁岩	北上山地	中生代
44	磨石	2号土坑	埋土中	67	106	4.9	569.0	ディサイト	原地山層	中生代白堊紀
45	磨石	2号土坑	埋土中	68	81	4.8	345.9	ディサイト	原地山層	中生代白堊紀
46	石鏡	3号土坑	埋土中	32	13	0.4	1.5	頁岩?	奥羽山脈?	新生代新第三紀?
47	石鏡	1 BBc	表土	28	17	0.4	1.9	頁岩	北上山地	中生代
48	石匙	調査区東端	表採	47	20	0.6	5.5	頁岩	北上山地	中生代
49	磨製石斧	1 BBc	表土	47	54	2.6	90.9	ホルンフェルス	北上山地	中生代(完成は中生代白堊紀)

伝吉II遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

伝吉II遺跡は、岩手県九戸郡洋野町種市第44地割地内（北緯40° 25' 48"、東経141° 40' 20")に所在する。測定対象試料は、1号竪穴住居から出土した木炭3点である（表1）。1号竪穴住居は縄文時代前期前葉と推定されている。

2 測定の意義

1号竪穴住居は出土土器が貧弱なため、年代測定により遺構の年代を検討する。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA : Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l (1M) の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として測る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい (¹⁴Cが少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.3較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。历年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料3点の¹⁴C年代は、 5740 ± 30 yrBP (試料3) から 5720 ± 30 yrBP (試料2) の間にまとまる。历年較正年代 (1σ) は、最も古い試料3が $4667 \sim 4542$ cal BCの間に3つの範囲、最も新しい試料2が $4607 \sim 4517$ cal BCの範囲で示される。いずれも縄文時代前期前葉頃に相当し (小林編2008、小林2017)、出土土器からの推定と整合する。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					Libby Age (yrBP)		
IAAA-190589	1	1号竪穴住居	QS 床面	木炭	AAA	-27.15 ± 0.16	5730 ± 30 49.0 ± 0.17
IAAA-190590	2	1号竪穴住居	QS 2層	木炭	AAA	-26.55 ± 0.19	5720 ± 30 49.04 ± 0.18
IAAA-190591	3	1号竪穴住居	QS 琉土下位	木炭	AAA	-26.69 ± 0.17	5740 ± 30 48.92 ± 0.18

[IAA 登録番号 : #9725]

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、历年較正用¹⁴C年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		历年較正用 (yrBP)	1 σ 历年年代範囲	2 σ 历年年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-190589	5.760 ± 30	48.79 ± 0.17	5.729 ± 28	$4612\text{calBC} - 4522\text{calBC} (68.2\%)$	$4683\text{calBC} - 4632\text{calBC} (14.7\%)$ $4623\text{calBC} - 4496\text{calBC} (80.7\%)$
IAAA-190590	5.750 ± 30	48.88 ± 0.18	5.724 ± 29	$4607\text{calBC} - 4517\text{calBC} (68.2\%)$	$4683\text{calBC} - 4632\text{calBC} (12.4\%)$ $4623\text{calBC} - 4491\text{calBC} (83.0\%)$
IAAA-190591	5.770 ± 30	48.75 ± 0.18	5.743 ± 29	$4667\text{calBC} - 4664\text{calBC} (1.5\%)$ $4654\text{calBC} - 4639\text{calBC} (7.9\%)$ $4617\text{calBC} - 4542\text{calBC} (58.9\%)$	$4687\text{calBC} - 4517\text{calBC} (95.4\%)$

[参考値]

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51 (1), 337-360
小林謙一 2017 繩文時代の実年代 一土器型式編年と炭素14年代一, 同成社
小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55 (4), 1869-1887
Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data. Radiocarbon 19 (3), 355-363

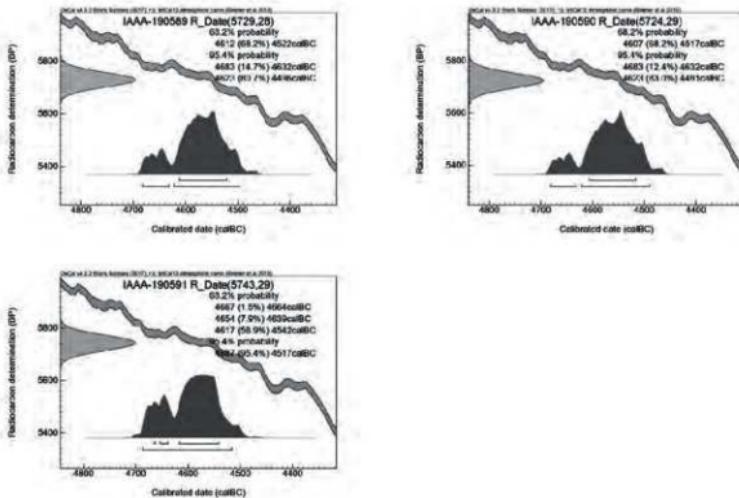


図1 展年較正年代グラフ（参考）



調査区遠景（北西から）



調査区全景（上が南西）

写真図版1 調査区全景

(3) 伝吉Ⅱ遺跡



調査区全景（北西から）



調査区北面土層断面（南から）



基本層序（北東から）

写真図版2 調査区全景・基本層序



1号竖穴住居 平面（東から）

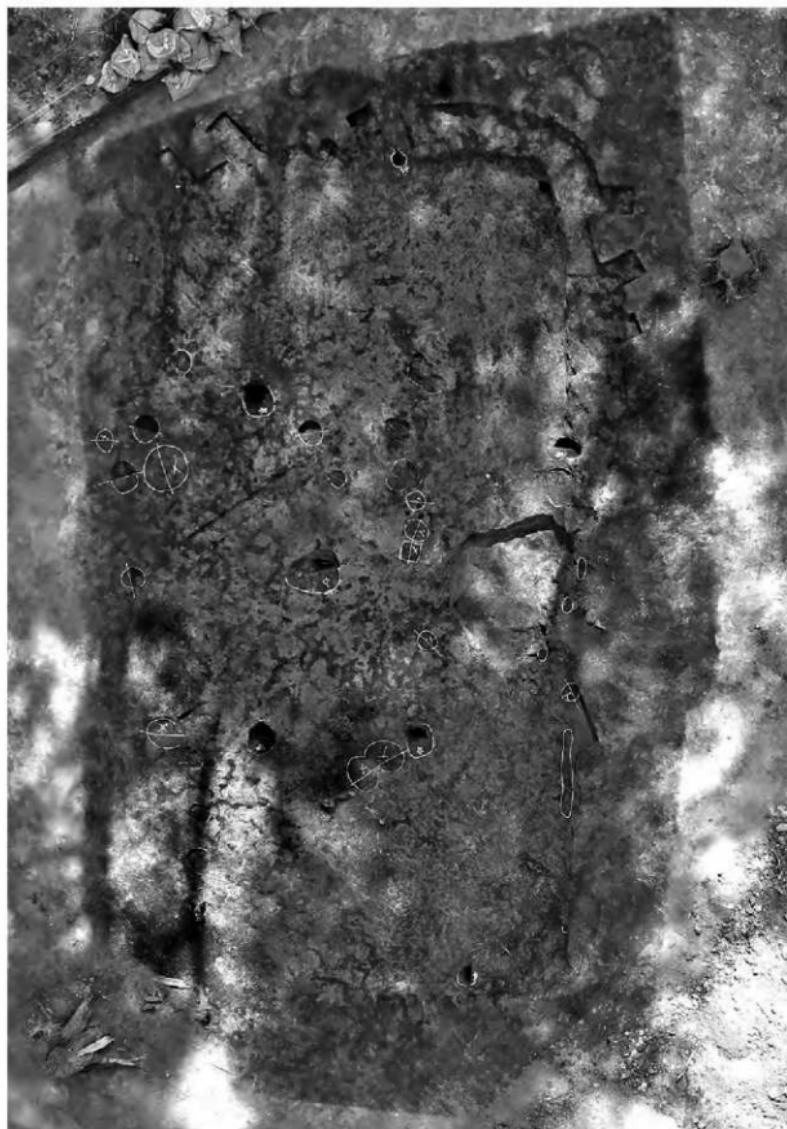


1号竖穴住居 断面（南西から）



1号竖穴住居 断面（北西から）

写真図版 3 1号竖穴住居



1号竪穴住居 平面（上が西）

写真図版4 1号竪穴住居



1号土坑 平面（北から）



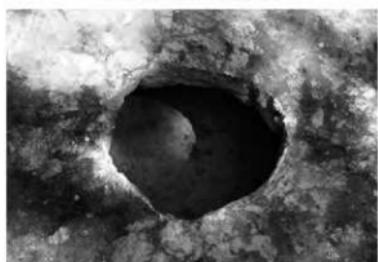
1号土坑 断面（北から）



2号土坑 平面（北西から）



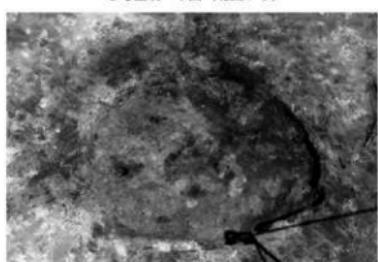
2号土坑 断面（北西から）



3号土坑 平面（北西から）



3号土坑 断面（北西から）

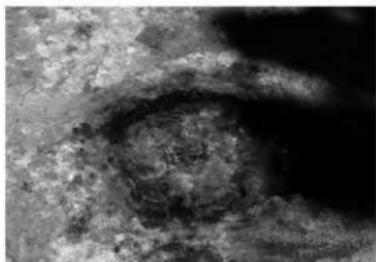


4号土坑 平面（北西から）

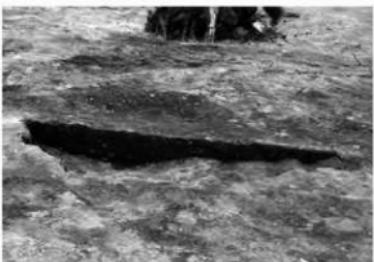


4号土坑 断面（北西から）

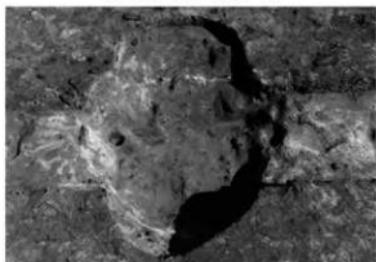
写真図版5 1号土坑～4号土坑



5号土坑 平面（北西から）



5号土坑 断面（北西から）



6号土坑 平面（北西から）



6号土坑 断面（北西から）



7号土坑 平面（東から）



7号土坑 断面（東から）



8号土坑 平面（北から）

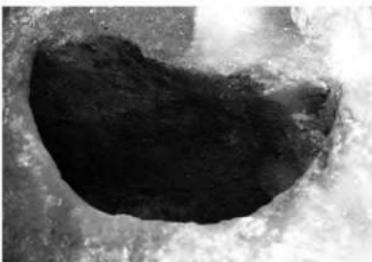


8号土坑 断面（北から）

写真図版6 5号土坑～8号土坑



9号土坑 平面（南から）



9号土坑 断面（南から）



1号陷し穴状遺構 平面（西から）



1号陷し穴状遺構 断面（西から）



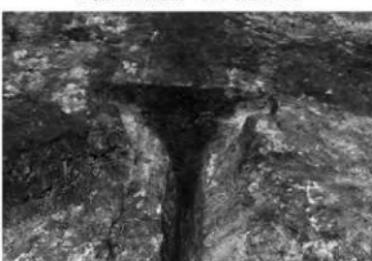
2号陷し穴状遺構 断面（北西から）



2号陷し穴状遺構 平面（北西から）



3号陷し穴状遺構 平面（南西から）



3号陷し穴状遺構 断面（南西から）

写真図版7 9号土坑・1号陷し穴状遺構～3号陷し穴状遺構

(3) 伝吉II遺跡



4号陥し穴状遺構 平面（北西から）



4号陥し穴状遺構 断面（北西から）



5号陥し穴状遺構 平面（北西から）



5号陥し穴状遺構 断面（北西から）



作業風景（北から）



作業風景（北西から）

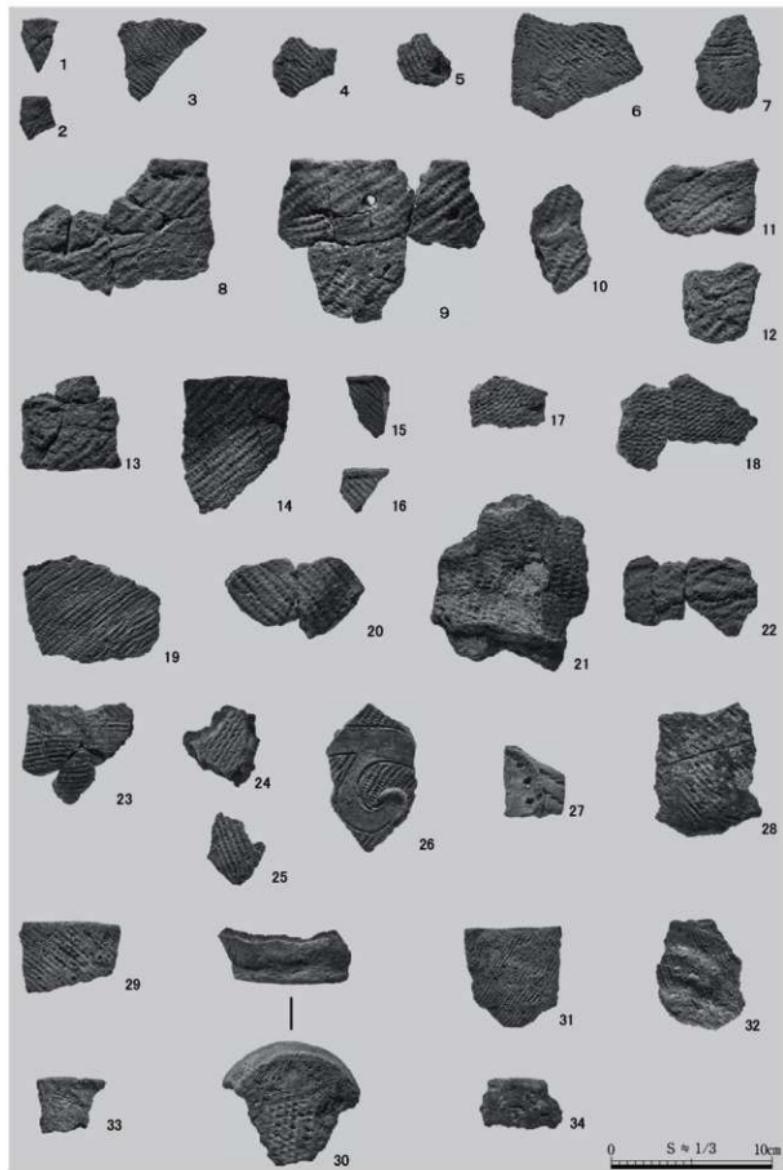


作業風景（東から）

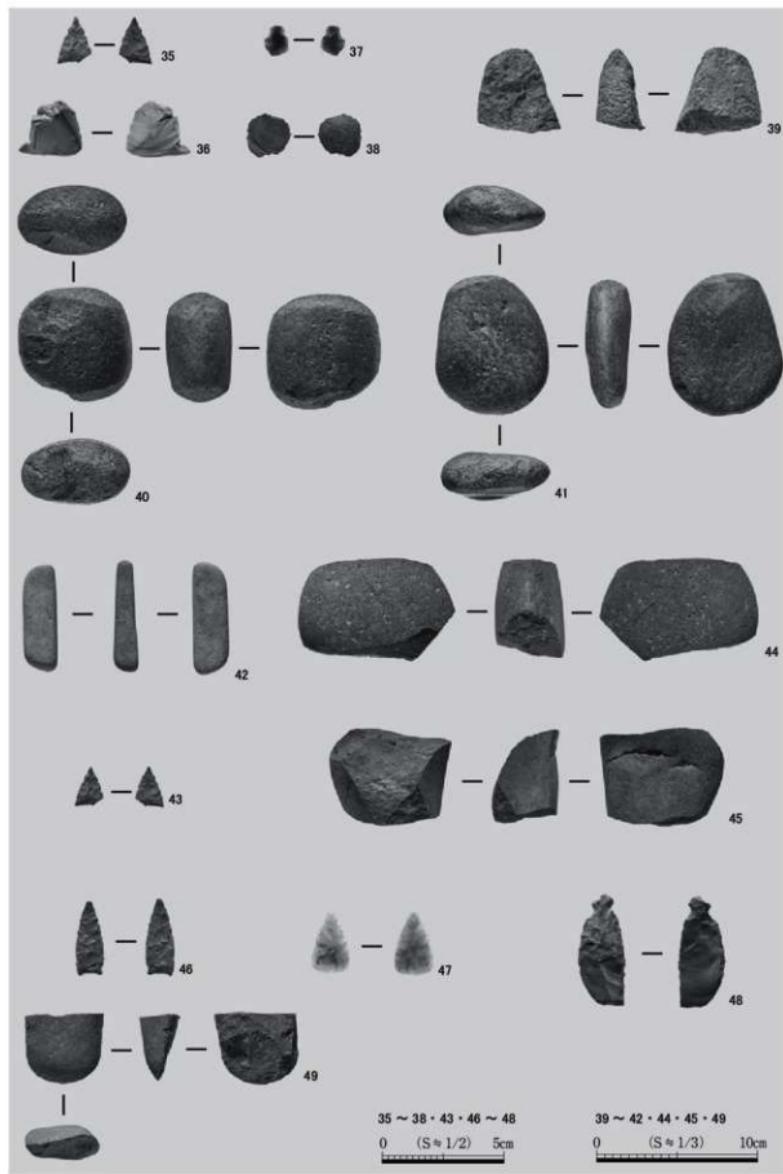


作業風景（北西から）

写真図版8 4号陥し穴状遺構・5号陥し穴状遺構・作業風景



写真図版9 出土遺物（土器）



写真図版 10 出土遺物（石器）

(4) 岩洞湖E遺跡

所 在 地 盛岡市鞍川字龟橋地内
 委 託 者 東北農政局岩手山麓農業水利事業所
 事 業 名 国営岩手山麓農業水利事業
 発掘調査期間 令和元年9月1日～10月24日

遺跡コード・略号 GDE-19・KF60-0285
 調査対象面積 1,233m²
 調査終了面積 1,233m²
 調査担当者 北田 純・野中裕貴

1 調査に至る経過

「国営岩手山麓農業水利事業岩洞ダム貯水池浸食防止対策（その5）工事」予定地が岩洞湖E遺跡の一部に係ることから発掘調査をすることとなった。

国営岩手山麓農業水利事業は、国営岩手山麓土地改良事業（昭和16年度～昭和43年度）により造成された基幹的な農業水利施設が、経年的な施設の劣化及び寒冷な気象条件の影響により、岩洞ダム、導水路及び幹線用水路のコンクリート構造物の欠損や鋼構造物の腐食等が発生し、漏水等により農業用水の安定供給に支障を来しているとともに、維持管理に多大な費用を要していることから、本事業では施設の機能監視を行いつつダム、導水路等の改修を適時に行い、併せて関連事業において、用水路の改修を行うことにより、農業用水の安定供給と施設の維持管理の軽減を図り、農業生産の維持及び農業経営の安定に資するために平成26年8月1日に事業着手したものである。

なお、本事業は、岩洞ダムの波浪による湖岸浸食が西南西風の影響により進行している左岸側の湖岸について、倒木がダム管理に支障となることや、浸食による市道への影響や民地境界を侵す恐れがあると共に、周囲は県立自然公園に指定されており、環境へ与える影響も懸念されることから、浸食の著しい区間にについて今後計画的に浸食防止対策を進めるものである。

当事業の工事施工に係る埋蔵文化財の取扱いについては、平成27年10月28日付27北和岩第8号-7「埋蔵文化財包蔵地（岩洞湖E遺跡）の分布調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して分布調査の依頼を行って以降、数度の協議を実施して、令和元年度に岩洞湖E遺跡のうち1,233m²の調査を行ったものである。
 （農林水産省東北農政局岩手山麓農業水利事業所）



第1図 遺跡位置図

2 遺跡の位置と立地

本遺跡は、盛岡市戸川字亀橋地内に所在し、盛岡市役所玉山総合事務所から東へ約14km、岩洞湖家族旅行村から西に約1.6kmの位置にある。岩洞湖は、1960(昭和35)年に竣工した岩洞ダムによって堰き止められた人造湖で、それ以前は山林が広がっており、遺跡は南西向きの緩斜面に立地していた。現在の遺跡の多くは、貯水面が下がる秋から冬にかけてのみ確認することができる(第2図)。岩洞湖の周辺遺跡は、平成29年度に調査を行った岩洞湖I・H遺跡の調査報告に詳しく述べられているが、本遺跡の北は岩洞湖D遺跡、南は大橋遺跡、東は岩洞湖G遺跡、湖を挟んだ西は岩洞湖C遺跡が立地しており、今報告では周辺遺跡の表探遺物もその様相を知るために一部掲載した。

3 基本層序

I～V層に大別される。I層：表土(20～40cm)、II層：黒褐色土(20～40cm)、III層：暗褐色土(20～40cm・上面が遺構検出面)、IV層：黄褐色粘土(30～50cm・地山・上部に黄橙色バミス含む)、V層：岩盤層(層厚不明・地山)である。調査区の大半は、湖水による浸食でIV層黄褐色粘土まで大きく削られており、V層岩盤が露出する箇所が多い。I～III層は、旧地形の残る奥まった地形部分である調査区⑦・⑩にはよく存在するが、湖に向かって張り出している調査区⑤・⑥・⑧・⑨はほぼ流出している。

4 調査の概要

前年度に調査区①～④が調査済みのため、今回は調査区⑤～⑩の6箇所の調査を行った。いずれも、護岸工事予定地部分に調査区が設定されている。現況は前年度と同様に湖岸浸食を著しく受けている山の緩斜面部分で、多くの箇所でII・III層は流出している。I層も立木が残る箇所は根によって浮いた状態となり、大きく抉れていた。表土を重機で掘削したが、浮いたI層を除去すると、写真図版に示した通り、波に洗われたIV層もしくはV層岩盤が垂直に近い形で現れる様子が確認された。調査区のうち、唯一遺構が確認された調査区⑦と⑩を除き、旧地形の残存はなく遺構は認められなかった。

(1) 遺構

溝1(第2図、写図2) 調査区⑩のX= -18725～-18739、Y=42084～42123付近に位置する。北東から南西の山裾に走る断面箱形の溝で、調査区内で長さ42.0m、幅0.9m、最深1.0mを確認した。底面には東から3つの段差が認められ、底面標高は西端695.45m、中央694.93m、東端694.73mと東に向かって概ね傾斜する。遺物は出土していないため詳細な時期は不明だが、昭和初期に廃絶した建物があること、また東側は林道に繋がることから近現代の道路側溝の可能性がある。

沢1(第2図、写図1) 調査区⑦のX= -18998～-19012、Y=42132～42150付近に位置する。東から西に向かう埋没沢で、調査区内で長さ21.5m、幅3.5～5.3m、最深0.4mを確認した。埋土中位に、十和田中振テフラ(To-Cu)の二次堆積が認められるが、遺物は認められなかった。

(2) 遺物(第3図、写図2)

調査区内からは出土していない。浸食された湖岸から、第3図及び写図2に示した縄文時代前・後期、弥生時代前期の土器のほか、石器や近世～近代の陶磁器、寛永通寶、金属製品など各時期の遺物を表面採集することができた。また、西側の岩洞湖C遺跡からも弥生時代前期の土器を確認した。

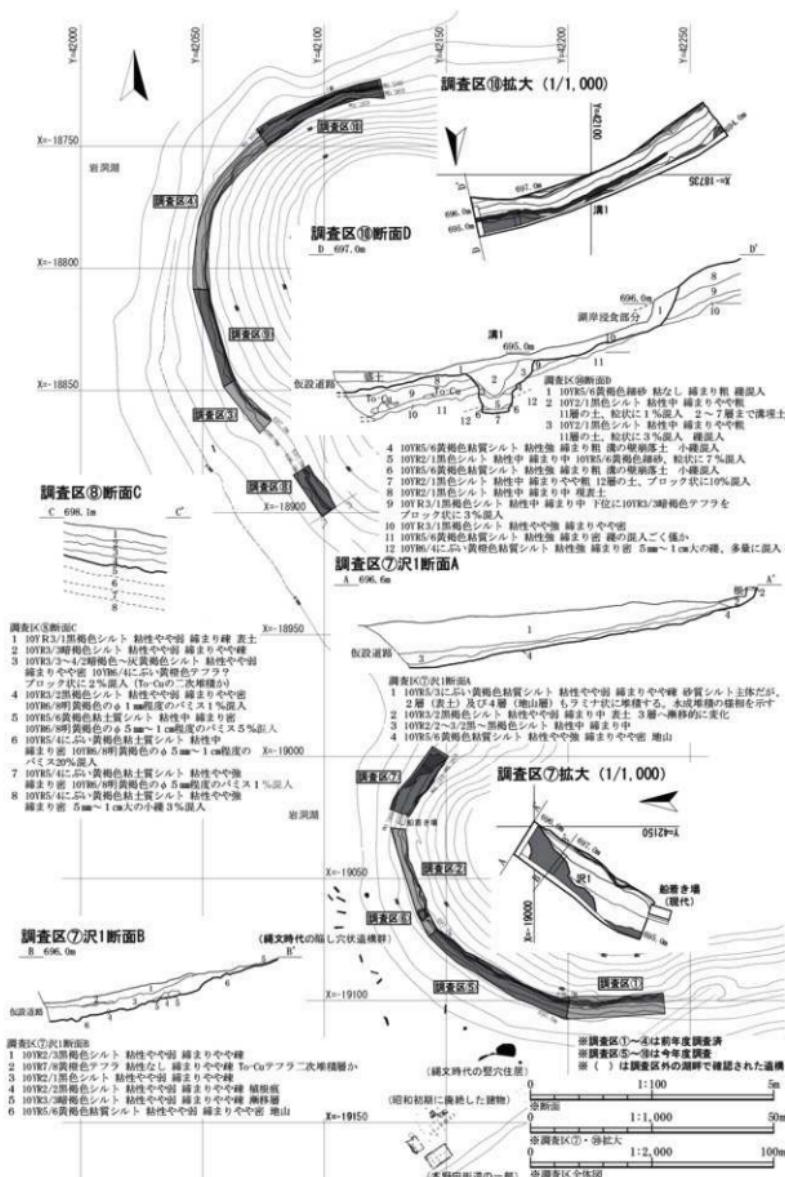
5まとめ

前年度と同様に、浸食された湖岸からは多くの遺構・遺物を確認しており、調査区内から検出した遺構も合わせて遺跡の様相を窺い知ることができた。

なお、岩洞湖E遺跡令和元年度調査に関する報告はこれをもって全てとする。

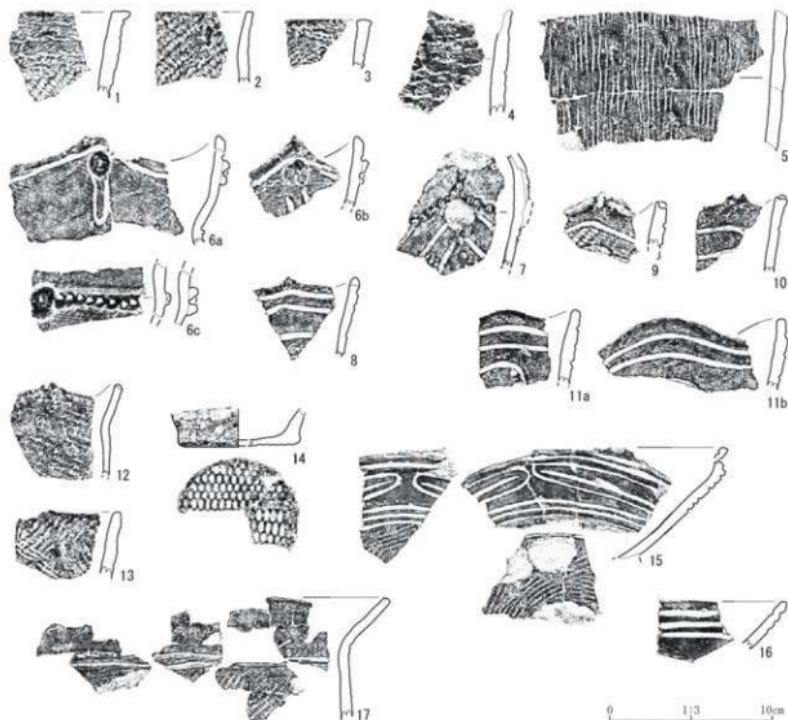
参考文献

岩文理 2019 「(2)岩洞湖E遺跡」[平成30年度発掘調査報告書] 岩文理調報第708集 p27-30



第2回 検出遺機

(4) 岩洞湖E遺跡



0 1:3 10cm

(+) : 残存部

No.	出土地点	部位	種類	密様	保存位置	計測値(cm) 口縫 頭縫	外観調査・施文など		内面調査・施文など	地土	備考
							頭縫	施文			
1	岩洞湖E遺跡・洞跡	表層	塊・土苔	深跡	口縫部	-	(53)	L型成形。平縫、頭部L字状(目条百合)で斜縫帶を構成。施文(L)。	植生ナメ	植物苔類多量	大木2a
2	岩洞湖E遺跡・洞跡	表層	塊・土苔	深跡	口縫部	-	(44)	L型成形。平縫、施文LR(縫)	植ナメ	植物苔類多量	大木2a少
3	岩洞湖E遺跡・洞跡	表層	塊・土苔	深跡	口縫部	-	(30)	L型成形。平縫、半輪状施文1脚(L)	植ナメ	植物苔類多量	大木2a少
4	岩洞湖E遺跡・洞跡	表層	塊・土苔	深跡	口縫部付近	-	(64)	施文同本文(S)付K(L)	植ナメ	植物苔類多量	大木2a少
5	岩洞湖E遺跡・洞跡	表層	塊・土苔	深跡	側部	-	(56)	半輪状多体2脚(L)	施ハケメ風		後期初期か
6	岩洞湖E遺跡・洞跡	表層	塊・土苔	深跡	口縫、側部	-	(66)	波状縫、山形突起、沈縫、筋付から垂下する波状突起。ガラス管取付、輪縫帶を構成。施文上部(L)	植ナメ		後期初期～前葉
7	岩洞湖E遺跡・洞跡	表層	塊・土苔	深跡	側上部	-	(73)	ガラス管取付、波状縫と施文上の列点式、L型縫合部、施文LR(縫)	植ナメ		後期初期～前葉
8	岩洞湖E遺跡・洞跡	表層	塊・土苔	深跡	口縫部	-	(49)	山形突起、沈縫	植ナメ		後期前葉(十箇内1)
9	岩洞湖E遺跡・洞跡	表層	塊・土苔	深跡	口縫部	-	(36)	山形突起、突起部分に折み、沈縫、施文LR(縫)	植ナメ		後期前葉(十箇内1)
10	岩洞湖E遺跡・洞跡	表層	塊・土苔	深跡	口縫部	-	(47)	山形突起、突起部分に折み、沈縫、施文LR(縫)	植ナメ		後期前葉(十箇内1)
11	岩洞湖E遺跡・洞跡	表層	塊・土苔	深跡	口縫部	-	(48)	波状縫、沈縫	植ナメ		後期前葉(十箇内1)
12	岩洞湖E遺跡・洞跡	表層	塊・土苔	深跡	口縫部	-	(58)	山形突起、突起部分に折み、施文LR(縫)	植ナメ		後期前葉(十箇内1)
13	岩洞湖E遺跡・洞跡	表層	塊・土苔	深跡	口縫部	-	(41)	平縫、羽状LR(縫)・L字結束	植ナメ		後期前葉(十箇内1)
14	岩洞湖E遺跡・洞跡	表層	塊・土苔	深跡	底部	2.4	(24)	ござ日焼込み	ナメ		後期前葉か
15	岩洞湖E遺跡・洞跡	表層	塊・土苔	高縫	口縫・側部	-	(68)	変形工字文、波縫、施文LR(縫)・沈縫断面三角形	ミガキ		後生前葉
16	岩洞湖E遺跡・洞跡	表層	塊・土苔	浅縫	口縫部	-	(29)	変形工字文、沈縫、波縫、内面平行沈縫	ミガキ		後生前葉
17	岩洞湖E遺跡・洞跡	表層	塊・土苔	要	口縫・側上	0.5	(75)	口縫波状突起のみ、縫口無文帶、側部に平行沈縫、施文上部(L)	植ナメ		後生前葉

第3図 出土遺物



調査区全景（西から）



調査区⑤全景（南東から）



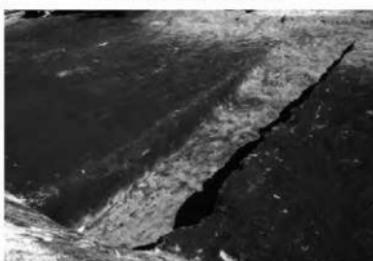
調査区⑥全景（西から）



調査区⑦沢1全景（北西から）



調査区⑦沢1断面A（南西から）



調査区⑦沢1断面B（西から）



調査区⑧全景（北から）



調査区⑧基本層序断面C（北西から）

写真図版1 棚出遺構（1）



調査区⑨全景（南から）



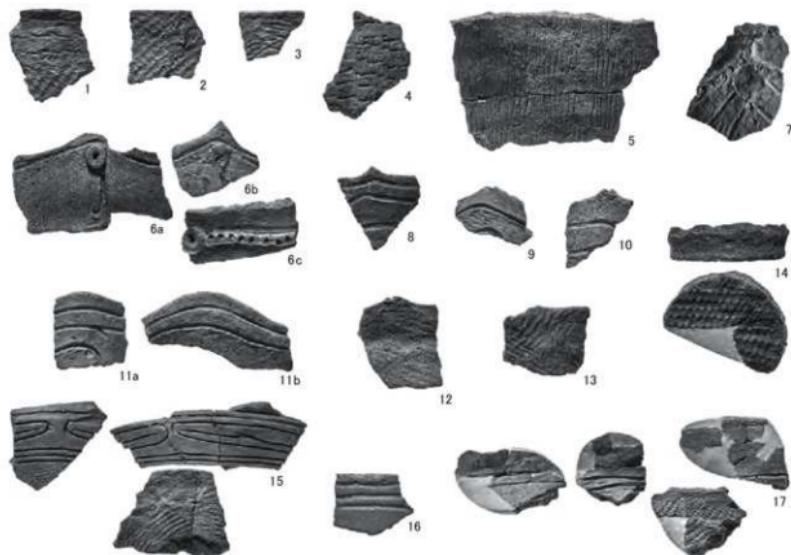
調査区⑩全景（西から）



調査区⑪溝1 全景（北東から）



調査区⑫断面D（西から）



写真図版2 検出遺構（2）、出土遺物

(5) 上矢次 I 遺跡

所 在 地	矢巾町大字上矢次第4地割32-1	遺跡コード・略号	KY I - 19・LE46-0244
委 託 者	岩手県盛岡広域振興局土木部	調査対象面積	1,700m ²
事 業 名	一級河川岩崎川筋上矢次地区河川改修(その9)	調査終了面積	1,700m ²
発掘調査期間	平成31年4月8日～令和元年6月14日	調査担当者	村上 拓・羽柴直人・酒井野々子

1 調査に至る経過

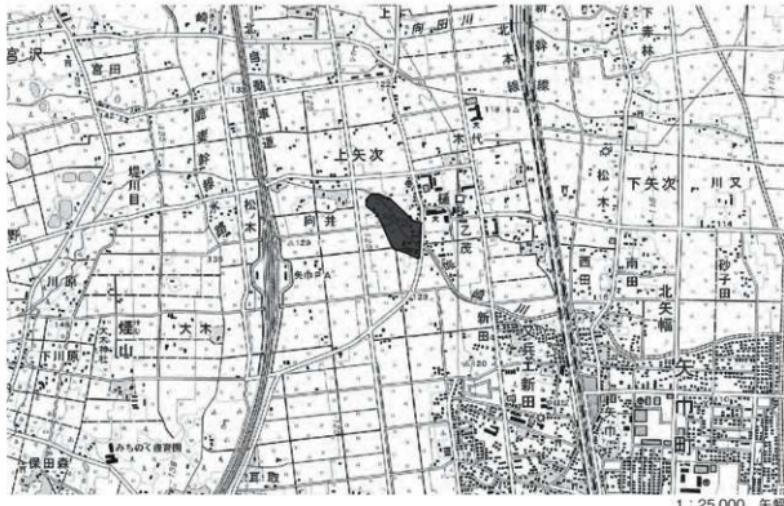
上矢次 I 遺跡は、「一級河川岩崎川 床上浸水対策特別緊急事業」の実施に伴い、その事業区域内に存在することから本発掘調査を実施することとなったものである。

本事業は平成25年8月に矢巾町を中心とした集中豪雨により、約380棟もの床上・床下浸水を引き起こす水害が発生したことを受け、同様の水害から地域を守るために、床上浸水対策特別緊急事業の導入により川の断面積を広げる河川改修工事を実施するものである。

当事業の施工にかかる埋蔵文化財の取扱いについては、平成30年7月10日付盛広土第6056号で岩手県教育委員会に対して「上矢次 I 遺跡」の試掘調査を依頼し、平成30年9月26日に試掘調査を実施した。

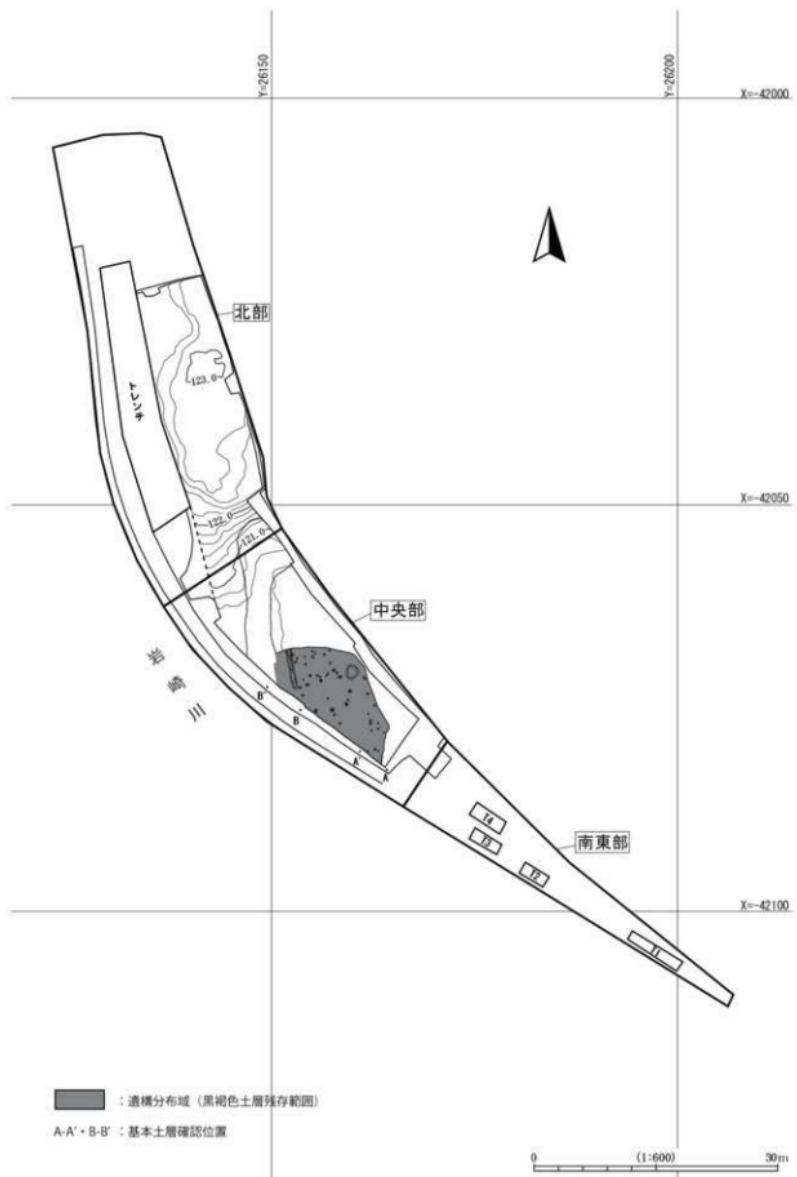
試掘調査の結果、埋蔵文化財の存在が確認され、平成30年10月10日付教生第996号により、工事に着手するには上矢次 I 遺跡の本発掘調査が必要となったことから、岩手県教育委員会と協議・調整を行い、平成31年4月1日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し本発掘調査の実施に至ったものである。

(盛岡広域振興局土木部河川砂防課)



第1図 遺跡位置図

(5) 上次次 I 遺跡



第2図 調査区全体図

2 遺跡の位置と立地（第1図）

遺跡は、矢巾町役場の北北西約1.8km、矢巾町立煙山小学校敷地の西隣に所在する。

遺跡範囲を横断する岩崎川は、南昌山山麓を源とする北上川の支川で、当地域においては灌漑用水はもとより飲料水等の生活用水を供給してきた重要な河川である。また同時に、往古より渴水と氾濫を繰り返してきた制御困難な川としての側面も併せ持っている。山麓を流れ下った河水は、扇状地に至るとそのまま地下に浸透してしまう。このため、河川の流量は乏しい状態を常とし、水不足に苦悩する農民同士の紛争の種ともなった。遺跡付近の旧い小字「ツツミ」が示すとおり、かつて当地域にいくつも設けられた溜池の存在は、水不足との格闘の歴史を背景としている。

一方で、ひとたび集中的な降雨があれば水量は平時の30倍にも達し、多量の土砂を伴って氾濫する「暴れ川」でもあった。平成25年8月の集中豪雨では、周辺住宅への浸水をはじめ、道路・橋梁に大きな被害をもたらすなど、今なおその相貌を垣間見せている。

自然堤防と後背湿地がやや複雑に重層する遺跡周辺の微地形は、このような岩崎川の氾濫の累積によって形成されたものである。遺跡は現流路の両岸に形成された微高地を中心とする範囲に立地しており、現流路の左岸に面する微高地縁辺部とこれに連続する低位部が今次調査の対象である。

3 調査区付近の微地形と堆積状況（第2～4図）

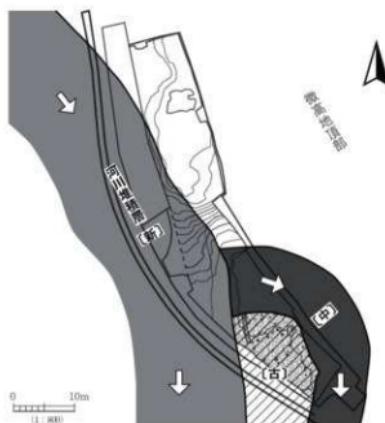
調査区は岩崎川の左岸に沿った全長約140m・最大幅20m前後の弧状を呈する範囲である。現河道側はコンクリートブロックによる護岸、高位側は当該事業に関連し先行して施工されたパイプラインにより画されている。以下、調査区を「北部」「中央部」「南東部」の3つに区分し記述する。

調査区の「北部」は微高地頂部に相当し、その縁辺を成す段丘崖様の急斜面を経て、低位面「中央～南東部」へと連続している。現況の標高は、北部で123.6m前後、中央～南東部で122.0m強である。

調査区南東部は幅員狭小のため、トレンチ調査で下部の状況の把握を行った（T1～T4）。結果、当地点は、盛土及び河川堆積層が現河床面と同レベル（-200cm前後）まで厚く堆積する旧河道内に位置することを確認した。一方、宅地の一角であった北部は削平・攪乱が著しく、自然堤防を形成する砂礫層が表土直下に露出し、その下位もまた2m以下まで同様の疊層が連続する状況が観察された。このように、調査範囲の両端である南東部及び北部では、ともに遺構・遺物の分布は認められなかった。

中央部は南東部に連続する低位面で、同様に2m前後の厚い河川堆積層の広がりが観察された。しかしながらこの地点では、河川堆積層の下位から氾濫直前の古表土とみられる黒褐色土層の堆積と、これに伴う平安時代遺物の分布が確認された（写真図版2）。

同地点では少なくとも三度の氾濫に伴う堆積層が認められる。黒褐色土層を直に被覆するのは最も古い段階の河川堆積層〔古〕で、その後、北東側に大きく蛇行する古流路（河川堆積層〔中〕）と概ね現流路に並行する古流路（河川堆積層〔新〕）が、黒褐色土層を地盤層以下まで深く削り取っている。これにより、

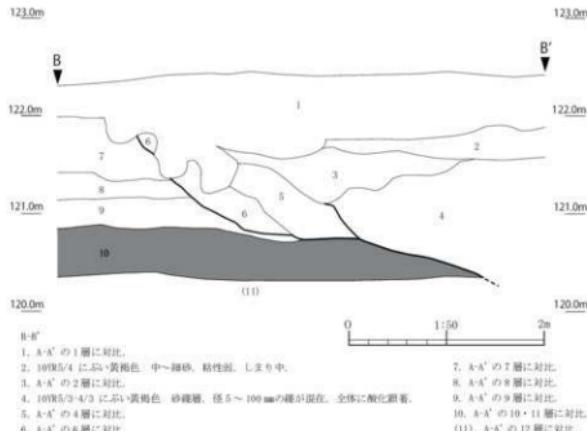
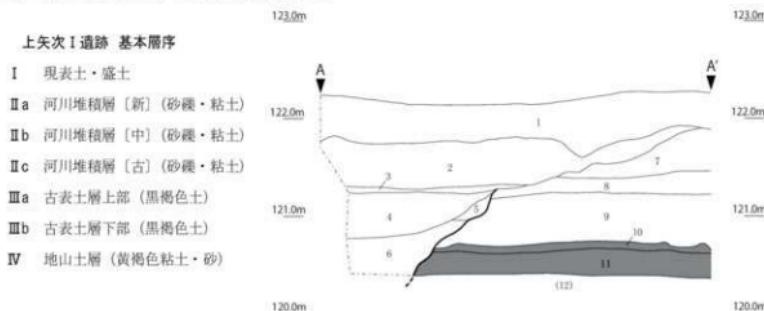


第3図 調査区内の古流路（河川堆積層）

(5) 上矢次 I 遺跡

本来、面的な広がりをもっていた黒褐色土層（及びこれを被覆していた河川堆積層〔古〕）は、上記二つの古流路（〔中〕・〔新〕）に挟まれた110m弱の半円形範囲にのみ取り残され、遺構・遺物もまた同範囲内に限定的に遺存することが判明した（第3図）。

下図A-A'・B-B'は中央部の調査区壁面の一部を記録したものである。中央部に観察される本遺跡の基本層序は以下のように整理される。



第4図 基本層序（調査区中央部壁面）

4 調査成果

(1) 遺構

上述の通り、調査区内で遺構が分布するのは、中央部の黒褐色土層（Ⅲ層）残存範囲に限定される。本来の遺構構築面はⅢa層～Ⅲb層上面にあるものと考えられるが、一部を除き地山Ⅳ層上面において検出した。以下、個別に記載する。

柱穴群P1～54（第1表、第5図、写真図版4）

〔位置・検出状況・所見〕 54個を検出し、うち5個は精査の結果除外、1個（P20）は異なる性質が想定されることから別記（後掲）することとした。よって、登録数は48個である。

これらの柱穴群は黒褐色土層残存範囲の全域に分布し、中央～北半部での密度が比較的高い。本来の構築面はⅢb層上面以上と考えられるが、大半はⅣ層上面で検出した。埋土の主体は黒褐色土（Ⅲ層土）で、掘方埋土に地山ブロックを多く含み柱痕跡が認識できる一群と、黒褐色土のみで埋まるものとに大別される。

前者は後者に比して規模が大きく、また掘方埋土に含まれる地山ブロックによって識別し易いことから、Ⅲb層上面で明瞭に把握された。掘方の平面形が隅丸方形を基調とするものが目立つ。後者はⅣ層上面まで掘り下げが進んだ段階で検出したものである。

前者の分布に注目すると、P7-4-2（東西）、P11-6-18（東西）、P22-6-4（南北）など、列状に並ぶ配置も認められるが、建物跡を想定することは難しい。また後掲の他の遺構との関連性も不明である。

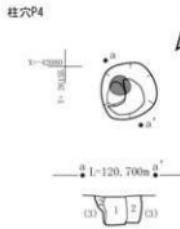
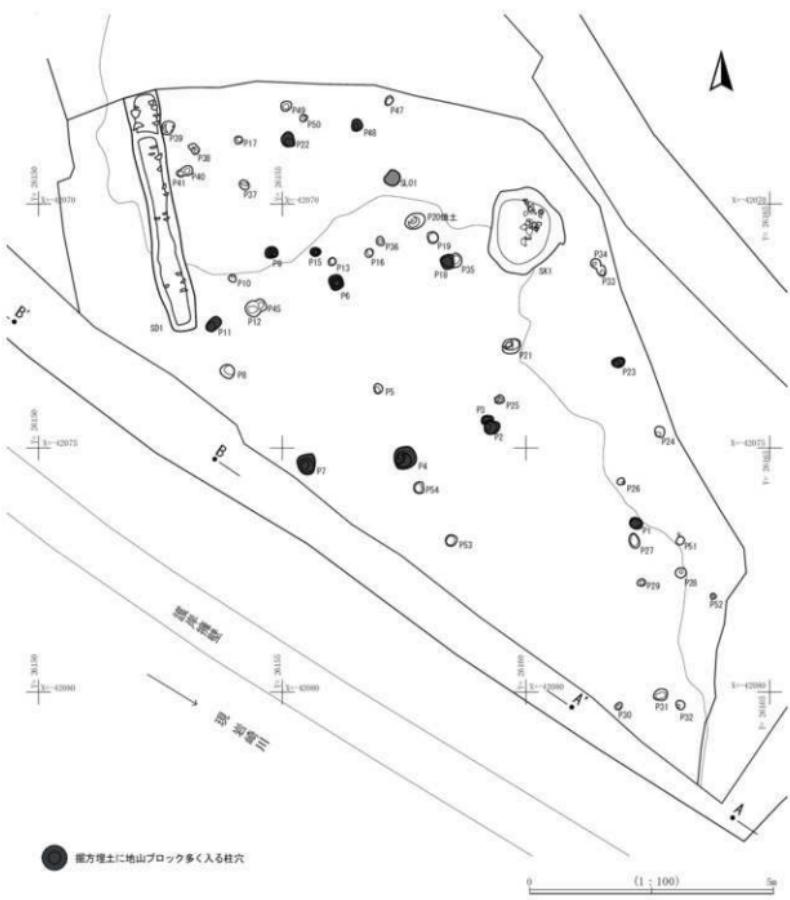
〔遺構の時期〕 同一面の他の遺構及び出土遺物の年代観から、平安時代前期（9世紀前半）のものと考えられる。

〔出土遺物〕 掘方埋土に地山ブロックを含む柱穴P2・15・18・22から、ごく少量の土器細片が出土している。

第1表 柱穴一覧

No.	平面規模 (cm)	底面標高 (m)	地山 土壤※	遺物 (g)	備考	No.	平面規模 (cm)	底面標高 (m)	地山 土壤※	遺物 (g)	備考
P1	23.5 × 22.0	120.178	○			P28	19.5 × 16.5	120.263			
P2	33.0 × 30.5	120.321	○	0.7	P3を切る	P29	15.6 × 14.0	120.272			
P3	27.0 × 13.0	120.342	○		P2に切られる	P30	14.0 × 15.0	120.355			
P4	41.0 × 40.0	120.237	○			P31	26.5 × 20.0	120.359			
P5	19.0 × 18.0	120.391				P32	16.5 × 17.0	120.121			
P6	33.0 × 28.5	120.118	○			P33	20.0 × 17.5	120.298			P34と重複
P7	35.0 × 31.0	120.274	○			P34	19.0 × 18.5	120.253			P33と重複
P8	30.5 × 26.5	120.340				P35	25.0 × 13.5	120.349			P18に切られる
P9	26.0 × 23.0	120.204	○			P36	14.0 × 13.5	120.328			
P10	18.0 × 15.5	120.321				P37	18.5 × 15.5	120.204			
P11	31.0 × 20.0	120.306	○			P38	20.5 × 14.5	120.191			
P12	31.0 × 25.0	120.265			P45を切る	P39	24.0 × 24.0	120.157			
P13	17.0 × 14.0	120.379				P40	19.0 × 17.5	120.271			
P14					欠番	P41	16.0 × 14.5	120.274			P41と重複
P15	23.5 × 22.0	120.242	○	19		P42					P40と重複
P16	18.0 × 14.5	120.378				P43					欠番
P17	17.0 × 17.0	120.232				P44					欠番
P18	27.0 × 28.5	120.281	○	4.8	P35を切る	P45	23.0 × 15.0	120.352			P12に切られる
P19	22.5 × 23.0	120.220				P46					欠番
P20				935.9	別記	P47	19.0 × 14.0	120.317			
P21	33.5 × 24.5	120.300				P48	20.0 × 19.0	120.097	○少		
P22	20.0 × 21.0	120.193	○	15.6		P49	19.5 × 16.3	120.312			
P23	25.5 × 21.0	120.170	○			P50	12.5 × 14.0	120.218			
P24	20.0 × 18.5	120.200				P51	15.0 × 13.0	120.157			
P25	20.0 × 17.0	120.268				P52	11.0 × 10.0	120.358			
P26	15.0 × 12.5	120.253				P53	24.5 × 21.5	120.424			
P27	27.0 × 18.5	120.382				P54	22.0 × 19.0	120.416			

※ ○：掘方埋土に地山土塊（Ⅳ層土）を含むもの



1. 10YR2/2 黑褐色 シルト、粘土中。しまり中へや確。地山小ブロック(径5-10mm)少。
樹木(5-10cm)少。樹(立木)少。柱盤。
2. 10YR2/2 黑褐色、粘土中。しまり混。地山ブロック(径8-40mm)量。腐面埋土。
(3) 10YR7/6-6 黄褐色。樹中。しまり混。樹層断。部分的に白色化(グライ化)。

牽柱穴、検出面及び底面でも柱痕確認できる、振り方の平面形状は楕丸方形。

(1 : 40) [m]

第5図 遺構分布域（柱穴群）

土坑 SK1 (第6図、写真図版4・5)

〔位置・検出状況〕 X= -42.070・Y=26.160付近に位置する。県教委の試掘(T6)でプランの一部が確認されていたものであり、今次調査においてトレンチを再掘、再検出した。その後、周辺の掘り下げにより、遺物片を含む黒褐色土(Ⅲ層土)範囲として全形を確認した。検出面はⅣ層上面である。

〔規模・形状〕 平面形は180×150cmの梢円～隅丸方形を呈する。検出面からの残存深度は30cm強である。底面は水平で平滑に整い、壁は底面外縁から直線的あるいはごく弱く内湾して立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕 底面付近にはわずかにⅣ層土の小ブロックを含む層(2層)が認められるが、大半がⅢ層土(1層)により埋没している。1層を細分する根拠は見い出せなかったが、本層の中～上部に集中する出土遺物の分布面が凹レンズ状を呈することから、表土(Ⅲ層土)の流入により漸次埋没が進む過程で、これらの遺物が内部に投棄されたものと考えられる。

〔重複・関連遺構〕 直接重複する遺構はない。遺物の接合関係等から、後掲SL1・P20との同時性・関連性がうかがえる。

〔遺構の時期〕 出土遺物の年代観から平安時代前期(9世紀前半)のものとみられる。

〔出土遺物〕(第8・9図、写真図版6・7) 土師器壺・甕、須恵器壺・甕が出土した(1~5・11~18・20・21)。出土土器類の総量は3,633.5gである。

焼土遺構 SL1 (第6図、写真図版5)

〔位置・検出状況〕 X= -42.069・Y=26.157付近に位置する。Ⅲb層上面において、略円形の焼土生成範囲として認識された。

〔規模・形状・所見〕 平面形は径34cm前後の略円形を呈する。赤変深度は5cm程度である。上面に顕著な硬化は見られないが、直上に土器片・炭化物の散布が認められ、その上をⅢa相当層に被覆されていることから、燃焼面が遺存しているものと考えられる。

〔重複・関連遺構〕 直接重複する遺構はない。南南東100cmに近接するP20(後掲)には、焼土ブロック・焼粘土塊等、燃焼行為に伴う痕跡が集中して観察されることから、強い関連性がうかがえる。

〔遺構の時期〕 同一面の他の遺構及び出土遺物の年代観から、平安時代前期(9世紀前半)のものと考えられる。

〔出土遺物〕(第8図、写真図版6) 焼土直上から須恵器壺片が出土した(8)。後掲P20出土土器片と遺構間接合した資料である。出土土器類の総量は21.4gである。

土器片・焼土ブロック・焼粘土塊の集中する小土坑 P20 (第6図、写真図版5)

〔位置・検出状況〕 X= -42.070・Y=26.158付近に位置する。Ⅲb層上面において、土器片及び焼土ブロックの集中範囲として認識された。

〔規模・形状〕 平面形は34×30cmの梢円形を呈する。検出面からの残存深度は約20cmである。丸底で、壁は内湾外傾して立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕 Ⅲ層土(2層)による自然堆積が上部まで進んだのち、焼土ブロック及び土器片が集中して入れられている。

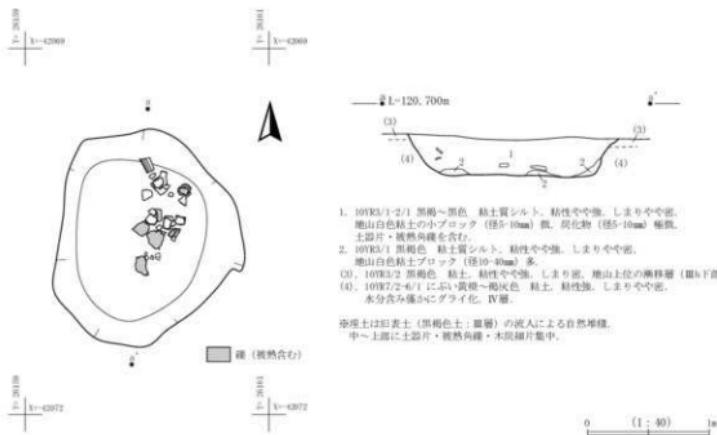
〔重複・関連遺構〕 直接重複する遺構はない。先述の通り、北北西100cmに近接する焼土遺構SL1との強い関連性がうかがえる。

〔遺構の時期〕 出土遺物の年代観から平安時代前期(9世紀前半)のものとみられる。

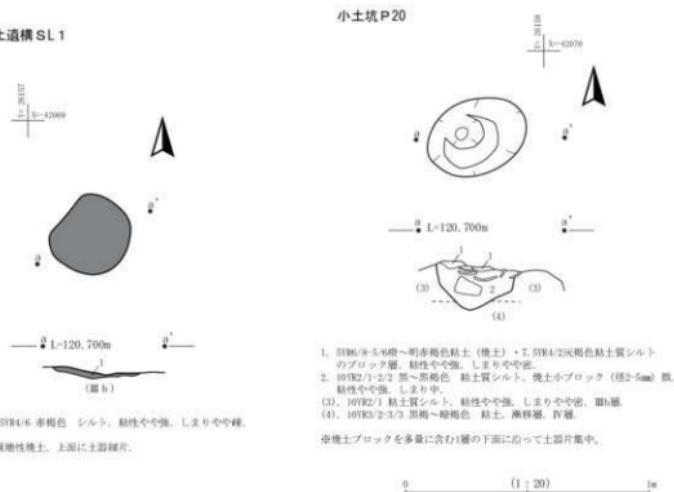
〔出土遺物〕(第8図、写真図版6・7) 埋土の最上部に集中して、土師器壺・甕、須恵器壺が出土した(5~9・19)。このうち5はSK1、8はSL1の出土土器と遺構間接合した資料である。出土土器類の総量は935.9gである。

(5) 上次次 I 遺跡

土坑 SK 1



焼土遺構 SL 1



第6図 個別遺構図 (1)

溝状遺構 SD1（第7図、写真図版5・6）

〔位置・検出状況〕 X=-42,070・Y=26,152付近に位置する。IV層上面において帯状の黒褐色土（Ⅲ層土）範囲として認識された。

〔規模・形状〕 北端を古流路（河川堆積層〔中〕：IIb層）に切られ全体形状は不明だが、残存長約5.0m、幅約70cmの帯状を呈する。検出面からの残存深度は35cm前後である。両側縁の壁はほぼ直立し、南端部も直線的に立ち上がる明瞭な壁を持つ。このことから、遺構は南側には延伸せずに細長い箱形を呈するものであったと考えられる。底面は全体に平坦に整っているが、北端から1.0mまでの範囲が以南に比して一段（約10cm）高くなっている。また、側壁面に沿って連続する三日月形の工具痕が観察された。本遺構の構築（掘削）に伴う痕跡とみられる。

〔埋土と堆積状況〕 埋土は黒色土（1層：Ⅲ層土）を主体とし下部に地山ブロックを多く含む（2層）。1と2の層界は明瞭な面を成さないことから、掘削で巻き上げられた地山土塊がそのまま残置され、その後、表土（Ⅲ層土）の自然流入により埋没したものと推測される。

〔重複・関連遺構〕 古流路（河川堆積層〔中〕）に切られる。

〔遺構の時期〕 同一面での他の遺構及び出土遺物の年代観から、平安時代前期（9世紀前半）のものと考えられる。

〔出土遺物〕（第8図、写真図版6） 埋土最上部から須恵器坏が出土した（10）。出土土器類の総量は122.7gである。

（2）出土遺物（第2表、第8・9図、写真図版6・7）

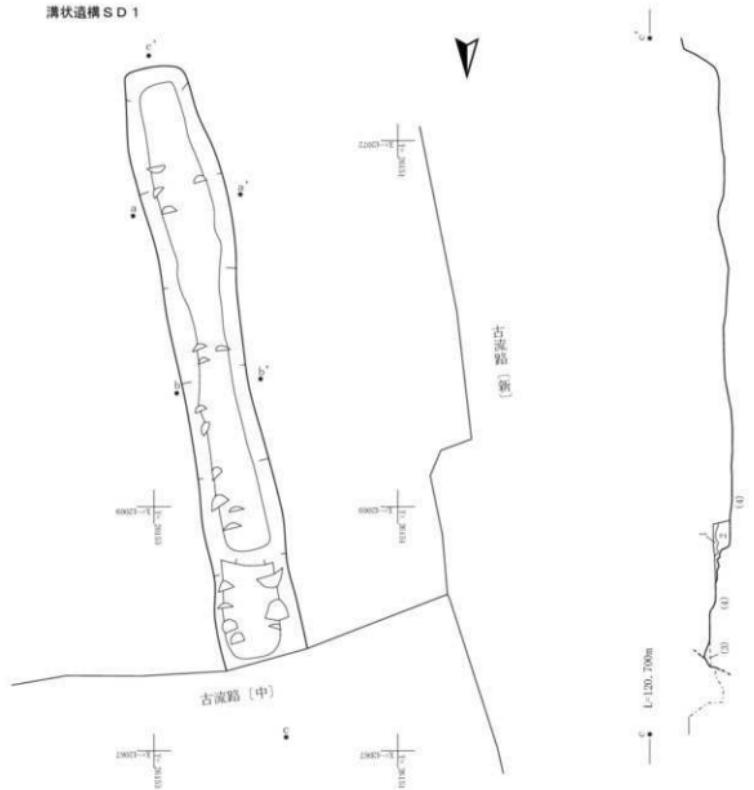
出土遺物は、土師器・須恵器の坏・甕類で、総重量は6,420gである。1～7は土師器坏である。ミガキ・黒色処理による内面調整が観察されるのは1点のみ（4）で、他は内外面ともにロクロナデ、底部回転糸切り、一部に体部下端・底面のケズリが観察されるものを含む。12～20は土師器甕である。タタキののち体部上部～口縁部をロクロナデ、その後体部以下にケズリが施されたものを主体とする。8～11は須恵器坏、21～26は須恵器甕類である。土師器に比して出土量は少ない。以上は短期間に同時的に用いられた土器群とみられる。帰属時期としては概ね9世紀前半が想定される。

4 まとめ

岩崎川現河道の左岸に面する低位面から、9世紀前半期の遺物を伴う遺構群が検出された。遺跡の主要部は今次調査区周辺の微高地頂部に展開している可能性が高いことから、今次調査で確認したこれらの遺構群は、低位面（川辺・水辺）における人間活動の痕跡として興味深い事例といえる。居住空間とは異なる、「生産」あるいは「祭祀」等に関わる可能性を考慮に入れるべきであろう。

また、この遺構分布面が後世の河川活動による厚い土砂に被覆され、現地表面下2m前後の深度から検出された点も興味深い。現地形はこれまでの活発な河川活動の累積により形成されたものであり、徳丹城造営時及びその前後の当地域における人間活動の痕跡が、現況からは想定が難しい地点にも分布する可能性を示唆する結果ともいえよう。岩崎川のみならず、北上川・零石川の作用によって形成された当地の広大な氾濫原には、いまだ把握されない多くの遺跡が遺存するものと思われる。今後、埋蔵文化財の低地における有り様を考えるとき、顧慮されるべき一例となることを期待したい。

なお、上矢次I遺跡令和元年度調査に関する報告は、これをもって全てとする。

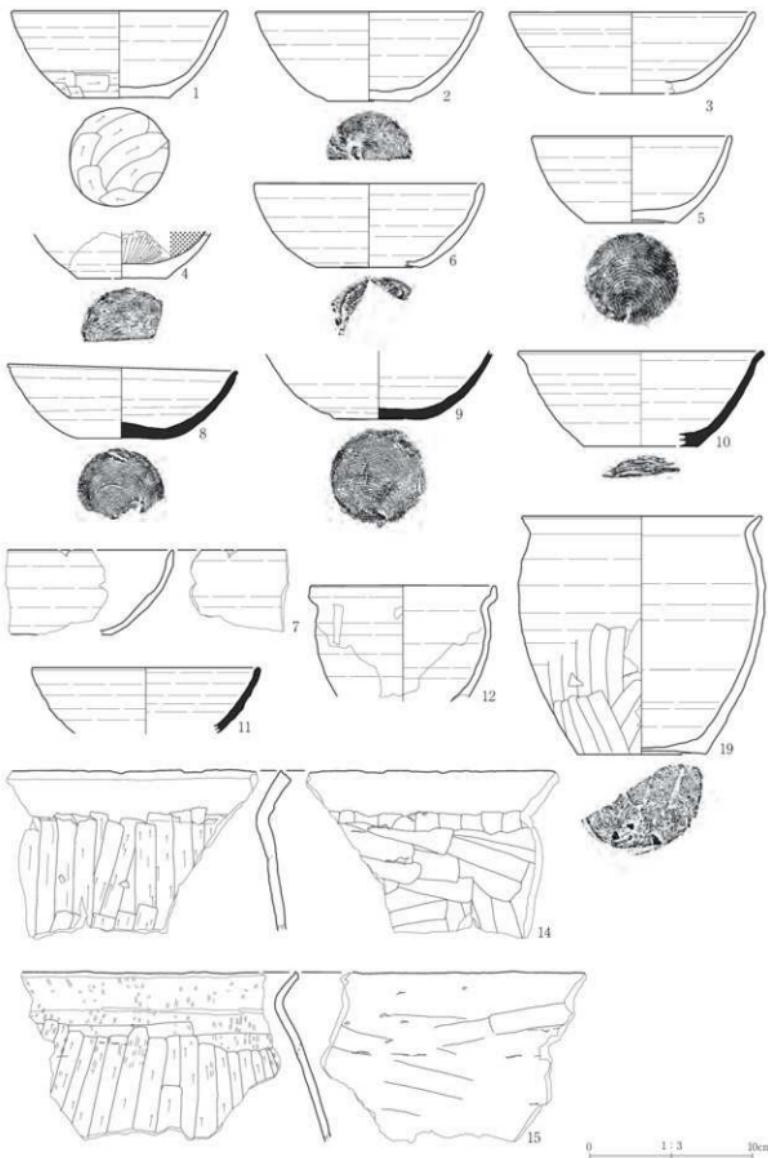


第7図 個別遺構図(2)

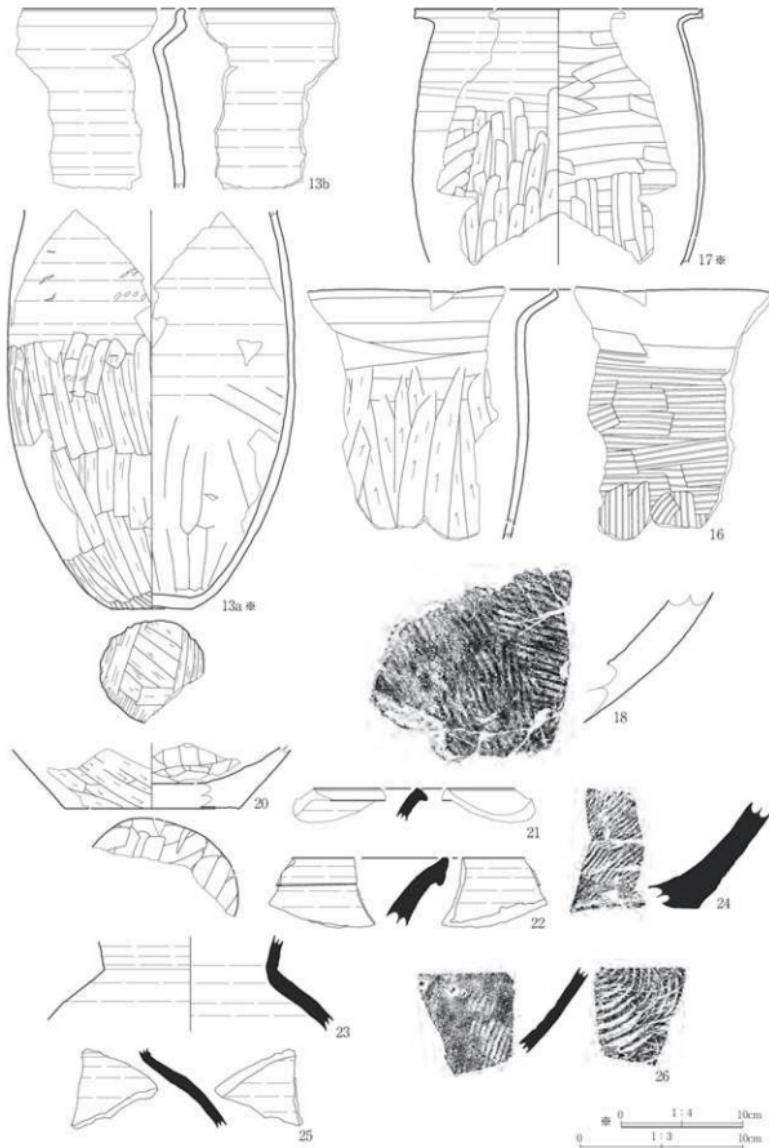
第2表 遺物一覧

出典 番号	出土地点	層位	種別	部位	箇部調整等			その他	国	方旗	
					内面	外面	底面外周				
1 4	土坑SKS 1	埋土上部	土瓶器	坏	口~底 周輪ナデ	周輪ナデ→下端ナデ	ケズリ	内面黒色付着物	8	6	
2 8	土坑SKS 1	埋土	土瓶器	坏	口~底 周輪ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ切	8	6	
3 5	土坑SKS 1	埋土	土瓶器	坏	口~底下 周輪ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ	8	6	
4 6	土坑SKS 1	埋土	土瓶器	坏	底 スカリ→黒色處理	周輪ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ	8	6	
5 12	土坑SKS 1・小土坑P20	埋土	土瓶器	坏	口~底 周輪ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ	周輪間接合	8	6	
6 14	小土坑P20	埋土	土瓶器	坏	口~底 周輪ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ切	8	6	
7 13	小土坑P20	埋土	土瓶器	坏	口~底下 周輪ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ	8	6	
8 21	小土坑SL 1・小土坑P20	埋土	土瓶器	坏	口~底 周輪ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ	周輪間接合	8	6	
9 16	小土坑P20	埋土	土瓶器	坏	底~底 周輪ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ	8	6	
10 20	漆塗輪SD 1	埋土上部	須恵器	坏	口~底 周輪ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ切	8	6	
11 18	土坑SKS 1	埋土上部	須恵器	坏	口~底 周輪ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ	8	6	
12 1	土坑SKS 1	埋土上部	土瓶器	要	口~体下 周輪ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ	8	6	
13a 10b	土坑SKS 1	埋土	土瓶器	要	体上~底 周輪ナデ→ヘラナデ	周輪ナデ	周輪ナデ	タタキ→タヌリ	9	7	
13b 10b	土坑SKS 1	埋土	土瓶器	要	口~体上 周輪ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ	タタキ→タヌリ	9	6	
14 2	土坑SKS 1	埋土上部	土瓶器	要	口~体上 周輪ナデ→ヘラナデ	周輪ナデ→ヘラナデ	周輪ナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ケズリ	8	6	
15 7	土坑SKS 1	埋土	土瓶器	要	口~体上 周輪ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ	タタキ→ヨコナデ→ケズリ	8	7	
16 9	土坑SKS 1	埋土	土瓶器	要	口~体上 周輪ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ	ヨコナデ→ケズリ	9	7	
17 11	土坑SKS 1	埋土	土瓶器	要	口~体下 周輪ナデ→ヘナナデ	周輪ナデ→ヘナナデ	周輪ナデ→ヘナナデ	周輪ナデ→ヘナナデ	9	7	
18 17	土坑SKS 1	埋土上部	土瓶器?	要	底 周輪ナデ?	周輪ナデ?	周輪ナデ?	タタキ	タタキ	9	7
19 15	小土坑P20	埋土	土瓶器	要	口~底 周輪ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ切	8	7	
20 3	土坑SKS 1	埋土上部	土瓶器	要	底 周輪ナデ?	周輪ナデ?	周輪ナデ?	ケズリ	ケズリ	9	7
21 19	土坑SKS 1	埋土	須恵器	要	口 須恵器ナデ・自然釉	須恵器ナデ	須恵器ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ	9	7
22 26	遺物研究保存施設	Ⅲ a	須恵器	要	口 須恵器ナデ	須恵器ナデ	須恵器ナデ	周輪ナデ	周輪ナデ	9	7
23 25	遺物研究保存施設	Ⅲ a	須恵器	要	頭~体上 須恵器ナデ	須恵器ナデ	須恵器ナデ	須恵器ナデ	須恵器ナデ	9	7
24 24	遺物研究保存施設	Ⅲ a	須恵器	要	底 須恵器ナデ	須恵器ナデ	須恵器ナデ	タタキ	タタキ	9	7
25 23	遺物研究保存施設	Ⅲ a	須恵器	要	頭~体上 須恵器ナデ	須恵器ナデ	須恵器ナデ	須恵器ナデ	須恵器ナデ	9	7
26 22	遺物研究保存施設	Ⅲ a	須恵器	要	体 7ナゲ	7ナゲ	7ナゲ	タタキ	タタキ	9	7

(5) 上次次 I 遺跡



第8図 出土遺物 (1)



第9図 出土遺物（2）

(5) 上矢次 I 遺跡



空中写真 調査区全景（西→）



空中写真 調査区全景（南東→）



空中写真 調査区中央～北部



調査区中央部 黒褐色土層（Ⅲ層）残存範囲検出状況（南東→）

(5) 上矢次 I 遺跡



空中写真 遺構分布域 全景



基本土層（調査区中央部 A-A' 付近、北東→）

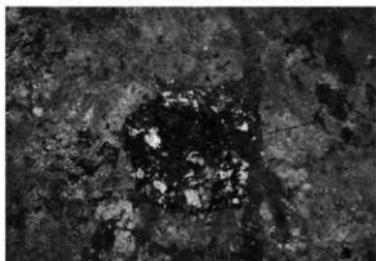
写真図版 3 調査区・基本土層



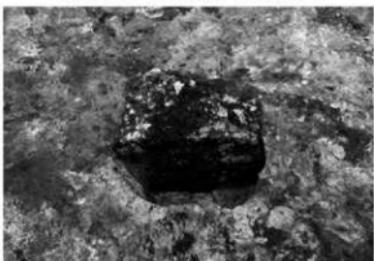
基本土層（調査区中央部 B-B' 付近、北東→）



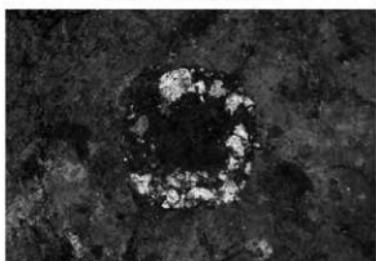
Ⅲ層及び SD1 を切る古流路（中）(南西→)



柱穴 P 4 棚出状況 (南→)



柱穴 P 4 断面 (西→)



柱穴 P 6 棚出状況 (南→)



柱穴 P 22 棚出状況 (南東→)



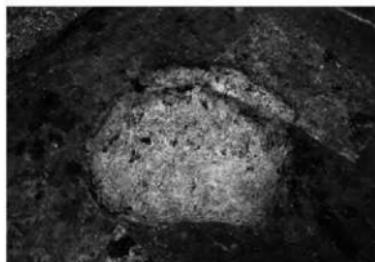
中央部 作業風景



土坑 S K 1 遺物出土状況 (北西→)

写真図版 4 基本土層・柱穴・土坑

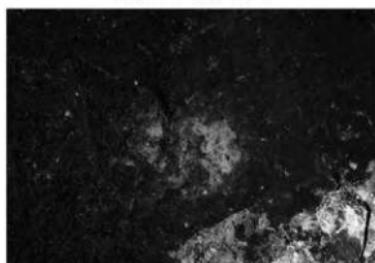
(5) 上矢次 I 遺跡



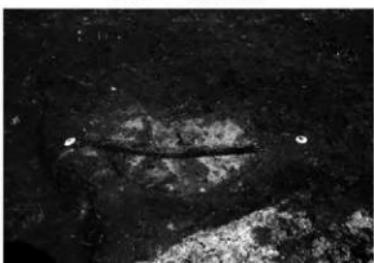
土坑SK 1 全景 (西→)



土坑SK 1 断面 (西→)



焼土遺構SL 1 全景 (南東→)



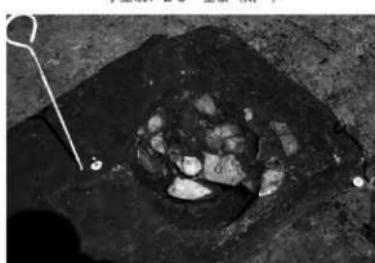
焼土遺構SL 1 断面 (南東→)



小土坑P 20 全景 (南→)



小土坑P 20 断面 (南→)



小土坑P 20 出土物出土状況 (南→)



溝状遺構SD 1 断面c 及び工具痕 (西→)

写真図版5 土坑・焼土遺構・小土坑



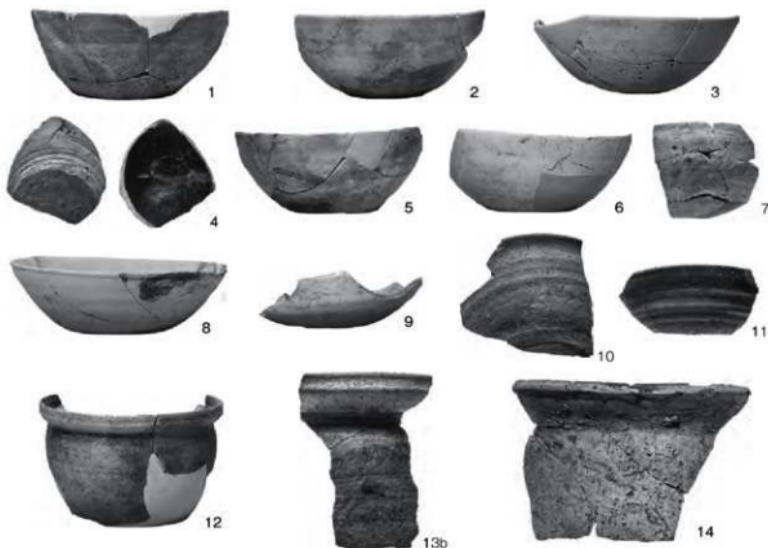
溝状遺構 SD 1 全景 (北→)



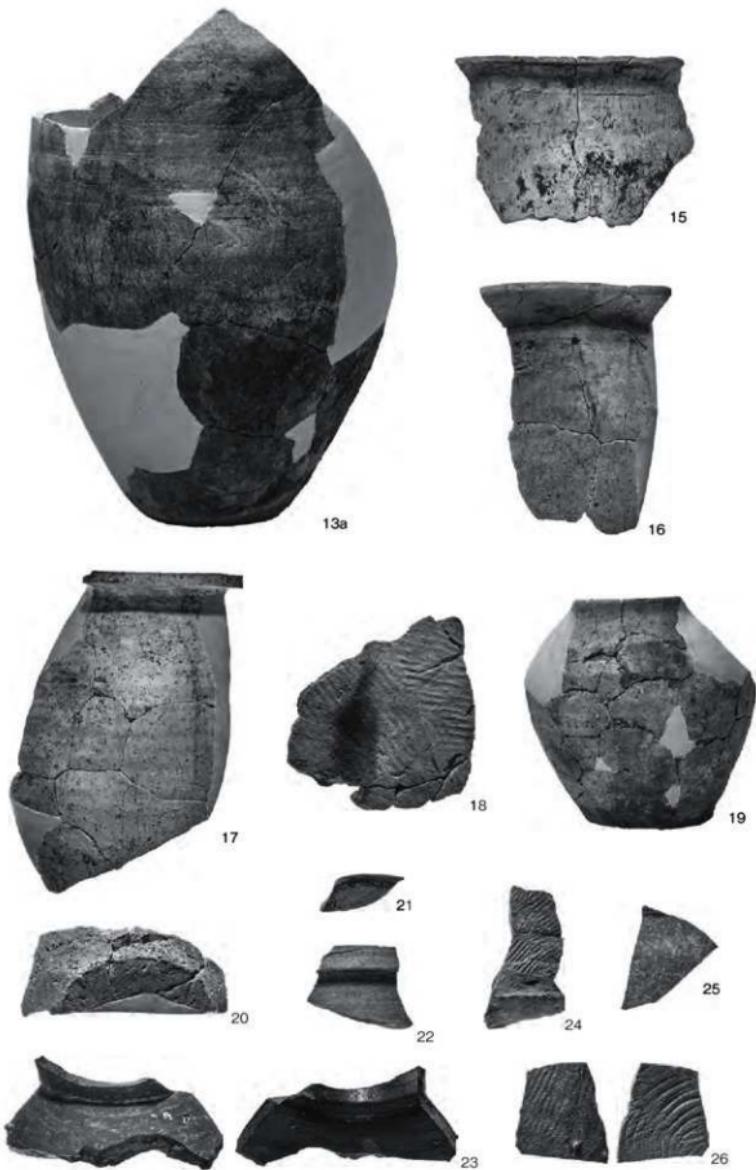
溝状遺構 SD 1 断面 a (北→)



溝状遺構 SD 1 断面 b (北→)



写真図版 6 溝状遺構・出土遺物 (1)



写真図版 7 出土遺物 (2)

(6) 米崎城跡

所 在 地 陸前高田市米崎町字館32番地 1 ほか
 委 託 者 陸前高田市（地域振興部水産課）
 事 業 名 防潮堤関連付帯道路
 発掘調査期間 平成31年4月8日～令和元年6月28日

遺跡コード・略号 KF68-2050・YSJ-19
 調査対象面積 2,770m²
 調査終了面積 2,770m²
 調査担当者 深浩二郎・西澤正晴・
 佐藤敬太

1 調査に至る経過

米崎城跡は、「漁港海岸災害復旧事業臨之沢漁港海岸災害復旧（臨之沢地区防潮堤）工事」の実施に伴い、その事業区域内に存在することから本発掘調査を実施することとなったものである。本事業は、平成23年3月11日に発生した東日本大震災の大津波により被災した臨之沢地区防潮堤の災害復旧を実施し、国土の保全及び住民の生命と財産を守ることを目的としたものである。事業対象地域である「臨之沢地区」については、土地所有者との交渉が重ねられ、その結果、防潮堤災害復旧に係る乗越道路用地として合意形成がなされた。この間、事業の対象地域に関わる埋蔵文化財の取扱いについても協議が重ねられた。岩手県においては、市町村主体の開発に関連する埋蔵文化財調査は、市町村教育委員会が実施することとなっているが、復興関連調査の増大と調査員不足の状況から、県教育委員会が協議・調整を行い、本調査においては公益財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。当事業の施工に係る埋蔵文化財の取扱いについては、平成30年11月13日付けで陸前高田市農林水産部水産課が陸前高田市教育委員会に対して、周知の埋蔵文化財包蔵地の該当区域について照会を行った。依頼を受けた陸前高田市教育委員会は、事業用地が周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲に該当するとして、工事に着手するには米崎城跡の発掘調査が必要になる旨を通知した。その結果を踏まえて、陸前高田市農林水産部水産課は、岩手県教育委員会及び陸前高田市教育委員会と協議し、調整を受けて、平成31年4月1日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(陸前高田市地域振興部水産課)



第1図 遺跡位置図

2 遺跡の位置と立地

米崎城跡は、陸前高田市市役所から南東約4kmに位置し、広田半島の基部にそびえる箱根山の尾根が南西に延び、広田湾に突出した小半島全城を館域としている。同城館の築城年代は不明であるが、天正年間の城主は高田城（東館跡）から拠点を移した浜田（千葉）安房守広綱と知られている。葛西家の重臣であった浜田安房守による天正16年のいわゆる「浜田の乱」は主家葛西氏が豊臣秀吉の小田原城攻めに参陣できず、奥州仕置によって改易された要因となり、その後は豊臣氏による奥州再仕置軍により城館の大半が破却され、城館としての機能は失われた。以降近世は伊達領として統治された。

周辺の遺跡には米崎城跡の館域南東側に米ヶ崎遺跡があり、縄文・弥生土器、土師器・貝殻等が出土している。また、北側にも縄文時代の遺跡である川西遺跡、奈良・平安時代の松峰I遺跡・神田遺跡、中世城館跡の脇沢館などがある。

今回調査を実施した範囲は半島付け根よりやや北側に位置する箇所で、同城館の縄張図（第3図参照）では中央部の高位面の平場に曲輪、北側斜面部に切岸、低位面に堀などの遺構が存在すると調査前に想定された。調査区の標高は約7~21mを測り、現況は宅地・畑地で西側の一部は切岸状の崖となっている。

3 グリッド設定・基本層序

調査区を網羅するグリッドはX=-110150、Y=71500に原点を設定し、100×100mのグリッドと5×5mの小グリッドの組み合わせを用いて行った。基本層序は調査区内で土層が良好に残存する調査区南東側に位置するII A 8 sグリッドの壁面で観察を行い、I~VII層に分層されることを確認した。調査区全体にわたり、造成による地形変形が大きく、II~VI層の堆積層が確認できる箇所は旧沢跡などの一部に留まる。

I a 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性弱 しまり中 植物

根多く含む表土

I b 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性弱 しまり中 植物

根多く含む 造成時の盛土

II 10YR2/1 黒色シルト 粘性弱 しまり中 植物根

多く含む 以下、自然堆積層

III 10YR2/2~2/3 黒褐色シルト 粘性・しまり中

明黄褐色テフラ（中揮 10YR6/6）20~40%含む

IV 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性・しまり中

V 10YR3/2 黒褐色シルト50%、10YR3/4 暗褐色

シルト50%混合 粘性・しまり中 径2~3mmの小
礫を1~2%含む

VI 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・しまり中 径2~

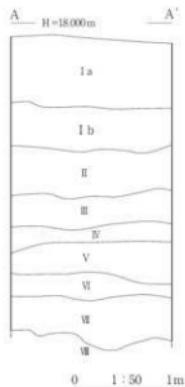
3mmの小礫を3~5%含む

VII 10YR4/4 褐色砂質シルト 粘性弱 しまり中 径

2~4mmの小礫を5~10%含む

VIII 25Y5/4 黄褐色砂 粘性なし しまり中 風化花崗

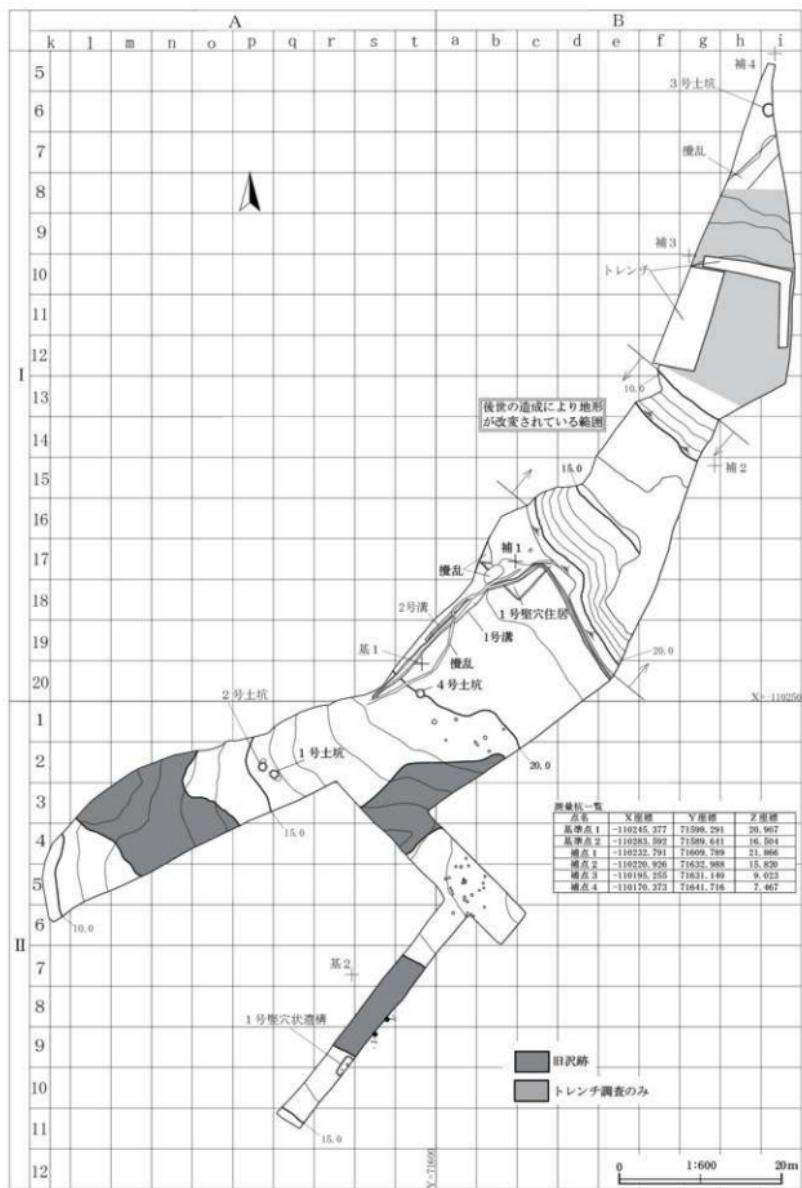
岩層



第2回 基本土層



第3図 繩張図と周辺地形



第4図 遺構配置図

4 調査の概要

調査は全体の地形を確認するため、雑物撤去を行い、調査前現況の写真撮影・地形測量を実施した。その後、岩手県教育委員会の試掘トレチを確認し、堆積状況を把握した後、調査区南側から順に重機による表土掘削→人力による検出・精査の順に作業を進めた。その結果、旧沢跡と北端の一部以外は、過去の造成工事による影響で、地形が大きく改変され、削平を受けていることが判明した。

(1) 遺構

今回の調査で縄文時代の土坑1基、古墳時代の竪穴住居1棟、近世の土坑1基、溝2条、時期不明の竪穴状遺構1基、土坑2基、柱穴状土坑36個を検出した。

1号竪穴住居跡（第5図、写真図版1・2）

調査区中央部の高位面北側の先端付近で検出し、一部が1号溝に切られる。また、遺構の大半が後世の造成の影響で削平され、残存するのは南西～南東の壁に沿って掘削されたと考えられる壁溝の一部と他に遺構内と推測される地点で検出した柱穴1個のみである。全体の規模は不明であるが、壁溝は幅10～16cm、床面からの深さは5cmほどを測る。柱穴は規模47×31cm、深さ11cmである。床面の一部に貼床の痕跡が認められる。壁溝埋土から5～6世紀代の土師器片が少量出土した。

1号竪穴状遺構（第6図、写真図版2）

調査区南東端II A 9 r・10 rグリッドに跨がって位置し、表土下VI層で検出した。遺構の大半は調査区外へと延びているが方形形状を呈すると推測される。検出した規模は2.68×91cm、検出面から床面までの深さは20～32cmを測る。床面は緩い凹凸があるがおよそ平坦で、壁溝等の附属施設はない。遺物は埋土から土師器の破片が少量、他に床面から長さ14～25cmの自然疊3点を検出した。床面から時期を特定しうる遺物が出土していないため、時期は不明である。

1号土坑（第6図、写真図版2）

調査区南西側の緩やかな斜面地、II A 2 p・2 qグリッドに跨って位置し、表土下VII層で検出した。重複する遺構はない。平面形状は円形基調を呈し、規模は開口部径104×94cm、底部径88×85cm、検出面から底面までの深さは36cmを測る。南西側の壁は、底面から緩やかにやや外傾して立ち上がり、北東側の壁は、緩やかにやや内湾しながら立ち上がる。底面はやや凹凸し、南西側が低くなっている。埋土は黒褐色砂質シルトを主体とする単層で、遺物が出土していないため、時期は不明である。

2号土坑（第6図、写真図版2）

調査区南西側の緩やかな斜面地、II A 2 pグリッドに位置する。1号土坑の北西に隣接し、表土下VII層で検出した。重複する遺構はない。平面形状は円形を呈し、規模は開口部径109×107cm、底部径78×77cm、検出面から底面までの深さは33cmを測る。壁は底面からやや外傾しながら立ち上がる。底面はやや傾斜し、南側が低くなっている。埋土は1号土坑に類似し、黒褐色砂質シルトを主体とする単層である。出土遺物はなく、時期は不明である。

3号土坑（第7図、写真図版3）

調査区北端の平坦地、IA 6 iグリッドに位置し、VII層で検出した。遺構の東側が調査区外に延びる。平面形状は円形で規模は開口部径164cm、底部径160cm、検出面から底面までの深さは69cmを測る。底面付近の壁面はオーバーハングしている。埋土は4層に分かれ、上層は黒色シルトを主体とし、壁際ににぶい黄褐色粘土質シルトが堆積する。中層はにぶい黄褐色シルトが微量含む黒褐色砂質シルト、下層はにぶい黄褐色砂質シルトをそれぞれ主体とする。埋土から縄文土器片が少量出土した。

4号土坑（第7図、写真図版3）

調査区中央付近の緩やかな斜面地、IA 20 tグリッドに位置し、表土下VII層で検出した。重複する

遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部径112×108cm、底部径82×80cm、検出面から底面までの深さは38cmを測る。北東側の壁は、底面から外反気味に立ち上がり、開口部付近で垂直に立ち上がる。南東側は緩く外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。埋土は2層に分かれ、黒褐色シルトを主体とし、底面の一部に暗褐色シルトが堆積する。時期は検出状況から近世と判断した。

1号溝（第7図、写真図版3）

調査区中央部の高位面北端のⅦ層で検出した。全長は約43mで、調査区外のⅠB20eグリッド地点から高位面縁に沿って調査区を横断するように北西方向に延び、16m地点から向きを斜面の傾斜に沿った南西方向へと変え、先端部が搅乱に切られ、消滅する。上端幅は35～109cm、下端幅10～50cm、検出面から底面までは最も深いところで35cmを測る。遺物は土師器片が少量混入しているが、1号堅穴住居からの混入と考えられる。

2号溝（第7図、写真図版3）

調査区中央部の高位面西側のⅦ層で検出した。北東～南西方向に向かって延び、北東側が現代の溝に切られている。検出した規模は長さ約426m、上端幅20～27cm、下端幅7～17cm、検出面から底面までは最も深いところで12cmを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。

柱穴状土坑（第8図、写真図版3）

調査区高位面の東側、ⅡB1aグリッド付近で8個、ⅡB5aグリッド付近で28個、計36個が検出された。規模は開口部径17～60cmで、配列に規則性はみられない。

（2）出土遺物

今回の調査で出土した主な遺物は縄文土器3150g、土師器・須恵器1691.7g、石器845.9gで他に陶磁器5点、銭貨3点、鉄製品1点が出土した。1・2は縄文土器、3・4は弥生土器の破片で器種はいずれも鉢類と考えられる。5～11は土師器で器種は壺・甕等で、6は底部破片で内面中央から放射状にミガキが施されている。12・13は須恵器で12は瓶の破片である。5・7・10～12の時期は5世紀後半～6世紀前半代に比定されると推測される。14～16は石器で14がスクレイバーで石材には石英が使用されている。15は敲石の可能性が考えられるが両端部に明確な敲打痕は認められない。16は磨石で両面に擦痕が認められる。17～21は陶器器片で17・18が瀬戸・美濃産の天目茶碗、19は美濃産の綠釉皿、20は瀬戸産の碗、21は肥前産の磁器皿である。22は把手状の形状を呈する鉄製品で可動部分に銭貨（寛永通寶）が1枚ずつはめこまれている。23～25は銭貨で永楽通寶である。

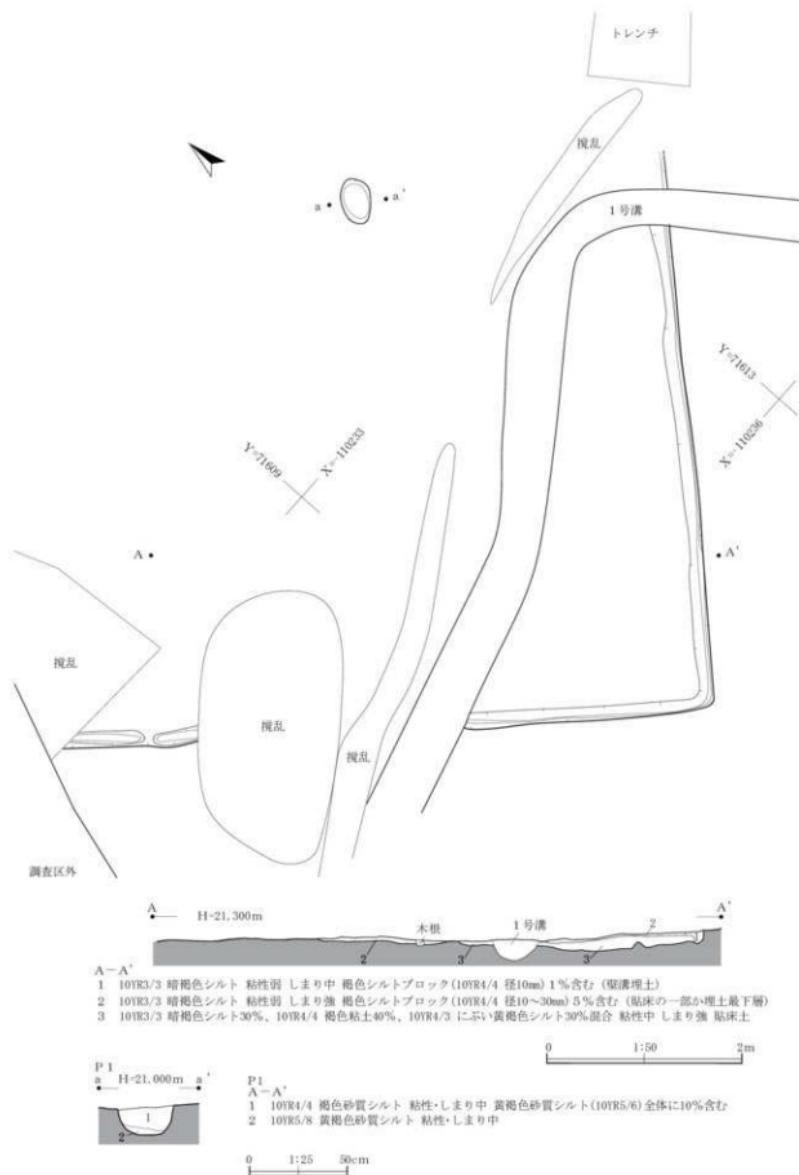
5まとめ

今回の調査で縄文～弥生・近世は遺構・遺物が少量見つかっていることから周辺域を含めて生活領域であったことが判明した。古墳時代は堅穴住居が検出されたことや遺物が点在して出土したことから集落を形成していた可能性が考えられる。また、中世の米崎城にかかる時代の遺構は見つかなかったが、当該期の遺物は天目茶碗の破片と永楽通寶が出土している。なお、後世の造成工事により、調査区の大半に削平と盛土が大規模に施され、当時の地形が大きく改変されていることから本調査区が城館の範囲に含まれていたかどうかの判断は今回の調査では出来なかった。

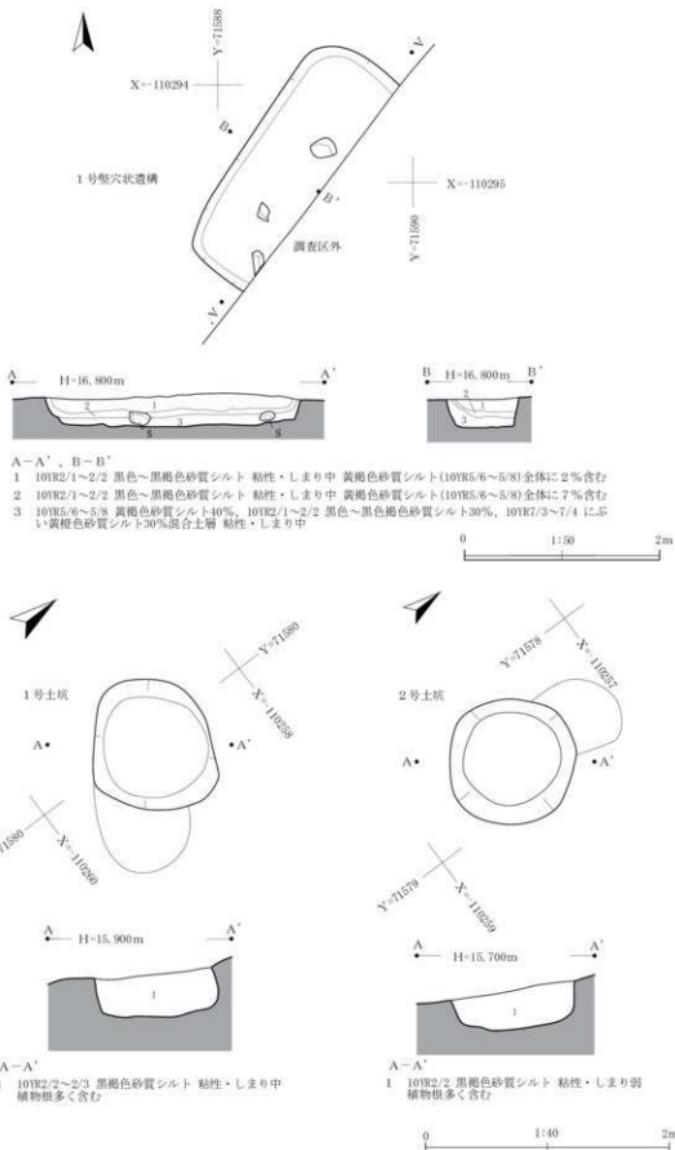
なお、米崎城跡令和元年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。

（引用・参考文献）

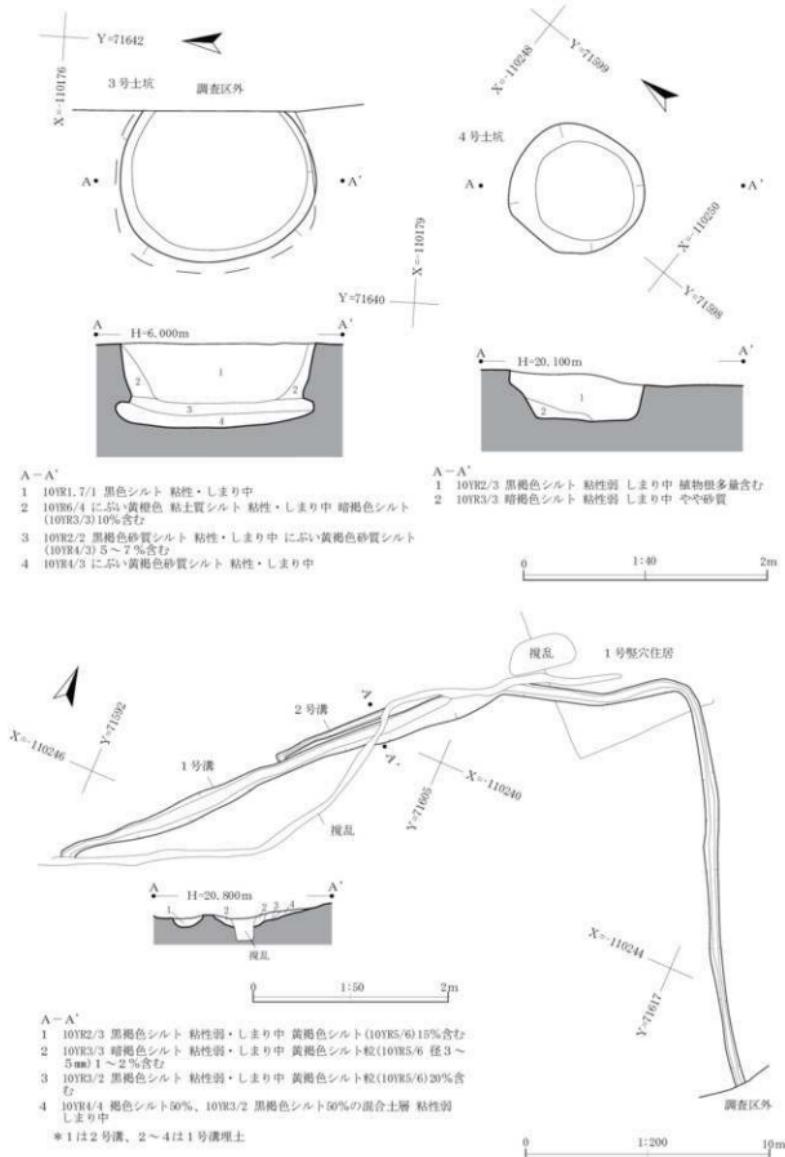
- 岩手県教育委員会 1986 『岩手県中世城跡分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集
2018 『高田城跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第691集
陸前高田市 2001 『陸前高田市史 第一巻 資料編（I）』
飯村均・室野秀文 2017 『東北の名城を歩く 北東北編』吉川弘文館



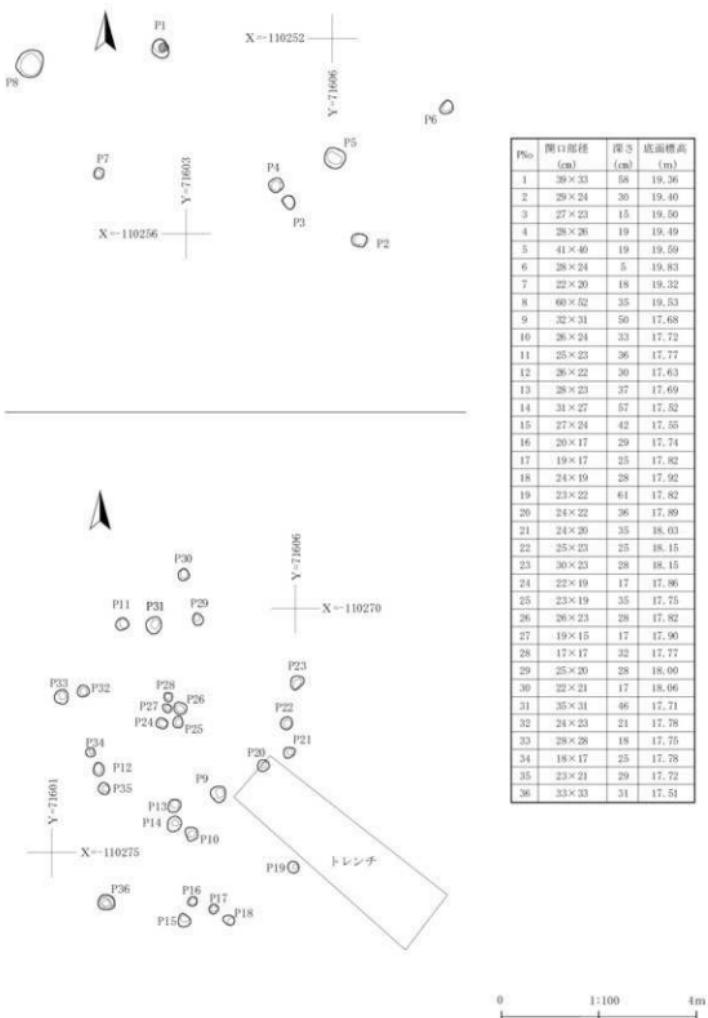
第5図 1号竪穴住居



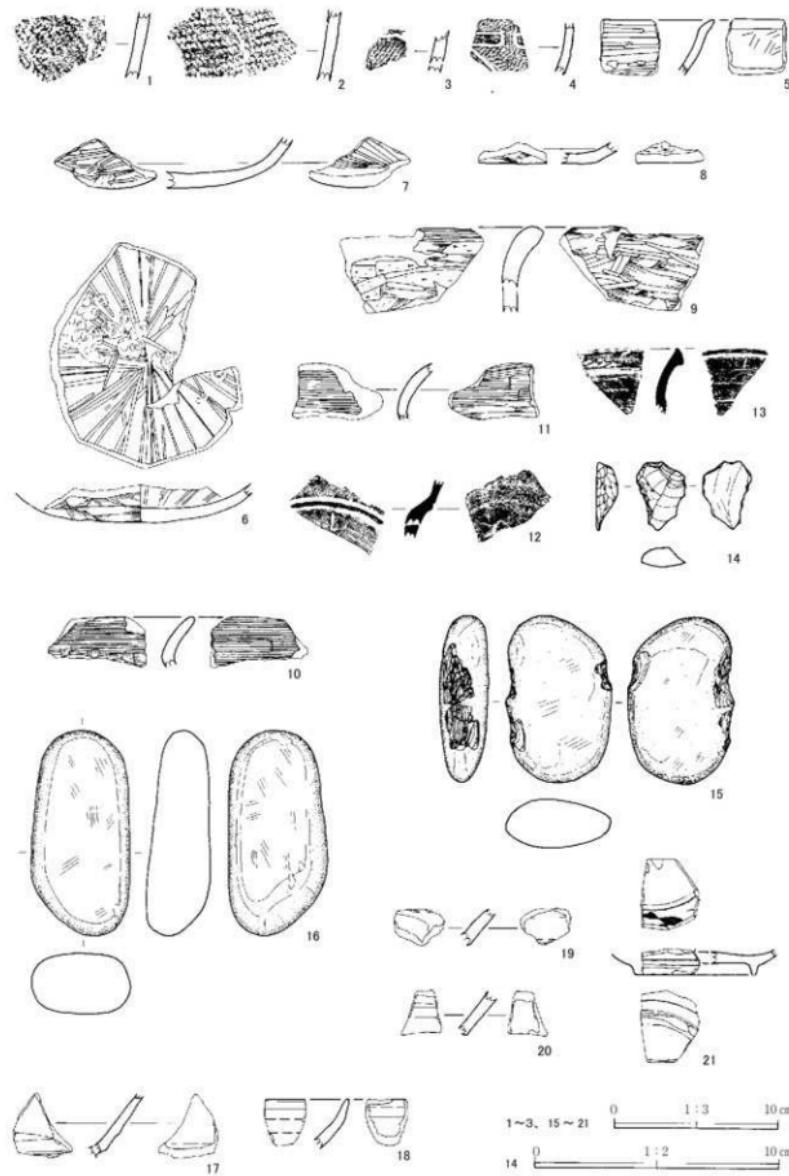
第6図 1号窓穴状遺構、1・2号土坑



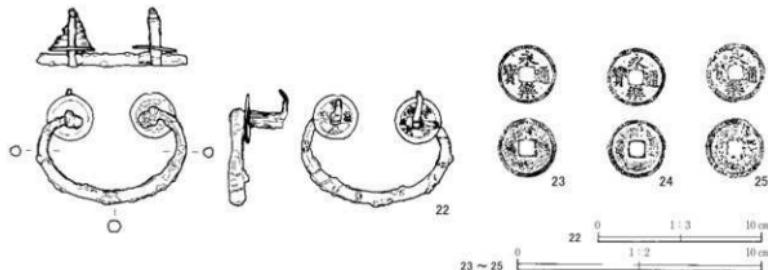
第7図 3・4号土坑、1・2号溝



第8図 柱穴状土坑



第9図 出土遺物 1



第10図 出土遺物2

縄文・弥生土器観察表

No.	出土地点・層位	器種	部位	外面文様等	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
1	3号土坑	深鉢	口縁部	結節彫文	—	—	—	
2	II A 3 n 田沢跡付近	深鉢	肩部	R L R	—	—	—	外面上に螺付有
3	II A 3 r トレンチ内	深鉢	口縁部	尤彫文、L 彫線	—	—	—	
4	I A 17 b 有壁	鉢形?	口縁部	沈彫文	—	—	—	

土師器・須恵器観察表

No.	出土地点・層位	種類	器種	部位	表面調査等			計測値(cm)	備考
					外面	内面	底部外面		
5	II A 9 r トレンチ内	土	环	口縁部	ミガキ	ナデ→ミガキ	—	<3.4>	—
6	II A 4 m II層	土	环	体部下～底部	ナデ、ミガキ	中心から放射状のミガキ	ケズリ→ミガキ	<2.5>	丸底
7	1号窓穴住居	土	环	体部下～底部	ミガキ	ミガキ	ケズリ→ミガキ	<3.0>	丸底
8	調查区内(地点不明)	土	环	体部下～底部	ミガキ	ミガキ、黒色処理	ミガキ	<1.2>	—
9	II A 4 m II層	土	器、斐織?	口縁部	ケズリ。	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	=	—
10	II A 5 I II層	土	器、斐織?	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	—	<3.1>	—
11	II A 2 g 楠丸内	土	器、斐織?	口縁部	ロクロナデ	ヨコナデ	—	—	—
12	II B 3 a I層中	陶	瓶	口縁部	波状文	ロクロナデ	—	—	—
13	II A 3 t トレンチ内	陶	斐?	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	—

石器観察表

No.	出土地点・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
14	II A 3 o トレンチ内	スクレイバー	2.8	2.0	0.8	4.10	石英	中生代 北上山地
15	II A 4 n 旧沢跡内	研石?	10.2	6.4	2.9	306.5	頁岩	中生代白堊紀 大船渡層群
16	II A 2 p II層	磨石	12.5	6.0	3.6	468.8	紋波岩	中生代白堊紀 大船渡層群

陶器観察表

No.	出土地点・層位	種類	地	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	時期	備考
17	II A 4 n I層中	陶器	灰戸・米透	天日茶碗	体部下～底部	—	<4.8>	—	15～16 C	
18	II A 4 m III沢跡内	陶器	灰戸・米透	天日茶碗	口縁部	—	<2.2>	—	15～16 C	
19	II A 9 r トレンチ内	陶器	米透	縞粗粒	体部	—	—	—	16～17 C	縞粒
20	II A 9 r トレンチ内	陶器	粗	碗	体部	—	—	—	17～18 C	
21	II A 7 s I層中	粗器	肥前	瓶	底部	—	<1.6>	(7.4)	18 C	二重輪鉢、草花文

鉄製品観察表

No.	出土地点・層位	素材	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ	重量(g)	備考
22	II B 19 b トレンチ内	鐵、銅、木質	把手	6.1	9.1	3.4	382	左右可動部に鋼線(寛永通寶)あり

錢貨観察表

No.	出土地点・層位	素材	銘名	初鑄年号	直径(A) / (B) mm	内径(C) / (D) mm	厚度(mm)	重さ(g)	備考
23	II B 1 a	銅	永樂通寶	1408年	24.31	24.35	20.03	20.46	114～127 216
24	II B 20 b 楠丸内	銅	永樂通寶	1408年	24.35	24.51	21.25	20.34	115～127 243
25	II B 19 c	銅	永樂通寶	1408年	24.53	24.40	20.10	20.25	126～137 274



遺跡全景・S→



調査区全景・S→



調査区南側高位面・N→



調査区南端完掘・N E→



調査区北端完掘・N→



調査区北側斜面部・N→



基本土層・NW→



1号整穴住居全景・SW→

写真図版1 航空写真、調査区、基本土層、検出遺構 1



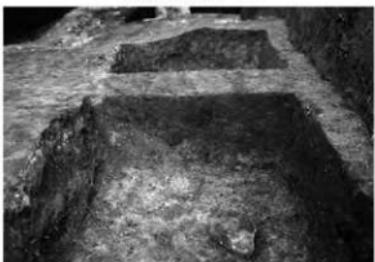
1号竪穴住居断面・SW→



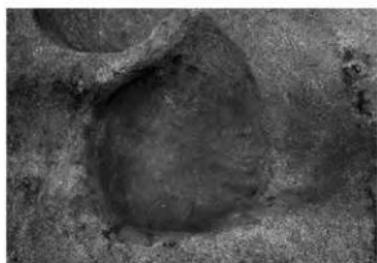
1号竪穴状遺構全景・SW→



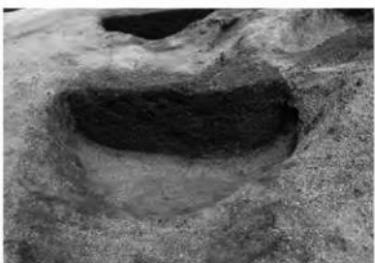
1号竪穴状遺構横断面・W→



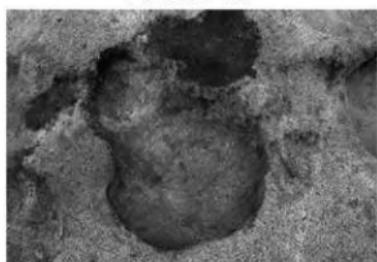
1号竪穴状遺構断面・SW→



1号土坑完掘・SW→



1号土坑断面・SE→



2号土坑完掘・SW→

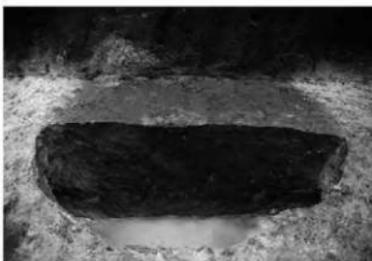


2号土坑断面・SE→

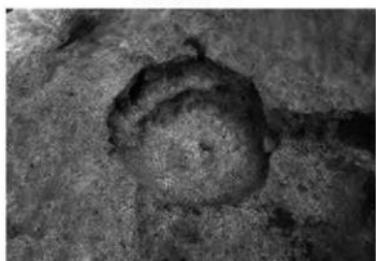
写真図版2 検出遺構2



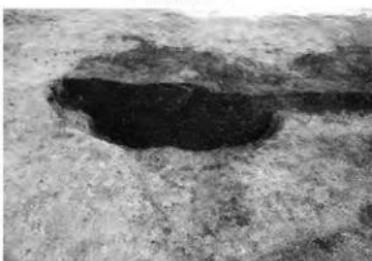
3号土坑完掘・E→



3号土坑断面・W→



4号土坑完掘・S E→



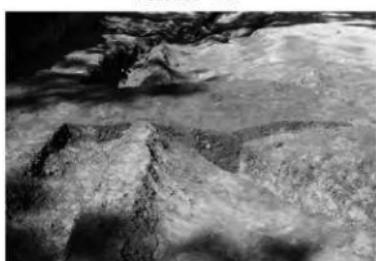
4号土坑断面・SW→



1号溝北側・S E→



1・2号溝・SW→

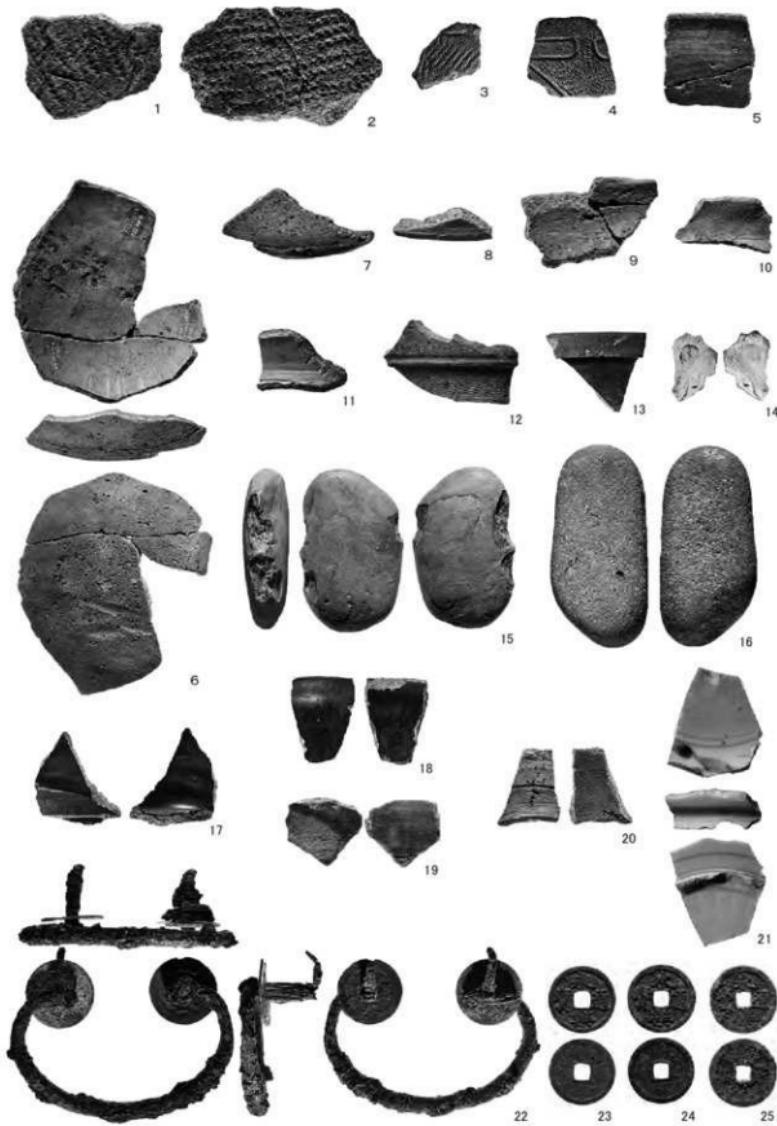


1・2号溝断面・SW→



柱穴状土坑・N→

写真図版3 検出遺構3



写真図版4 出土遺物

II 発掘調査概報

凡　例

- ・遺跡位置図は、1:50,000である。国土地理院2001「数値地図－岩手」を使用した。
- ・本書で記載されているコンテナの大きさは内寸で下記のとおりである。
 - 大コンテナ：42×32×30cm
 - 中コンテナ：42×32×20cm
 - 小コンテナ：42×32×10cm
- ・本書では、遺構名称を簡素化し、遺構名称末尾に付す「跡」を省略する。
(例) 堪穴住居跡→堪穴住居、掘立柱建物跡→掘立柱建物、溝跡→溝

(7) 北条館跡

所 在 地 紫波郡紫波町大字北日詰城内105番地2(ほか)
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手川国道事務所
 事 業 名 北上川緊急治水対策事業
 発掘調査期間 平成31年4月8日～令和元年11月27日
 調査終了面積 4,800m²
 調査 担 当 者 村田淳・高木晃・阿部勝則・西澤正晴・
 福島正和・川村英・河村美佳・酒井野々子
 主要な時代 平安・中世



遺跡の立地

遺跡は、JR東北本線日詰駅から東へ約2km、北上川の支流である平沢川の西岸に位置し、北上川により形成された河岸段丘上に立地する。遺構検査面の標高は93m前後で、調査前は畠地等である。昨年度からの継続調査であり、調査区は昨年度調査区の北側に隣接する。

調査の概要

検出遺構は、古代（9～10世紀）の竪穴住居2棟、古代（12世紀）の土坑5基、溝3条、中世（16世紀）の竪穴建物16棟、掘立柱建物約40棟、柵列または塙12基、塙3条、土橋1箇所、土塁基底部及び崩壊土1箇所、中世～近世初頭の井戸1基、炉27基、古代～中世および時期不明の土坑64基、溝24条、柱穴状土坑3266個（掘立柱建物を構成するもの含む）である。

出土遺物は、古代の土師器、須恵器、かわらけ（ロクロ・手づくり）、中国産磁器（白磁・青磁）、国産陶器（渥美・常滑・須恵器系）大コンテナ3箱、中世の中国産磁器（白磁・青磁・染付）、国産陶器（瀬戸美濃・信楽・产地不明等）大コンテナ25箱、石臼・石鉢中コンテナ3箱、古代～中世の金属製品（刀装具・刀子・鋤先・釘等）小コンテナ1箱、石器・石製品（砥石・敲磨器類）中コンテナ5箱、錢貨（景德元寶・祥符通寶・天聖元寶・開元通寶・皇宗通寶・元豐通寶・洪武通寶・永樂通寶・無文錢）約60枚、近世の陶磁器中コンテナ1箱、寛永通寶1枚である。

調査の結果、本遺跡が戦国時代（16世紀後半代が主体）の平城であり、遺構・遺物の遺存状況が良好であることが確認された。この他、戦国時代よりは少ないが12世紀（奥州藤原氏時代）の遺構・遺物も検出されていることから、本遺跡の西側約1kmに位置する比爪館遺跡との関連が窺われる。



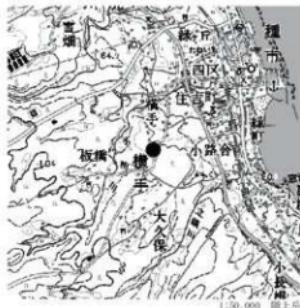
調査区中央遠景（北東から）



12世紀溝の遺物出土状況（北東から）

(8) いたばし II 遺跡

所 在 地 九戸郡洋野町種市第21地割字板橋地内
委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事 業 名 三陸沿岸道路
発掘調査期間 平成31年4月8日～令和元年5月30日
調査終了面積 3.270m²
調査担当者 野中裕貴・八木勝枝・小野寺永人
主要な時代 繩文



遺跡の立地

遺跡は、洋野町役場から南西約1.3kmに位置し、オーシャン・ビュー・スタジアムの東側に隣接する。南側は荒津内遺跡と接する。東側へと延びる丘陵上の緩斜面地に立地しており、標高は58～65mである。調査区中央には谷地形が広がる。調査前は山林であった。前年度からの継続調査であり、今年度は前年度調査区の西側に隣接する3.270m²の調査を行った。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代後期初頭～前葉の竪穴住居1棟、貯蔵穴を含む土坑9基、陥し穴状遺構8基である。陥し穴状遺構はすべて溝状である。

出土遺物は、縄文土器大コンテナ0.5箱、石器中コンテナ1.5箱、陶磁器数点、土偶1点などである。

縄文土器の中には、外面に爪形文が施された土器片4点が含まれ、その特徴から縄文時代草創期の土器と考えられる。爪形文は矢羽根状に施文される。4点の内、2点は口縁部である。遺構は確認できなかったが、これら4点の土器片は、十和田南部火山灰を多量に含んだ層の下位より出土した。

今回の調査では、縄文時代後期初頭～前葉の集落が前年度調査区より西側に広がることが判明した。集落を構成する竪穴住居と貯蔵穴は、尾根頂部から裾にかけて分布する。また、2箇年の調査で、調査区中央の谷部に溝状の陥し穴状遺構が存在し、谷地形に沿って狩猟場が設けられていたことが明らかになった。

さらに、東北地方でも類例の少ない縄文時代草創期の爪形文土器の出土が特筆される。現在、土器外面に付着する炭化物の年代測定を依頼中である。



調査区遠景（東から）



出土した爪形文土器

(9) 北玉川遺跡

所 在 地 九戸郡洋野町種市第14地割字北玉川地内
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸沿岸道路
 発掘調査期間 令和元年5月30日～6月26日
 調査終了面積 1,379m²
 調査担当者 野中裕貴・八木勝枝
 主要な時代 繩文



遺跡の立地

遺跡は、洋野町役場から南約2.7kmの場所に位置し、東流する和座川南岸の丘陵上に立地する。標高は60～70mである。調査前は山林であった。今年度は3箇年目の調査で、平成29年度調査区の東西に隣接する調査区、計1,379m²の調査を行った。

調査の概要

検出遺構は、溝状の陥し穴状遺構1基である。出土遺物は、縄文土器・石器まとめて小コンテナ1箱である。

今年度の調査では、東西に分かれる調査区の内、東側調査区の和座川へと緩やかに下る斜面部で、溝状の陥し穴状遺構1基を確認した。平成29年度の調査でも同様の遺構が5基見つかっていることから沢沿いに設けられた狩猟場として機能していたことが考えられる。



調査区遠景（南から）

(10) ふたごじょう
二子城跡

所 在 地 北上市二子町坊館地内
委 託 者 岩手県企業局
事 業 名 第一北上中部工業用水道浄水場建設事業
発掘調査期間 平成31年4月4日～令和元年7月31日
調査終了面積 10,901m²
調査担当者 北田 繁・高木 晃・丸山直美・河村美佳
主要な時代 縄文・古代～中世



遺跡の立地

遺跡は、北上市北東部の北工業団地東側に位置しており、JR東北本線村崎野駅から北東約2kmの距離にある北上川西岸の河岸段丘上に立地している。現況は山林で、標高は78～80mである。

調査の概要

昨年度に引き続き、2箇年目の調査である。今年度の調査では、縄文時代前期・後期・晩期の堅穴住居4棟、土坑79基、陥し穴状遺構36基、土器埋設遺構5基、焼土遺構12基、粘土採掘坑2基、古代～中世の堅穴状遺構1棟、近代～近現代の溝24条、柱穴状土坑204個を確認した。出土遺物は、縄文土器大コンテナ25箱、石器中コンテナ11箱、土製品1点、中近世陶磁器6点である。

今回は、昭和63年に当センターで調査を行った坊館跡の南北に隣接する地点を調査したが、中世和賀氏の本城と伝えられる二子城（坊館跡）存続期の明確な遺構は認められなかった。二子城に関連する該期の遺構は調査区南側に広がると見られ、今回の調査区北西側で見つかった谷地形によって自然の要害を呈していたと推察される。縄文時代の遺構は、平成元年調査の隣接する物見崎遺跡でも複数確認されており、谷に沿って狭い段丘上に分布していたと考えられる。



調査区全景（北から）

(11) 境・山下遺跡

所 在 地 奥州市江刺稻瀬字山下616-7ほか
 委 託 者 県南広域振興局土木部道路整備課
 事 業 名 主要地方道一関北上線山下地区地域連携道路整備事業
 発掘調査期間 令和元年9月1日～11月11日
 調査終了面積 600m²
 調査担当者 村上 拓・溜 浩二郎・佐藤敬太
 主要な時代 繩文・平安



遺跡の立地

遺跡は、JR東北本線六原駅の北東約2.3kmに位置し、北上川左岸に広がる沖積面(標高50m前後)に立地する。北上市域では境遺跡、奥州市域では山下遺跡としてそれぞれ登録されているが、本質的には一連の遺跡と考えられる。当該事業に係る調査対象範囲が両市域に連続することから、今次調査においては便宜上「境・山下遺跡」と呼称している。本年度は事業対象である県道の西縁に沿って、北上市立照岡小学校校地の南東隅から南に約150mの区間を調査した。なお、調査区の幅員は全体を通して2～4mと極めて狭小であり、調査区壁面の保全等、安全管理上の観点から、掘削深度は概ね-150cmまでとした。これより下位の堆積状況については、要所に設けた試掘坑により確認を行った。

調査の概要

検出遺構は、堅穴住居2棟、土坑1基、溝1条、柱穴状土坑2個である。堅穴住居は一部を精査したのみで、全体形状ほか詳細は不明だが、北側の1棟は焼土生成箇所と焼土塊・遺物片・炭化物集中する土坑を伴っており、遺物から平安時代前期のものとみられる。もう1棟は、床面直上が木炭細片に覆われており、壁際に柱穴が並ぶ形態から中世の堅穴建物の可能性がある。他の遺構は帰属時期を示す遺物を伴っておらず詳細は不明だが、層位の観点から平安時代以降に属するものと考えられる。

出土遺物は、土師器壺・甕、須恵器壺・甕(以上小コンテナ1箱)、有溝砥石、焼粘土塊等である。これらは調査区北端部の堅穴住居(主に付属土坑内)から集中して出土したものである。このほか調査区内で数点の繩文土器片(詳細時期不明)を採集している。二次的な堆積に伴うものと判断される。

遺構・遺物は調査区北部に集中する傾向が認められ、少なくとも平安時代の遺構・遺物の分布密度は、より北側に高いと推測される。次年度以降、隣接区域への調査を継続することとしている。



調査区全景（南→）



平安時代堅穴住居（北→）

(12) 下浜民遺跡
しもしふたみ

所 在 地 一関市大東町浜字闇ノ上36番地 2地先ほか
委 託 者 県南広域振興局土木部一関土木センター
事 業 名 地域連携道路整備事業（一般国道343号浜民地区）
発掘調査期間 令和元年7月1日～7月12日
調査終了面積 123m²
調査担当者 潤 浩二郎・村上 拓・佐藤敬太
主要な時代 繩文・平安・近世



遺跡の立地

遺跡は、JR大船渡線沼沢駅から北方向に約4.5kmに位置し、砂鉄川の右岸の段丘上に立地する。標高は約90m前後で、調査前の現況は畑地および宅地である。

調査の概要

検出遺構は、溝5条で時期は不明である。

出土遺物は、縄文土器、土師器、石鏃、剥片石器、陶磁器である。



調査区全景・上が北

(13) 勝善遺跡

所 在 地 一関市大東町大原字勝膳52番地1 地先
 委 託 者 県南広域振興局土木部一関土木センター
 事 業 名 地域連携道路整備事業（一般国道343号洪民地区）
 発掘調査期間 令和元年7月9日～8月30日
 調査終了面積 756m²
 調査担当者 潤 浩二郎・村上 拓・佐藤敬太
 主要な時代 繩文



遺跡の立地

遺跡は、JR大船渡線沼沢駅から北東方向に約4.5kmに位置し、砂鉄川左岸の河岸段丘上に立地する。標高は約120m前後で、調査前の現況は水田である。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代晩期の石圓炉2基、時期不明の土坑2基、柱穴状土坑45個である。

出土遺物は、土器大コンテナ3箱、石器中コンテナ1箱、磁器1点である。

調査の結果、縄文時代晩期の集落の一部であることが確認された。



調査区全景



調査区北側



石圓炉全景



調査区南側

(14) 根城館跡

所 在 地 一関市大東町大原字館下26番地ほか
委 託 者 県南広域振興局土木部・一関土木センター
事 業 名 地域連携道路整備事業（一般国道343号洪民地区）
発掘調査期間 令和元年9月2日～9月30日
調査終了面積 950m²
調査担当者 濱 浩二郎・佐藤敬太
主要な時代 中世



遺跡の立地

遺跡は、JR大船渡線沼沢駅から北東方向に約4.3kmに位置し、砂鉄川左岸の丘陵地上に立地する。標高は約117～139m、調査前の現況は山林で、今回の調査箇所は根城館の隣接地である。

調査の概要

調査区高位面の曲輪と想定される平場状の緩斜面部分と低位面に各2箇所のトレンチを入れたが、遺構・遺物は見つからなかった。



遺跡全景



調査区遠景



調査区全景



平場トレンチ断面

(15) 成田岩田堂館跡

所 在 地 北上市成田1地割37番1ほか
 委 託 者 北上市
 事 業 名 北上市工業団地整備事業
 発掘調査期間 平成31年4月5日～令和元年11月28日
 調査終了面積 62,386m²
 調査 担 当 者 杉沢昭太郎・星 雅之・羽柴直人・瀬 浩二郎・
 　　村上 拓・丸山直美・村木 敏・川又 晋・
 　　北田 純・中島康佑・佐藤敬太・小野寺永人



主 要 な 時 代 繩文・弥生・平安・中世・近世

遺跡の立地

遺跡は、JR村崎野駅から北東23kmのところに位置し、北上川西岸に形成された河岸段丘縁辺部に立地する。標高は82～84mで概ね平坦な地形である。調査前は果樹園および雑木林であった。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代の竪穴住居1棟、陥し穴状遺構39基、土坑11基、弥生時代の焼土11基、土器埋設遺構1基、平安時代の竪穴住居8棟、炭窯4基、溝5条、中世後半の堀2条、土壘4条、出入口施設2箇所、掘立柱建物17棟、墓塚28基、土坑15基、炉・焼土2基、柱穴状土坑1100基、近世の掘立柱建物1棟、屋外炉10基、溝10条、時期不明の土坑17基、溝18条、焼土3基、性格不明遺構4基である。

出土遺物は、縄文土器・弥生土器が大コンテナ2.5箱、縄文・弥生時代の石器が大コンテナ1箱、平安時代の土師器・須恵器が大コンテナ2箱、平安時代から中世後半の金属製品が大コンテナ0.1箱、中近世の陶磁器と銭貨が大コンテナ0.1箱、近世の獸骨が大コンテナ4箱である。

本遺跡は、中世和賀氏の居城である二子城の北端部に立地する。調査の結果、遺跡内からは堀と土壘に囲まれた平場が2箇所で見つかった。遺跡南側では東西70m、南北140mの範囲を堀と土壘で取り囲み、内部には大小の掘立柱建物が確認され、16世紀の陶磁器が出土した。北側は嘗て八森館と呼ばれ、東西55m、南北60m以上となる堀が巡り、その内部から土壘と複数の掘立柱建物が検出され、16世紀の陶磁器が出土した。この他、11世紀の遺構と遺物も一定量見つかっている。



両側に土壘のある堀



掘立柱建物（西から）

(16) ふたごじょう
二子城跡

所 在 地 北上市二子町字十文字72-1ほか
委 託 者 北上市
事 業 名 北上市特定公共下水道終末処理場整備事業
発掘調査期間 令和元年7月16日～10月31日
調査終了面積 9,000m²
調査担当者 羽柴直人・丸山直美・河村美佳
主要な時代 中世



遺跡の立地

遺跡は、北上市北東部の北工業団地東端付近に位置しており、JR東北本線村崎野駅から北東約2kmの距離にある北上川西岸の河岸段丘及び丘陵に立地している。現況は山林で、標高は80～92mである。今年度県企業局事業に伴う二子城跡調査区とは、約200m離れた地点である。

調査の概要

検出遺構は、中世の堀2条である。堀にはそれぞれ土塁が付随している。出土遺物は、縄文土器深鉢片が1点である。摩耗しており、周囲からの混入物と推測される。

中世館二子城に属する堀を2条検出した。これらは、二子城を構成する郭に属するもので、それぞれが異なる郭の西辺を画するものである。南側の堀SD1は明瞭な土塁を伴い、今後調査予定の南側に連続している。北側の堀SD2は近年の埋め立てが認められ、埋め立ての際に土塁が崩されたものと看取される。堀SD2は調査範囲外北側道路方面に連続している。

今回確認された二箇所の郭は、これまで確認されていない郭であり、二子城の全体構造を明らかにする上で、新たな知見を得たことになる。



二子城跡全景

報告書抄録

ふりがな	れいわがんねんどはくつちょうさはうこくしょ							
書名	令和元年度発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第721集							
編著者名	野中裕貴							
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯田間 11 地割 185 番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦 2020 年 3 月 19 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ° °	° ° °			
沼里遺跡	岩手県 宮古市 津軽石 第6地割 ほか	03202	LG53-1225	39 度 34 分 50 秒	141 度 55 分 54 秒	2019.07.01 ～ 2019.07.31	305m ²	三陸沿岸道 路開通発掘 調査
所 収 遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
沼里遺跡	集落	縄文		土器、剥片				
		古代	堅穴住居	3 棟	土師器、須恵器、角釘、 鉄滓			
		中世	堅穴建物	1 棟				
		時期不明	土坑 柱穴状土坑	1 基 1 個				
要約	今回の調査では、平成 28 年度調査区の東側にあたる尾根とその南北に広がる斜面部を主に調査し、前回の調査で確認した奈良時代の集落が東側へと広がることが判明した。また、尾根南側の谷部では、少量ながらも鉄滓が出土しており、周辺に製鉄関連遺構の存在が想定される。							

*緯度・経度は世界測地系(2011)による数値である。

報告書抄録

ふりがな	れいわがんねんどはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	令和元年度発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第721集							
編著者名	野中裕貴							
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦 2020 年 3 月 19 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	'			
根井沢穴田IV 遺跡	岩手県 宮古市 津軽石 第19地割 ほか	03202	LG53-2201	39 度 34 分 25 秒	141 度 55 分 39 秒	2019.08.01 ～ 2019.08.28	158m ²	三陸沿岸 道路関連 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
根井沢穴田IV 遺跡	集落	縄文	堅穴住居	1 棟	土器、剥片			
		近・現代	家畜墓	2 基	蹄鉄			
		時期不明	土坑	2 基				
要約	今回の調査では、平成 28 年度調査区の東側となる緩斜面を主に調査し、前回の調査で確認した近現代の家畜墓群が東側へと広がることが判明した。また、縄文時代前期初頭の堅穴住居 1 棟を検出しており、本遺跡における当該期の居住痕跡がはじめて確認できた。							

*緯度・経度は世界測地系(2011)による数値である。

報告書抄録

ふりがな	れいわがんねんどはくつちょうさはうこくしょ							
書名	令和元年度発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 721 集							
編著者名	星 雅之 小野寺永人							
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦 2020 年 3 月 19 日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
伝吉Ⅱ遺跡	岩手県 九戸郡 洋野町 種市 第 44 地割 地内	03507	IF37-2392	40 度 25 分 48 秒	141 度 40 分 21 秒	2019.04.08 ～ 2019.05.30	2.940m ²	三陸沿岸 道路開進 発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
伝吉Ⅱ遺跡	散布地 集落 狩猟場	縄文	堅穴住居 土坑 陥穴状遺構	1 棟 9 基 5 基	土器 石器	土器は縄文時代前期前葉と後期初頭。 堅穴住居出土炭化物の年代測定を実施		
要約	今回の調査地は、遺跡の周知範囲から大きく離れた地点で、試掘調査の結果から遺跡範囲が拡大された。調査成果としては、縄文時代前期前葉及び後期初頭～後葉の活動痕跡が明らかとなった。堅穴住居は前期前葉期で大型住居の粗形なものと思われる。埋土下位～床面で出土した炭化材サンプル 3 点の年代測定結果から、 $5720 \pm 30 \sim 5740 \pm 30$ yrBP の測定値が得られた。土坑は後期のプラスコビットと、断面浅皿状の土坑で前期と推定されるものに大別される。溝状を呈する陥穴状遺構は、形状、規模、配置など、全般に規格性が高い。							

*緯度・経度は世界測地系(2011)による数値である。

報告書抄録

ふりがな	れいわがんねんどはくつちょうさはうこくしょ							
書名	令和元年度発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 721 集							
編著者名	北田 純							
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦 2020 年 3 月 19 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
岩洞湖 E 遺跡	岩手県 盛岡市 敷川 字龜橋 地内	03201	KF60-0285	39 度 49 分 36 秒	141 度 19 分 31 秒	2019.09.01 ～ 2019.10.24	1,233m ²	国営岩手 山麓農業 水利事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
岩洞湖 E 遺跡	散布地	縄文	沢跡 1 条					
		近現代	溝跡 1 条					
要約	岩洞湖の北西端に位置する遺跡で、調査から縄文時代に埋没した沢跡 1 条と、近現代と考えられる溝跡 1 条を確認した。調査区内からの出土遺物はないが、浸食された湖岸からは縄文時代前期～晚期、弥生時代前期の遺物を表面採集することができる。また、縄文時代の堅穴住居・土坑・陥し穴状遺構などの遺構が認められ、遺跡の様相を窺い知ることができる。							

*緯度・経度は世界測地系(2011)による数値である。

報告書抄録

ふりがな	れいわがんねんどはくつちょうさほうこくしょ							
書名	令和元年度発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第721集							
編著者名	村上 拓							
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯田11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦 2020年3月19日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上矢次I遺跡	岩手県 紫波郡 矢巾町 大字上矢次 第4地割 32-1ほか	03322	LE46-0244	39度 37分 13秒	141度 8分 17秒	2019.04.08 ～ 2019.06.14	1,700m ²	一級河川 岩崎川筋 上矢次地区 河川改修 (その9)
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上矢次I遺跡	その他	平安時代	柱穴 土坑 小土坑 焼土遺構 溝状遺構	48個 1基 1基 1基 1条	土師器壊・甕 須恵器壊・甕			
要約	岩崎川改修事業に伴う調査である。 厚い河川堆積層に置かれた9世紀前半期の遺物・遺構群を検出した。							

*緯度・経度は世界測地系(2011)による数値である。

報告書抄録

ふりがな	れいわがんねんどはくつちょうさはうこくしょ							
書名	令和元年度発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 721 集							
編著者名	瀬 浩二郎 佐藤敬太							
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦 2020 年 3 月 19 日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	'			
米崎城跡	岩手県 陸前高田市 米崎町 字船 32 番地 1 ほか	03210	KF68-2050	39 度 00 分 14 秒	141 度 39 分 35 秒	2019.04.08 ～ 2019.06.27	2770m ²	防潮堤開削 付帯道路 建設事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
米崎城跡	城館跡 集落跡 遺物散布地	绳文・弥生	土坑	1 基	土器、石器			
		古墳	堅穴住居	1 棟	土師器、須恵器			
		中世			天目茶碗、銭貨(永楽通寶)			
		近世	土坑	1 基	陶磁器、鉄製品			
	時期不明	堅穴状遺構	1 基					古墳時代中期～後期の土器が出土した。
		土坑 溝 柱穴状土坑	2 基 2 条 36 個					
要約	調査区の大半が後世の造成工事の影響で、当時の地形が大きく改変され、遺構が見つかからなかつたことから今回の調査範囲が中世の米崎城の城域に含まれていたかどうかの判断は出来なかつたが、当該期の遺物は天目茶碗の破片と永楽通寶が出土している。他に古墳時代の堅穴住居と遺物が調査区内に点在して出土したことから集落が存在していた可能性が想定される。							

*緯度・経度は世界測地系(2011)による数値である。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第721集

令和元年度発掘調査報告書

印 刷 令和2年3月13日

発 行 令和2年3月19日

編 集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電 話 (019)638-9001

FAX (019)638-8563

発 行 (公財)岩手県文化振興事業団

〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号

電 話 (019)654-2235

FAX (019)625-3595

印 刷 株式会社五六堂印刷

〒020-0021 岩手県盛岡市中央通3-16-15

電話 (019)654-5610

